

701
113₂



0023074000

0023074-000

701-113

(701-113₂)

經濟政策体系

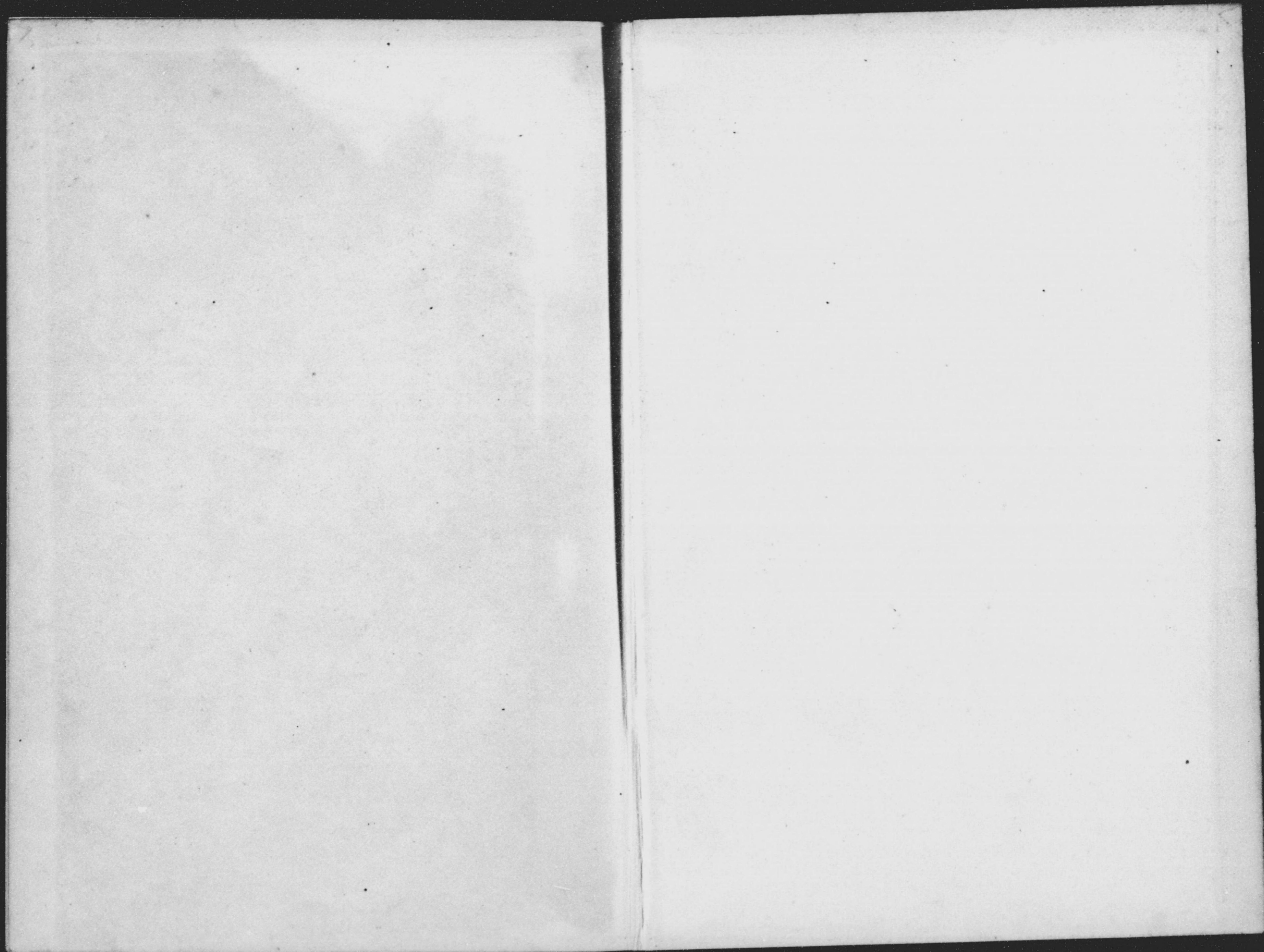
河津暹・著

有斐閣

第2卷

昭和11

ADD



農業と農業政策
昭和二十一年
農林省
印刷

東京帝國大學
名譽教授
法學博士

河津 暹 著

〔經濟政策體系
第一卷〕

農業と農業政策

東京書肆有斐閣

701
11370

序

我國の農業は今正に危殆の状態にある。其の生産状態が危殆にあると同時に農業家の経済状態も亦危殆にある。農村が頻りに其の窮乏を訴え之が救済を乞ふて已まざるは洵に故なしとしない。農村にして窮乏其の極に達し農民の生活にして困憊に陥らんか、我國経済は大に伸展すること能はず、國防を全かしむること難からざるを得ない。我等は農村の前途につき最も注目し、之が更生を計らなければならぬ。

現今の経済機構の下に於て農業の危殆を救ひ農家経済の危殆を救はんと欲せば獨り農業の見地よりのみ考察をしてはならない、より廣き立場より考察しなければならぬ、穀物を初め農産物の如きも唯に生産物としてのみ考察するを許さない、商品として考察しなければならぬ、農村問題の解決も農村のみの問題として考察することを得ない、國民経済の構成分子として國民経済の見地から解決しなければならぬ。世上農業政策に關する著書決して少しとしない、其の間に介

して敢て經濟政策體系第二卷として多少異りたる見地より解説を試みたる所以である。予輩は農業に關して十分の知識がないから先覺の高説等を紹介するに當つて或は誤謬なきを保し難いが、經濟政策の一部として多少の新味の掬すべきものがあれば望外の幸である。

予輩が農業政策につき興味を有するに至つたのは東京帝國大學法科に於て故松崎藏之助先生の農業政策の講筵に侍したるに初まる。當時の筆記は散佚して痕を止めないが先生の教は今尙記憶に存する。之を根幹として更に學び得たる所を加へ辛うじてこゝにこの一篇を成すことを得た。謹んでこの書を故松崎先生の靈前に捧ぐ。

昭和十一年天長節の嘉辰

著者

目次

第一篇 緒論

第一章 農業と國民經濟

一 農業の國民經濟上の位置

第二章 農業の特質

二 農業は土地の生産力を利用する生産である

三 農業と他の生産との差異

第三章 農業の發達

四 粗笨的農法より集約的農法へ

五 農法と交通機關

目次

六七

五八

五九

六一

六二

六三

六四

六五

六六

一

第四章 我國の農業……………七三

六 農耕地は比較的少し……………七三

七 我國の農業は過小農なり……………七五

第二篇 農業の生産組織……………九一

第一章 現今農業生産組織の基礎……………九一

八 十八世紀に於ける農業組織……………九一

九 農民解放と解放後の農業組織……………一〇一

一〇 我國の農業組織……………一二一

第二章 土地制度……………一二六

一一 土地制度一般……………一二六

一二 土地國有論……………一四三

一三 家産制度と一子相續制……………一四六

一四 地代農場と自作農創定……………一六一

一五 内國植民……………一七七

第三篇 農業の經營……………一八七

第一章 自作農業と小作農業……………一八七

一六 小作……………一八七

一七 小作爭議……………二〇五

第二章 收益増加政策……………二二三

一八 收益増加政策……………二二三

一九 耕地整理……………二二三

二〇 水利組合……………二三〇

二一 開墾助成……………二三三

第三章 農家増收入政策……………二六六

- 二二 農家収入増加……………三三六
- 二三 農産物の販賣組織……………三三七
- 二四 農産家の副業問題……………三四九
- 二五 農村の工業化問題……………三五五
- 二六 産業組合……………二六二
- 二七 農業保険……………二八〇

第四篇 穀物の價格と其の調節策……………二九一

- 第一章 穀物の價格と其の變動……………二九一

- 二八 穀物價格の特質……………二九一
- 二九 穀物價格の變動……………二九三

- 第二章 穀物關稅……………三〇七

- 三〇 穀物關稅……………三〇七
- 三一 穀物關稅批判……………三一七

- 第三章 穀物價格の調節……………三二七

- 三二 穀價の調節の必要……………三二七
- 三三 戦時に於ける穀價調節……………三三八
- 三四 平時に於ける穀價調節……………三四四

第五篇 農業金融其の他の農業問題……………三六三

- 第一章 農業金融……………三六三

- 三五 農業金融の種類と特質……………三六三
- 三六 短期及び長期農業金融機關……………三六八

- 第二章 農産家の負債と整理……………三八二

- 三七 農産家の負債及び其の原因……………三八二
- 三八 負債の整理……………三九〇

第三章 農村生活の改善と農業政策……………四〇八

三九 農業家の支出と經濟生活……………四〇八

四〇 農業家の公の負擔と經濟生活……………四一五

索引……………一七

農業と農業政策

第一篇 緒論

第一章 農業と國民經濟

一 農業の國民經濟上の位置

自然が生産要素として最も重要な位置を占めてゐた間は、人類は之を利用することに最も力を盡したから、當時は農業は主要なる生産であつた。「農は國の本である」と稱せられたのは洵に其の所である。國民の大部分は農業に従事してゐたのであつて、而して其の傍らに工業に従事するものもあつたが、これ等は極めて少數で、初めは君主、諸侯、貴族、寺院の爲に其の需に應じて武器、裝飾品等を生産してゐたに過ぎなかつた。況んや商業を營むものゝ如きは殆んどなかつ

農業の國民經濟上の位置
古は農業の主要な生産であつた

たといつて宜しいのであつた。稍後になつて、工業を営むもの、中獨り君主諸侯、貴族、寺院の隷屬者のみではなく、國民の消費を目標として生産するものを生ずるに至つても、これ等は都會に居住するものであつて、尙未だ甚だ少數であつた。遠隔なる土地の間に有無相通ずるが爲に商業に當るものを生ずるに至つても、其の數に於ては數ふるに足らぬ、而かも、商業を営むものは自ら生産をなすに非ず、他人の生産したものを購めて他に賣りて其の間に利潤を收むるものであるから、獨立的地歩を占むるものでないとして侮蔑せられてゐたのである。封建時代に於て士農工商といはれたのも、重農學者が農業家のみを以て唯一の生産階級とし、工業家等を隷屬階級と稱したのも、凡てこの情勢から生じた辭であつた。然るに、文明の進歩するに従ひ、農業は年と共に増加する人口の大部分を吸収して之に従事せしむること能はず、過剰の人口は農業以外の職業を求めなければ生活することが出来ない、抽象的にいへば、労働と資本とが生産要素として自然より寧ろ重要な位置を占むるに至れば、農業は昔日の如き位置を占むることが出来ない、農業に従事する者が其の數に於て減少しないまでも、其の國

過剰人口
と農業

人口に對する比率は漸次退歩せざるを得ず、昔時は人口の小部分に過ぎなかつた工業家、商業家が漸次人口のより多き部分を占むるに至るのみならず、甚しきに至れば冠履所を代へ、工業に従事するものが農業家が曾て占めてゐた位置を奪ふに至るのである。このことは文明國の何れに於ても目撃する現象である。例せば、獨逸の國勢調査によるも一八一六年には農業に従事してゐた者は一千八百〇五萬人、其の餘の業に従事してゐたものが六百三十萬人に過ぎなかつたのであるが、一九〇五年の國勢調査では、農業に従事するものは依然として一千八百〇五萬人に過ぎないのに、其の餘の業に従事するものは四千一百八十萬人の多きに上つてゐる、即ち百年近くの間、農業に従事するものは増減なきに拘らず、其の餘のものは大なる増加をなしたのである。更に英國などにては農民の數は比較的減少したに止らず、絶對的に減少してゐる。即ち十八世紀の中葉までは農民階級は全人口の過半数であつたが、産業革命後は工業階級の人口が著しく増加し、自由貿易制が確立してからは、農業家は力を致して園藝等に從事し、其の位置を維持しようとしたのであるが、力及ばず次第に他に職を求めて

其の生活を維持せんとするに至つたのであつて、之が爲に農業家の數は絶對的に減少し國民の小部分を占むるに至つたのである。英國で昔時耕作せられたと思はるゝ土地も徒らに荒蕪に任せられてゐる。又外國より輸入するものを見ても其の五分の一は工業品で、残り五分の四は食料品、原料品であるに徴しても其の一斑を知ることが出来よう。これは後に詳述する如く英國の土地制度にも大に關係あることでもあるが、自由貿易制になつてから、外國並に植民地から低廉なる農産物が輸入せられ、農産物の價格が著しく低廉となつた爲に、農業を維持すること能はざるに至つたからである。

かく農業の國民經濟に於ける位置は文明の進歩に伴ひ低下するに至つたが、農業は今日と雖も尙重要な生産たることを失はず、國民經濟上之を尊重しなければならぬ。其の理由は

一、農業は耕作と牧畜とにより其の國民の生活に必要である動植物性の食料を供給するものである。

農業を廣く解して原始産業とすれば、人類の生活の資料は概ね農業によりて

今日も農業は重要な生産である

食料の供給

供給せらるゝものであるといへるが、農業を狭く解して農産物の生産とするも、之と最も近似せる牧畜、水産業と共に、人類の食料の大部分は農業によりて供給せらるゝものと稱することを得る。従つて、人口が尙未だ稀薄であつた間は、農業に力を用ひてゐれば國民は生活上困ることはなかつたのである。所謂自給自足の經濟を營むことが出来たのである。其の代りには其の消費するものは其の地方に生産することを得るもので自ら限定せらるゝのである。人口が増加すると、土地を利用することも多くなるが、人口益々増加すれば、遂には其の土地に生産するものゝみにては人口を養ふこと能はざるに至る。こゝに於て外國より輸入するに至るのである。外國より輸入すること多く國民は之に依頼せざるを得ざるに至れば、若し之を輸入すること能はざる曉には國民は生活すること能はざるが故に國民にとりては實に由々しき大事といはなければならぬ。現に獨逸が歐洲戦争の當時英佛等の聯合軍に對し戦をなすに際し、同國は四面敵によりて圍まれてゐるが故に能く其の生産する食料品を以て國民を養ふことを得るや否やが問題となつた。當時の調査によるに、食料の約九割は獨逸國內

にて生産するを得るを以て一方には未だ利用せざる土地を利用すると同時に、一方には自國の生産物を消費する方法につき尙一層の工夫を積む時には、よく國內の生産物を以て國民を養ふことを得べしとの確信を得たるが故に遂に干戈を取つて立つに至つたといふ。國民經濟の立場よりすれば、自國にて生産する食料を以て國民を養ふことが願はしいことであるから、諸國が人口増加の爲に自國に生産するものを以て人口を養ひ難きに至らんか、或は領土を擴張し或は植民地を設けて其の生産するものを以て人口を養はんかとせざるものはない。文明の進みたる歐洲諸國の中で自國に生産する穀物を以て自國の消費を満足し得るものは僅に露國ある許りで其の他は何れも自國に生産するものを以て人口を養ふことを得ず、多少は外國若くは植民地より穀物を輸入しなければならぬのである。特に英國の如きは其の消費する穀物の大半は海外より輸入したもので若し輸入を仰がず、自國にて生産するもののみを以て國民を養はんとする時は僅に四五十日を支ふることを得るに過ぎないといふ。かくの如くんば、假令、資本が充實してゐても、工業が大に進歩してゐても、國民經濟を維持す

る上に於て甚だ危険であるといはなければならぬ、奢侈品はいふに及ばず國民の生活上さまで必要ならぬものならば必要が生ずれば、之を節約することを得るが故に憂ふるに足らざれども、生活の必需品に至つては然らず、試みに歐洲戰爭勃發當時に於ける歐洲諸國の小麥の生産及び輸入の次の統計を見よ。

	生産額 百萬クオーター	輸入額 百萬クオーター	輸出額 百萬クオーター
英國	七・三	二七・三	一
佛國	三八・一	五・八	一
獨逸	一九・六	八・四	一
奧國	二九・六	二	一
伊國	二二・三	六・八	一
露國	九三・〇	一	一四・六

この表によると獨逸では小麥の輸入が割合に多く上に陳べた消費額の一割を超えてゐるのであるが、獨逸では小麥は食料としては高尚のもので、國民の多數はライ麥等小麥以外の穀物による麵麩を常食としてゐるから、其の生産額は消費額の九割に及ぶといふ上に述べた計數を得たのである。國民の食料を自

國に生産することを得る間は問題は簡單であるが、外國より之を仰がざるを得なくなると、問題は複雑とならざるを得ない、マルサスの人口論は、人口は其の國にて生産するものを以て養はるべきものであるとの前提の下に説かれたもので、食料品の増加は人口の増加に比して速度が遅いから、人口の増加を遅緩ならしめない限りは、人口の一部分は食料を得ること能はない、社會の弊害はこゝに發生せざるを得ざることを喝破したものである、其の國の人口を養ふに他國の食料品を以てするも差支がなしとすれば問題の解決は全く別のものとならざるを得ない。上に問題が複雑になるといつたのは有ゆる經濟問題が外國との交渉を生ずるからである。

工業原料の供給

二、農業は工業の原料を供給す。

工業は原料を必要とするはいふまでもない。これ等の原料は動物性、植物性たると礦物性たるとに論なく悉く原始産業によりて供給せらるゝものである、自然の富源と稱せらるゝ所以である。自然の富源にも二種あつて(A)一は礦物に於て見るを得べきが如く、一たび之を用ふれば再び之を得ること能はざるも

礦物性原料の生産

石炭

のがある。これ等の自然の富源の中で現代の工業に最も重要な位置を占めてゐるものは石炭と鐵とである。石炭は現代の工業には必要缺く可らざるもので英國が長く世界の工場として躡歩することを得たるも國內到る所に石炭が産出せられたからである。「工業の麵麩」といはるゝ所以である。歐洲戰爭直前一九一一年の北米合衆國地質局の調査によるに世界に於ける石炭の産出年額は約十三億噸であるが、其の中で最大産出國は北米合衆國であつて四億五千萬噸を産出し、英國は第二位にあり二億七千六百萬噸を産出し、獨逸は第三位にあり一億六千萬噸を産出し、佛、白、露等之に次ぐのであつた。之によるも石炭の生産並に消費は歐洲が第一位にありといへる。歐洲戰爭による政治上の變化は石炭にも影響を及ぼしたもので、石炭の産出が大に衰えて褐炭の産出が大に増加し一九一三年には八千七百萬噸の産出しかなかつたものが一九二一年には一億二千三百万噸の産出を見るに至つたのである。褐炭は國內の需要に應ずるものであるから石炭の採掘が減少したのは世界經濟的には大なる退歩であるといはなければならぬ。戰前並に戰後の石炭の産出の概數を擧げると次

の如くである。

国名	一九一三年 百萬噸	一九二二年 百萬噸
北米合衆國	五二七	三六二
英國	二八七	一六四
獨逸國	一六七	一三六
佛蘭西國	五六	二九
白俄羅斯國	二二	二一
露西亞國	三三	五(一九二〇年)
奧國	一四	一〇
カナダ	一三	一四
南亞弗利加	七	九
日本	一五	二九(一九二〇年)
支那	一三	一八

鐵鑛は工業の中樞であることも改めていふまでもない。世界の鐵產出國の第一位にあるものは北米合衆國で其のレークスベリオル地方が其の鑛質の優良なる世界之に及ぶものはない、この地方を除けば米國の鐵鑛は英國に略匹敵すといふことである。今戦前に於ける鐵の主なる生産國を列擧すると

鐵鑛

植物性、動物性の生産原料

棉花

国名	一九一三年 百萬噸	一九一八年 百萬噸
北米合衆國	一八	七五
獨逸國	一五	二三
英國	一四	一四
佛蘭西國	四	九
スエーデン	二	六
西班牙	七	四
露西亞國	四	一
奧國	三	三

反之(B)自然の富源の中にも林業、農耕業に見る如く土地の生産力は人爲的に補充することを得るものがある。後にも説く如く之に資本労働を多く用ひて經營するを集約的農法といひ、資本労働を用ふること少いものを粗笨的農法といふのである。

穀物其の他の食料品は勿論、棉花の如き纖維工業の原料を初め多くの工業原料は農業に俟たざるものはない。就中棉花は紡績業の發達に伴ひ最も重要な位置を占むるに至つた。棉花の産額は平年作に於て一年二千萬俵内外であ

羊毛

るが、其の中二分の一以上は北米合衆國に産出せられ、印度、支那、埃及等之に次ぐのである。我國では、昔時は多少の産出を見たのであるが、今日では内地並に朝鮮に於て僅に生産を見るのみであつて、殆んど全部は外國よりの輸入に仰ぎつゝあるのである。棉花は實に我國輸入品中の大宗である。我國では近年に至るまでは太絲のみを生産したるを以て原料として印度棉を主に輸入したのであるが、近年細絲を生産するに及び米棉を多く輸入するに至つたのである。棉花に次で工業原料として重要なものは羊毛であるが、世界に於ける産額は二十六億封度に上るが、其の三割は濠洲に産し、歐米之に次ぐ、亞細亞の羊毛の産額は其の一割に過ぎないのである。

昔時は工業が起つて來ても、其の原料は内國のものを用ひたので、外國より之を輸入することが殆んどなかつたのであるが、文明の進歩するに従ひ國によりては工業品を多く生産し多く輸出するものあり、又農産物を多く生産し之を多く輸出するものを生ずるに至つた、前者を工業國といひ後者を農業國といふのである。文明の進歩し人口の稠密な國は到底農業のみを以て其の人口を養ふ

工業國と
原料の生
産及び供

こと能はざるが故に其の資本労働は主として工業に用ひ其の生産したる工業品を海外に輸出し其の代りに食料品並に工業の原料を輸入しつゝある。これ等の工業國に於てよく工業を維持することを得るは工業の原料に不足を訴ふることがなきが爲である。其の國の領土廣くして工業原料を多く産出せしむることを得る場合は工業が發達し工業原料の需要が増加するに従ひ工業原料の生産を擴張することを得るが、其の國の自然の生産條件上工業原料を生産すること難く、よし之が生産を擴張することを得るも生産費が増加して工業を経営するに不利を來す時は工業の原料は外國に仰がざるを得ない、かゝる場合其の國の工業を維持發達することを得るのは自由に工業原料を輸入することを得るが爲である、従つて原因の如何を問はず工業原料を輸入すること能はざるに至らば其の國の工業は衰亡せざるを得ない、これ等の國は努めて工業の原料を自國又は植民地に仰ぐ策を講ぜざるを得ない。この意味に於て工業原料を生産する農業に大に注意せざるを得ない。この見地から、農業を重視することは多く説明を必要とせざる所であるが、こゝに工業國に於て原料の方面からで

はなく労働の方面から農業を重視しなければならぬことを説くもの少くはない。工業國に於て工業を維持するには資本力も勿論大切であるに相違ないが、労働力も亦大切である。工業は原則として都會に集中するものであるが都會の生活は不健康であるから人口を減少するものである。農村から人口を補充するに非ざれば都會の人口は久しからずして盡きざるを得ないのである。人口の減少は労働力の減少を意味するのであるから、農村から人口を補充するに非ざれば都會の工業は遂に亡びざるを得ないのである。この意味に於て農村の人口は工業を維持する上に必要であるといへる。農村を維持するには農業を衰微さすことを許さないのであるから、農業は工業國の労働力を維持する上に於て必要であるといふのである。農村維持の國民經濟上重要であるは明白であるが農村維持の方法に關して經濟政策上議論があるのである。工業國にては工業を維持發達さすに非ざれば其の國民經濟を維持することが出来ないから、これ等の國に於て工業を犠牲にして農業を振興せしむべしと説いた所が之に耳を傾くものがあるまいから、さてこそ労働力の方面から工業を維持發達す

るが爲に農業を振興さす必要のあることを説いたものであらう。兎に角農業は工業の原料の大部分を供給するものであるから工業國に於ても之を尊重しなければならぬことは明白である。

三、經濟以外の觀點より農業の重要な所以

以上は經濟上の觀察點より農業の重視しなければならぬ所以を説いたのであるが、經濟上の觀察點を離れて農業の重視しなければならぬことを力説するもの少くはない。其の中二三のものを附記して置く。

(一) 道德上の觀察點よりするものは都會の生活は概して輕佻浮薄であつて道德上非難すべきこと少くはないが、地方農村の生活は概して醇朴敦厚であつて道德上稱すべきものが多い、従つて大きくいへば其の國の道德は地方の農業家によりて維持せられてゐるといつても過言ではなく、農村をして今日の風を維持せしむるには農業を維持せしめなければならぬ。農村が疲弊没落することは一國の道德上から見て決して輕視すべきことではないといふのである。

(二) 國防上の見地から農業の重視すべきことを説くもの少くないが、其の中

で有力視せられてゐるものを擧ると、(a)農業國は商工業國に比して戦争をなすに強力であると主張するものがある。古來戦争の跡を見るに農業を以て立つ國と商工業を以て立つ國と戦争をなしたる場合は其の戦争にして稍久しきに互る時は、農業を以て立つ國の勝利に歸することが多い。其の理由は農業を以て立つ國にては壯丁が出でて戦に赴いても、老幼婦女子の家に止るものが耕作に従事すれば、農業は主として土地の生産力竝に天候等に由つて行はるゝものであるから能く農業を維持することが出来るが、商工業を以て立つ國では壯丁が戦争に出づれば其の商工業を維持することは困難である。例せば、羅馬とカルタゴの戦争について見ても、初の間は互に勝敗あり、特にハンニバルの如き英雄がカルタゴ軍を率ひて羅馬の軍を敗り其の心膽を寒からしめたのであつたが、羅馬は農業を以て立つ國でありカルタゴは商業を以て立つ國であつたから、戦争稍久しきに互ると、カルタゴは其の國力が疲弊して到底戦争に堪ゆること能はざるに至つたに反し、羅馬の國力は依然として衰えなかつた。これは一例に過ぎないのであるが、古來の戦史は如上の事實を證明することを

得るといふのである。(b)農村の壯丁は兵士たるに適するが、工業地の壯丁は兵士たるに適しない、従つて兵士として國防に任ずるものは農村の壯丁である。國防上より見て農村を尊重しなければならないといふのである。獨逸に於て工業労働者保護を提唱したのは軍隊側である。即ち徴兵検査を行つた所が、ライン河地方の工業地では壯丁の徴兵検査に合格するものが甚だ少くあつたを見て、假令、工業が昌となつて經濟上發達をしても、壯丁にして身體が弱くなつたならば國家の前途の爲め甚だ憂慮しなければならぬ、工場法を制定して壯丁の健康を保持する必要があると説いたのである。之に見るも、國防上、農村の壯丁の重視すべきことを知ることが得よう。(c)一國の人口を養ふが爲に其の國の食料を以てすること能はずして、外國の食料を以てしなければならぬ時は、敵軍に包圍せられて食料を得ることが出来ない。この意味に於て農業を振興して其の國に生産する所を以て其の國の人口を養はなければならぬといふのである。これ等の主張は無條件に之を容認することは出来ないが、農業は今日では昔日

に比し國民經濟上の重要性を減じたにもせよ、尙甚だ尊重しなければならぬことは何人も異議を挟むものはあるまい。農業にして國民經濟上甚だ重視しなければならぬとすれば、國家は之を自然の成行に任せ置くべきものではなく、其の國情等に即して適當なる經濟政策を行ふことが肝要である。農業政策即ち是である。

第二章 農業の特質

二 農業は土地の生産力を利用する生産である

農業は土地の生産力を利用する生産である

あるのは萬物を積載する能力のあるのと、礦物等を包藏するのと、及び植物を培養する能力があるからである。萬物を積載する能力はいはゞ面積によりて表顯せらるゝのであるが、土地の面積は人爲的には殆んど増加することを得ない。全地球の面積は一四四億〇五百七十萬ヘクタールあるが、其の七割三分三厘は海面であり其の殘餘が即ち陸地である。其の陸地は全部耕作に適するものではなく、農耕に適する面積は其の中で三十八億五千六百三十萬ヘクタールに過ぎないのである。人類は沼澤を開墾し、耕耘に適せざる土地を耕耘して人類の用に充て以て自然を征服した所もないではないが、其の土地の面積は土地全體に比較すると實に一小部分に過ぎないのである。土地の獨占的性質は第一に土地のこの有限性から來らざるを得ない、而のみならず、土地の獨占的性質は之

土地の獨占的性質

土地の有限性

領土的制

に附隨して尙注目すべきものがある。即ち土地は今日では多くの國の領有に屬してゐるもので、我等は其の國の領土内に於ては之を利用することを得るも、其の領土外にては無主未墾の地に非ざれば占有し利用することを許されない、無主未墾の土地は極めて限定せられてゐるから結局、我等の利用し得べき土地は甚だ局限せられてゐるといはなければならぬ。而のみならず、我等が利用し得べき土地は更に地理的關係即ち氣候によりて制限せられてゐる。植物を培養するには一定の光力と熱力とを必要とするものであるから、假令、寒帯の土地に利用し得べき土地があつても、氣候の爲に利用することを得ない。以上陳べた物理的の性質により、我等の利用する土地が制限せらるゝ外に更に著しき制限がある、其は後にも詳述する如く現今では稍文明の進んでゐる國では土地は概ね私有に屬し、我等は隨意に所有地以外の土地を利用することを許されてゐない、他人の所有にかゝる土地を利用せんとするには相當の借地料(小作料)を出さなければならぬ。これ等の制限が存するが故に、土地の獨占的性質は益益顯著とならざるを得ないのである。局限せられた土地を利用するが故に後

地理的制

財產的制

に陳ぶる如き種々なる問題を生ずるのである。

土地の生産力

吾等の利用し得べき土地の面積が局限せらるゝ上に更に農業に關係のあるのは土地の植物を培養する力が制限せられてゐることである。土地の植物を培養する力を土地の生産力といふのである。人類は古昔は、土地の生産力を自然の儘に利用するのみであつて、人爲的に之を増加することもなかつた、又之を増加する途を知らなかつた。従つて、其の生産力が衰えて最初利用したる時の如く多く收穫を得ること能はざるに到れば、其の土地を去つて生産力の豊饒なる土地を求めて移動したのであつた。民族の移動は概ね北方より南方に行はれたものであつた。南方の豊沃なる土地は概ね既に占有せられたものであるから、其の先住者を追ふに非ざれば南方豊沃の土地に移ることは出来なかつた。所で、南方豊沃の土地に定着せる民族は天恵の豊なるに慣れて遊逸に溺れるもの少くなかつたから、北強の蠻族の來襲に會して其の地を守ること能はず、新に他に土地を求めて移動せざるを得なかつた。太古の歴史はこれ等民族の移動の歴史であると稱して可なりである。時代の進むに従ひ、盛んに移動した民族

民族の移動

土地生産力の人為的增加

が定着地を得てこゝに住居するに至るや、其の労働と肥料とによりて土地の生産力を増加し、年々増加する人口を養はんとするに至つた。新渡戸博士の『農業本論』によると、人類が肥料によりて土地の生産力を増加する途を知るに至つたのは墳墓に近き土地が生産力大にして穀物の収穫多きことに心附きしためであるといふことである。即ち、太古の民族の中死亡するものがあれば其の部落の附近に之を埋葬したのであるが、其の墳墓に近き土地が他に比し収穫の多きことを氣附くに及び、土地の収穫力は人為的に之を増加し得べきことを知り、肥料等により土地の生産力の衰退を防止せんとするに至つたといふことである。我等は経験等により人為的に土地の生産力の減退を防止し、若くは之を増進を圖り土地を利用し來たのである。労働資本を多く用ひて耕作すること、労働資本を用ふることの少き農法即ち粗笨的農法に對し集約的農法と稱す。人為的に労働と資本とにより土地の生産力を増加することを得るも之を無限に増加することを得るものではなく、こゝに越ゆることが出來ない制限が存し、この制限が存すればこそ農業問題は今日見る如き特殊相を呈するのである。

粗笨的農法と集約的農法

生産力の有限性

若し、労働資本に應じて土地の生産力を増加し得るものとすれば、人口が益々増加しても、之を耕作に用ひしむる時は人口を養ふ食物を得るに困難を感ずることがない理である。然るに、土地の生産力には今いふが如き制限があり、人口の増加に伴ひ食料を得ることが出來ない、多くの食料を得るには勢ひ新に土地を得なければならぬ、これがこれから陳ぶる農業の特質の生ずる原因である。農業を論ずるものは先づこの制限に注意しなければならぬ。この土地生産力に關する法則を収穫遞減の法則といふ。即ち土地の生産力は初めは労働資本を用ふるに従ひ之を増加することを得るけれども、或限度に達すると、其れより以上は資本労働を増加すれば、生産力即ち収穫を増加することを得るに違ひないが、資本労働を増加した割合には之を増加することを得ない、更に多くの資本労働を加へなければならぬ、換言すれば、資本労働を増加するに従ひ絶対的には収穫を増加することを得るが、相對的には之を増加することを得ないのである。之を生産費から見ると、一單位の収穫を得るに初めは生産費は少く、すむが、後には多くの生産費を必要とするといふことである、例へば、こゝに一定の

収穫遞減の法則

面積の土地があると假定する。十人のものが耕すとすれば、百石の收穫を得たとする。其の場合一人の收穫は十石である。同じ土地を二十人で耕すとすれば二百石の收穫がある。この場合一人の收穫は同じく十石である。この勢で三十人をして耕作せしむれば三百石を得ることが出来るかといへば然らず、或限度に達する時は其の上は耕す者(労働)を増加した所で其の割合を以て收穫を増加することを得ない、即ち三十名をして耕すとすれば三百石を得ること能はず二百七十石丈を得たと假定する。この場合一人の收穫は九石に過ぎない、更に四十名をして耕さしむると三百六十石丈しか得ないとすれば、一名の收穫は減じて八石に過ぎないのである。かくの如く労働等を増加すれば、收穫の總量は増加することを得るが、其の用ふる資本労働に應じて相對的に收穫を増加することを得ない、生産費にしても、一人を傭ひて耕さしむるに其の賃銀を三百圓を要すとすれば、十名を傭ひて百石を得たとすれば、生産費は一石三十圓に當るが、三十名を傭ひて二百七十石を得たとすれば、一石の生産費は三十三圓三分一になり、更に四十名を傭ひて三百六十石を得たとすれば、一石の生産費は三十七圓五十錢

收穫減
法の則
適用の

に當る。かくの如く資本労働を多く加えなければならぬ時は生産費は漸次増加しなければならぬといふのである。これは假りに例を以て説明したに過ぎず、而かも、單に労働力の増加のみを以て收穫の増加する勢を説明したので、資本を加えてゐないが資本を加えなかつたのは説明の簡單を欲したからであつて、理に於て異なる所はないのである。こゝに注意すべきことがある。

一、この法則は土地の生産力(收穫)に關するものであつて、其の收利力に關するものでないことである。土地の生産力が資本労働の増加に比例して増加せざるも、農産物の價格が其の生産力の減少した程度以上に騰貴したならば、收利力は却つて増加する理である。このことは農産物の價格を説明する時に説明するからこゝに省略する。

二、この法則は土地の生産力は或限度からは絕對的には増加するが、相對的には増加しないことを説いたもので、其れから更に或限度に達したならば相對的は勿論絕對的にも増加しないことを説いてゐるものではない。但し土地を利用するものは其の利用によりて利潤を得んとするものである以上、若し生産

費は漸次増加するに拘らず其の農産物の價格が之に比較して騰貴しなかつたならば、到底利潤を得ることが出来ないから、其の限度に達すれば更に資本労働を増加して生産力を増加せんとするものはあるまい、生産力を増加せんとするものゝないのは技術上増加することが出来ないのではなく、經濟上増加しないのである。このことは注意しなければならない。

三、この法則の行はるゝ限度は決して一定不動のものではない。其の限度は少くとも或程度までは農法の改良、肥料の改善、交通機關の發達によりて動かすことが出来るものである。例せば、上に掲げた例で、收穫遞減の法則が行はるゝに至つたのは二百石と三百石の收穫の間であつたが、其れは同一の農法を用ひてゐたからであつて、若し農法を改良して其の能率を高くしたならば、三百石の收穫があつても收穫遞減の法則は行はるゝに至らない、依然として資本労働を増加するに準じて收穫を増加することを得るといふことである。肥料の改善、交通機關の發達も理は同じである。肥料の改善については改めて説明するを要しないが交通機關の發達について一言するに、土地を利用して收穫を得る

收穫遞減
の法則に
關する諸
家の意見

ものは其の耕地にては賣ることが出来ない、之を都會に運搬して初めて賣ることが出来るのである。都會に運搬するには相當の費用を要するから、其の耕地にして都會を距ること遠く、其の農産物を運搬する費用が大である時は、假令其の耕地が豊沃であつて生産力が大であつても之を耕さんとするものはあるまい。今交通機關が發達して其の耕地より都會までの運搬費が大に減少したとすれば、其の耕地を利用するに至るであらう。其れと同じく或土地が資本労働を増加するに従ひ生産費が増加して到底其の農産物を都會に運搬するも利潤を見ること能はざる場合に於ても、運搬費が減少した爲に都會に運搬し得ることもあり得るであらう。故に交通機關の發達はこの法則の行はるゝ限度に重大なる關係があるのである。農業にこの法則の行はるゝことは經濟問題を解決する上に甚だ不利なる結果を生ずるから學者の中には農業にこの法則の行はるゝことを承認すると同時に工業にも同様この法則の行はるゝことを主張する者がある(カーヴァー『收穫遞減法則論』参照)。又學者によりてはこの法則の行はるゝ限度が一定不動でない點に論據を求めて、今日農業にこの法則の行

はるゝは畢竟農法の進歩が尙甚だ幼稚であるからである。若し農法の改良進歩が著しくあつたならば、この法則の行はるゝ限度は之を大に高くすることが出来るであらうから實際上には此の法則が行はれず資本労働が増加するに伴ひ收穫を増加することを得るであらう従つて農業の生産力に關し工業に比し特殊の經濟法則が行はるゝものでないと主張するものがある。工業にも收穫遞減の法則が行はるゝや否やについては工業政策を論ずる際に譲るとし、農業にこの法則が行はるゝことを承認しながらこの法則が行はるゝのは農法の幼稚である爲であるとして農法にして改善せらるゝ時は實際上この法則が行はれざるに至るであらうと主張するのは農業政策の見地から承服することは出来ない。何者、農法が大に改良せらるればこの法則が消滅することがあるかも知れないが、これは相當遠い未來のことであつて、近い未來のことではない。今日の農法は尙未だ幼稚であることも、論者の説の如くではあるが、其のことが事實である以上は如何ともし難い、従つて現實に農業に收穫遞減の法則が行はれて種々なる結果を生じつゝあることも之を否定することは出来ないと思ふ。

従つて農業政策を論ずるものはこの法則の存在を承認してこの法則の下に於て如何にすべきかを研究しなければならぬ、この法則が消滅すべき遠い將來を眼中に置いて農業政策を論じた所で、所謂空中樓閣を描くものといはなければなるまいと思ふ。

收穫遞減の法則は相當古から知れてゐた法則で、重農學派のチュルゴの如きも之を説明してゐるし、英國學派の經濟學者は十分に之を知つてゐた。マルサスの人口論はこの法則を前提して組み立てられたものである。人口は幾何級數で増加するが之を養ふべき食物は算術級數で増加するに過ぎないといふのは正に收穫遞減の法則の下に説明せらるゝものである、即ち人口は一、二、四、八、十六の割合で増加するのに食物は一、二、三、四の割合で増加するものであるといふ、即ち食物は絶對的に増加するが、其の増加の速度は次第に衰ふるといふのである。爾來、經濟學者はこの法則を承認し立論してゐる。かのホン・チンネン(von Thünen)はこの法則を實驗的に立證してゐる、即ち集約的農法を用ふることにより生産費は收穫に比較して遙に増加する。従て收穫の増加は農産物の

價格の増加によりて初めてなし得ることである。收穫の増加は肥料の改良、灌漑の便、並に多くの労働によりてなされることであるといふのである。かのリービヒ(Liebig)も亦この法則を説明してゐる。氏は「過去二十年間に歐洲大陸に於て自作農業者の位置は工業者等に比して大に改善せられたが、これは其の收穫が増加し又は品質が善くなつたからでもなく、農業が進歩したからでもない、農業の進歩は生産費を増加するに非ざれば到底望み得べきことではない、農業家の位置が善くなつたのは農産物の價格が大陸何れの地方に於ても高騰したからである。農産物の價格が騰貴したのは農産物の増加が人口の増加に及ばなかつたからである」と論じてゐる。これ等の學者の説を見ても收穫遞減の法則は嚴として存在し、農業問題を論ずるものはこの法則の下に立論しなければならぬ。

土地の有限性は土地の價格の問題を生ずる。農耕地にして無限に存在し我等が自由に之を利用することを得るならば、農業に關する現今の諸問題は面目を改むるに至つたであらう。然るに前にも略述した如く、我等の利用し得べき

土地有限性の結果

土地私有財産の發生の

土地は限りあり、而かも、之を利用せんとする者が年と共に増加するが爲に、後にも説くが如く土地の私有制を生ずるに至つたものである。土地の私有財産制の起源を論ずるには勢ひ太古の農業制度に遡らざるを得ないのであるが、このことは後に稍詳しく叙述せんとするが故に暫く後に譲り財産權の發達の歴史からこゝに一言し置くに止めんとする。財産權は畢竟物に對して他人を排斥して處分使用をなす絶對的權利を認むるに及びて生ずることである。されば、かゝる絶對權は性質上我等が日常使用する消費財、例せば衣服とか茶碗其の他の食器等、又は我等が生産に用ふる器具、例へば農具、工具等に於て初めて起つたものに相違ない、太古共產主義的社會組織の下に於ても、この種のもものは特殊の者の絶對權が認められてゐたもので、其の者が死亡する時は之を共に埋葬するか、燒棄して、他人をして之を使用することを許さなかつたといふ。この私有財産權の目的物の範圍は年と共に漸次擴大したが、其の土地にまで及んだのは比較的新しいことである。蓋し土地は我等の労働によりて生産せられたものではなく、自然に存在するものである上に、當時は我等が生活資料はこれに仰ぐよ

り外に途がなかつたのであるから、若し土地が少数のものゝ占有に歸し、其の他は之を利用することを得ざる時は、直ちに生活に困難を感ぜざるを得ないから、之が私有を認めなかつた、唯之を利用するにつき多少の區別を設けたに過ぎなかつた、而して、君主豪族の如き政治上の権力者が起るに及びて土地に對して絶對權を掌握するに至つた、之を獨逸等に於て高權と稱してゐる、當時は、所有權は高權の中に包含せられてゐたものである、後世所有權が稍明確なる形態を取るに至つて、兩者が分離するに至つたものである。土地の所有權が確立するに至るや、土地を所有せずして土地を利用せんとするには他人の所有する土地を借りざるを得ない。尤も、土地所有權は有ゆる土地に行はれたものではなく、近年否、今日に至るまで個人の所有に屬せずして村落又は公共團體の所有に屬し其の村落に屬するものに少くとも或程度の利用を認めるものも少くはない。村有地、公有地の如きは即ち其れである、既に、個人の所有に屬した土地でも曾て共有地であつた關係からして或程度の利用を其の關係する村落の住民に許すものもないではない、例せば森林地が個人の所有地になつても其の村落の住民に

土地所有
權と高權公有地の
利用土地の私
有を認め
た理由

下草を刈取ることを許すが如きは其の一である、而のみならず、土地の全部は未だ私有地とはならず無主の状態にあり、何人と雖も之を占有し利用することを許されてゐる所もある。かくの如き事情から推測するに土地は直ちに私有地になつたものではなく、漸次私有地になつたものであるに違ない、何が故に土地の私有(所有權)を認めざるを得ざるに至つたかといへば、蓋し人口が漸く増加し、土地を集約的に利用せざるを得ざるに至るや、我等は土地に對し大に勞働と資本とを加えて耕耘しなければならぬようになった、これ等の勞働資本に對し直ちに收穫が増加し之を回收し得るものではない、之を回收するには勢ひ同じ土地を少くとも數年に互つて利用しなければならぬ。其の土地を占有し之が絶對權が認めらるゝに非ざれば、到底之をなすことは出來ない。而のみならず、土地を集約的に利用するには之に灌漑其の他の設備をなさなければならぬ、これ等の設備をなすには相當巨額の費用を要するから到底一二年の間に回收することは出來るものではない、其の土地に關して絶對權が認められざる限りはこれ等の設備をなし得るものではない。土地は初めは先占によりて或者

の利用する所となつたものにもせよ、其の者にして上に陳ぶるが如き理由により之に資本労働を投ずる時は、其の土地に對し一種の關係を生じて之を容易に拋棄しようとはしないし、其の周圍の者も自然之を認めるようになり、官憲も亦之が權利を認めるようになったものであるらしい。土地の私有が認められてより多くの年月を経ると、之を所有する者は他の財産と同じく他人に譲渡賣却するようになったので、其の譲渡等には普通の動産等とは異りたる形式を必要とするにもせよ、普通の財産の如く價格を生ずるに至つたのであるし、之と同時に他人をして利用収益せしむる場合には借地料(小作料)を要求するに至つたのである、土地を小作せしむる形式等については後に小作制度を論ずる際之を詳述するからこゝには省いて置く。土地は労働の結果として生じたものではないから土地は私有財産となすことを許すべきものではない、社會の有としなければならぬとは社會主義者の熱心に主張する所である。社會主義者の意見の根據は労働價值論にある。労働價值論は凡て價值は労働によりて生ずるものであるといふのである。この見解にして正しとすれば、土地は我等が之に労働

土地私有
制と労働
價值論

資本を加えなかつた時から存在し、労働資本の力は加はつたにもせよ、土地固有の力によりて收穫を出すものであるから土地は労働資本の結果でないことは明白でなければならぬ、従つて、私有財産たらしむべきものではないとの結論を生ずる、土地を他人に利用せしめて小作料を得るべきでないことも明白でなければならぬ。労働價值論は今日の理論經濟學に於て認められないのだから、之によりて土地所有權竝に小作料權を否定することは出来ない。この論を主張するのは畢竟土地を事實耕作する者が其の土地に生産した收穫を擧げて其の手に收める權利があることを主張しようとするのであらうが、論者の説に従つても労働をしたものは労働の結果だけを得ることを主張し得るのであらう。然し、單に労働丈では收穫は生じない、收穫は土地の生産力と労働と資本とが結合して初めて生ずるものであることは明白である。して見れば、労働をしたものは收穫の一部分を得る權利あることは主張することが出来よう、然し收穫の全部を得る權利ありといふことは出来まい、土地は社會の有であるから收穫の殘部は理論上社會のものとする筈であるが、社會は耕作を獎勵する意味で耕作

するものに收穫全部を得せしむるものであるなら耕作する者が收穫の全部を受くるものであるといへるが、其れには社會制度が之を認めてゐるものであることを證明しなければならぬ。要するに、社會主義者の労働價值論は農業政策からしても承服することは出来ない。同じ社會主義者の中でもヘンリー・デュージ(Henry George)の如きは全く異りたる立場を採つてゐる。デュージは土地の私有を否定はしてゐない、唯土地の價格は人口の増加、文明の進歩に伴ひ益益騰貴するし、地代も亦人口の増加等に伴ひ益々増加する、これ等の騰貴は社會の力により生じたものであるから土地所有者に歸屬せしむべきものではない、宜しく社會に歸屬せしむべきものである、其れには國家は土地に對して租税を課するのである。然らば地價も騰貴せず地代も増加しないから其の目的を達することを得るといふのである。デュージは米國に於て土地の價格が年と共に大に騰貴し土地所有者は勞せずして暴富を得るに反し、土地を利用せんとするものは又は土地を購はんとするものは不利益を被ること大なるを見てこの論をしたのであるが、土地に租税を課する時は初めの間は之を利用するものを刺

ヘンリー・デュージの單稅論

地代と地價

戟して之を利用せしむるに相違ないが、其の課税が甚しき時は、之を利用するも到底收支相償ふこと能はざるに至るであらうから、土地を利用するものなく、デュージの希望するが如き結果を生ずまいと考へらる。この種の論は政策を論ずる時に譲る。

土地は所有者によつて耕作利用せらるゝならば地代(小作料)はない理であるが、土地私有制が發達するに及び土地を所有するが自ら之を利用せざる者あり、土地を所有せざる者にして土地を利用せんとする者を生ずるに至つた。土地所有者にして土地を他人に利用せしむる者は地代(小作料)を要求するのである。他人の土地を利用せんとする者は地代を支拂はなければならぬ。

土地の所有權が確立するや、土地を所有する者が土地を他に讓渡す時には其の代價を要求することを得る。新に土地を得んとする者は代價を出さざるを得ない、従つて農業を經營する者は勢ひ地價を計算の中に入れざるを得ない。地價は如何にして定るか、土地を購めるのは土地を利用して收穫を得んが爲であるに相違ない、従つて收穫の價格を還元したより多く代價を出すものはある

まい、即ち、生産費が財貨の価格を決定する標準となる如く、收穫の価格を還元したものが土地の価格を決定する標準となるものである。收穫といった所で年多少の差異があらうし、其の価格も勿論年により變動するのであるから、一定不動ではない、其の価格を還元するにしても之を計算すべき利子歩合も亦變動するものであるからこれ等のものによりて計算することは畢竟其の平均によりて計算したものを大略の標準とすると見るより外に仕方はない、所で、土地は前にも陳ぶるが如く獨占的であるから之によりて其の土地を希望するものが多くなれば、該標準より高くもなる、其の上に其の土地を得んとする願望によりては益々高くなるであらう。反之、土地所有者の經濟事情によりては其の土地を急に手離さんとする場合には該標準より廉價に之を賣却するであらう、これ等の諸原因が集りて地價を決定するものといへる。

所有地を
利用し得
ぬ場合

土地を所有する者が自ら之を利用収益する能はざる場合の主なるものを擧ぐれば

一、土地所有者が年少である爲に、土地を利用すること能はざることもある。

之と同じく土地所有者が死亡して遺族のものが土地を利用すること能はざることもある。

二、土地所有者が他に本業ありて力を耕作に専にすること能はざることがある。特に土地所有者が其の居村に住居しないで都會に出でて他の業務に従事するが爲に其の土地の利用は自らなすこと能はざることもしくはない、かゝる場合は、土地所有者の子息が居村を去つて都會に出でて他の業務に従事してゐる間に、土地所有者が死亡し都會に在る子息が其の財産を相續するに至つたが、居村に歸りて土地を利用すること能はず、利用することを欲しないが爲に、他人をして之を利用せしめんとすることから生ずること少くない。

三、所有土地の面積が廣いか又は散在してゐる爲に、自己又は其の家族の力のみにては到底之を利用すること能はないことも少くはない。かゝる場合に農業労働者を傭ひて之を利用収益せしむることも一方法であるには相違ないが、農業労働者を傭ひて之を利用せしむるには相當監督をなさな

ければならない、このことが事實困難である場合には、寧ろ他人に貸與して小作料を受領するを寧ろ利益とすること少くはない。

四、土地所有者が資本乏しきか、負債が多い爲に自力にては到底土地を利用すること能はないこともあり得る。農業家は保守的のものであるから其の土地を離るゝことを好むものではない、其の離村せざるを得ざるに至るのはよくよくの事由のあるには相違ない、従つて土地を所有するに拘らず、其の土地を利用し得ざるものもあり得るのである。

反之、土地を耕作利用せんとするに拘らず土地を所有せず、他人の土地を借りて利用しなければならぬ場合の主なるものを擧ぐれば

一、土地を利用収益する能力あるものが自ら土地を購むる丈の資力なきことあり、其の資力あるにもせよ、土地を購求するが爲に其の資力を盡す時は經營する丈の資力なく結局其の利用収益をなすこと能はないことがあり得る。

二、土地所有者が自己竝に家族の勞働力多くして自己の所有する土地を利

他人の土地
を利用する
場合に
他人の土地
を借りて
利用する

用する丈にては餘りある場合には、其の勞働力を利用するが爲に他人の所有する土地を借りて之を利用収益せんとするのである。

斯の如く他人をして其の土地を利用収益せしむる場合に地代(小作料)の問題を生ずるのであるが、元來地代が獨立せる一種の所得となつたのは比較的新しいことであつて、古昔は土地は領主(豪族)の領有に屬してゐたから、領主が其の土地を他人をして利用せしむる時は利用するものは之に對して貢物又は夫役を出したのである。これは一種の地代であるには相違ないが、其の料金は土地の生産力等を標準として定められたものではなく、其の土地を利用するもの、身分によりて定められたものである。其の者が自由民であれば其の料金が低いが、奴隸であれば其の料金は高いのであつた。地代が獨立せる一種の所得となつてから學者が之に注意するに至つたのであるが、理論的に之を研究するに至つたのは英國學者である、特にリカルド(Ricardo)の地代論は最も有名である。リ氏は地代を嚴正に解し土地固有不滅の生産力を利用せしむる報償であるとしたのである。然し、土地には自然の儘の土地ともいふべきものはなく、我等が

リカルド
の地代論

利用するまでには相當資本並に労働が加えられてゐるから、これ等資本並に労働の生産力から切り離して土地固有の生産力を考え之を利用せしむるが爲に報償を得ることは理論上に於ても實際上に於ても想像することは出来ない、故に嚴正なる地代の觀念を捻出して之が理論を立つることは如何程の價値あり、従つて之より演繹せられた結論は如何程の價値ありやは疑問ならざるを得ない、さればリカルドの地代説に關する論争は根本は地代の解釋に關する見解の相違から生ずるものといふことが出来る。

差益地代

リカルドの地代説の重點は地代は耕作限界、即ち辛うじて生産費を償ふに足る土地に於ける收穫と或土地の收穫との差異によりて定るのであつて地代(差益地代)は農産物の生産費の一部をなすものではない、地代が高いから農産物の價格が高くなるのではなく、農産物の價格が高いから、其の土地と耕作限界との差異が甚しくなり従つて地代が高くなるといふのである。其の説を略述すると、農産物の需要が未だ多くなく、生産力の最も大なる土地を耕すのみにて既に其の需要を満足することを得る間は地代は未だ發生するものではない、然し、

耕作限界

人口が漸く多く農産物の需要も従つて多くなれば、最も生産力の大きな土地を耕すのみにては其の需要を満足すること出来ない、こゝに於て、多くの資本労働を用ひて收穫を多くするか、生産力の稍劣れる土地を耕すか、二者一を選ばなければならぬ、生産力の少い土地を耕すにしても之を耕しても辛うじて生産費を償ふことを得るに止り地代を出すことは出来ない土地以下に耕作を進めることはあり得ない。之を耕作限界といふのである。所で、前の生産力の大きな土地は同じ資本労働を用ひても遙に多くの收穫を得るから兩地の收穫の差額を地代として其の土地を所有する者に出して之を耕すも利用する者にとりて損益はないのである。かくして生産力の大きな土地に地代を生ずるといふのである、若し農産物の需要が増加して更に生産力の劣る土地を耕しても收支償ふ時は耕作限界は下り、或土地との收穫の差が甚しくなるから地代は其れ丈増加せざるを得ない。以上の説明は單に土地の生産力に差異あることを假定し、耕作地と市場との距離を觀ないのであるが、市場より距離の遠い耕作地の農産物は市場までの運搬の費用を要すること多いから、其の土地の純收穫は市場

絶對地代

に近い生産力の劣れる土地の純收穫と異らない、故に其の地代は運搬の費用丈低からざるを得ないといふのである。

土地固有の生産力と之に資本労働の加はつた生産力とを區別することが出来ないとすると、實際問題としては自己の土地を他人をして利用せしむるに對して受くる報酬を以て地代と解さなければならぬ。これが一般にいふ地代であり、學者が差益地代に對していふ絶對地代である。この意味に於ける地代（小作料）は土地所有者と土地を利用せんとする者との契約により定まるものであつて、性質上比較的長期に亘つて定めらるゝものである。農産物の價格が高くなれば、收穫は増加しないでも、収入は多くなる理であるから多額の地代を出しても利益があるから、土地利用者は多くの地代を出すことを肯ずるに相違ない、故に土地利用者の収入を増加する原因となるものは同時に地代を増加する原因となるものである。人口が増加し、交通機關が発達し、若くは農産物價格の騰貴を促すが如き政策が行はるゝ時は間接に地代を増加するものである、反之、農法の改良の如き農産物の生産費を減少し農産物の價格を低落せしむる原因と

農産物と
自然的生
産條件

なるものは地代を低下するものである、少くとも其の増加を阻止する原因となるものである。地代に關する一般的説明はこの位に止めて置く。次に農業政策を研究するに當り知らなければならぬのは農産物の價格である。農産物は我等が土地の生産力を利用して生産するものではあるが土地の生産力や氣候等自然的生産條件によりて制限せらるゝものであるから、我等が唯資本並に労働を用ひさへすれば農産物の收穫を増加し得るものでもない、例へば、米穀の如きは其の原産地が印度ガンヂス河の附近であるといはるゝ通り相當の太陽の光力と熱を必要とするものである、従つて、我國でも中部から九州地方にかけては暑熱が強い丈土地の豊沃の程度を別にして多くの收穫を擧ぐることが得るが、東北地方になると暑熱が比較的弱い上に、動もすれば冷氣が割合に早く來るから早稲の穀種でないとも動もすれば十分の收穫を擧ぐることが出来ないう、凶作の害を受けなければならぬ、尤も資本と労働とにより人為的に自然の制限を超越して生産することも不可能ではないが、生産費が大に嵩みて經濟的に生産することは出来ない。故に政府は頻りにこれ等の地方のものに早熟の穀

種を栽培することを奨励するのであるが、早熟の穀種を栽培したのでは収穫が割合に少くして、農業家は喜ばない、農業家は冷害の危険を冒しても、普通の穀種を栽培せんとするのである。かくの如く、農産物の生産は自然の生産条件によりて制約せらるゝことは少くはない、工業とても自然的生産条件によりて制約を受けない譯でもないが、農産物の如く甚しくないことは人のよく知る所である。農産物の中でも我等の常食とする穀物が主要なる位置を占めるのであるが、これ等の穀物の中でも小麦の如きは世界到る所で常食とせらるゝものであり、従つて世界到る所で生産せられるのである。而かも其の成熟、収穫期が國により異なるが爲に穀物の移動が世界的に行はれるので、之が運搬を目的とする航路の如きは世界經濟上重要な働をなすつゝある。反之、穀物によりては其の消費せらるゝ地域が比較的制限せらるゝと同時に其の生産せらるゝ地域も亦制限せらるゝものもある。砂糖等所謂植民地産物は其の生産地が熱帯地方に限定せらるゝに拘らず、其の消費は今日では殆んど世界中に普く特に文明國に於ては國民の必需品として盛んに消費せられ、人によりては砂糖の消費量の多少

農産物の
生産時期
と価格

を以て其の國の文明をトせんとするものがある程である。尤も、古昔はこれ等のものは熱帯地方から運搬しなければならなかつたから貴族等社會上層の者丈が之を消費したもので中層以下の人民は之を消費することが出来なかつたもので、又十八世紀の半までは砂糖は熱帯地方で生産せられるのみであつた。然るに甜菜糖の生産方法が発見せらるゝに及びて歐洲北部の相當寒冷なる土地に於て甜菜から採取せらるゝに至つたのである。農産物の生産条件等につきて叙述する時は甚だ煩はしき次第であるが、兎に角其の生産は自然の生産条件によりて甚しく制限せられてゐることは明白である。特に穀物の価格について大切なのは生産の時期が一定してゐることである。其の需要が甚大であるといつても直ちに収穫を得ることは出来ない、収穫期まで待たなければならぬ、従つて収穫期には供給が甚だ大であつて價格が低廉であるが、漸次消費せられて俗に端境期になると、供給が甚だ少くなり、従つて穀物の價格は騰貴せざるを得ない。而して、一面穀物の如きは貧富によりて消費量が甚しく異なるものでもなく、穀物の價格が低廉であるからとて其の需要が著しく増加するのでも

なく、さればとて、穀物の價格が騰貴したりとて其の需要が著しく減少するものでもない、即ち農産物は供給弾力性も乏しい代りに需要弾力性も亦乏しきものである。従つて穀物の價格は工業品等に比較して變動の程度即ち値幅も大であると同時に其の變動も頻繁であるといへる。穀物は國民の生活必需品であるから成るべく其の價格が一定して甚しき變動のなきことを希望するに拘らず事實は全く其の希望に相反するものであるから、國家が價格政策を行ふに苦心せざるを得ないのである。

農業は土地の利用による生産であるから其の收穫の多少は主として其の土地の生産力即ち豊沃の程度と自然的生産條件によりて定まるものであつて、勞働資本は之を或程度まで動かし得るに過ぎない、従つて土地の獨占性と相俟つて農業では土地が主體となつて人間は之が副たるの觀を呈するのである。其の極は農奴の制に於て見る如く土地が他人に讓渡さる時には、之を耕作しつゝあるものまで他の主人に讓渡さるゝのである。かくの如く、土地を利用する者は農業の性質上其の土地に對して執着性を生ずるもので、重大なる原因がなき限

收穫の多
少は土地
の生産力
による

り其の土地を離れんとするものではない。故に後にも説くが如く、例へば耕地整理をなすが爲に其の土地を他人の土地と交換することが耕作上大に有利であるとしても、祖先からの土地であるとして容易に之が交換を肯んぜざるものがある。之が交換を斷行せしむるには政府の力を用ひざるを得ないのである。土地を利用するものは其の土地に對して執着すること厚く特に其の土地を所有するに至れば、其の土地に對する執着は益々甚しくならざるを得ないのであるから農業植民地に於て明に見ることを得るが如く植民者の間で土地が平等に分配せられ自ら其の家族と共に之を開拓する時は其の土地に對する愛着心は愈々強くなると同時に、其の土地を耕作してゐれば其の家族は他からの援助も拘束もなく生活することを得るとの信念を抱くやうになり自ら獨立不羈の精神を有するもの多く民本主義の社會は自ら實現せらるゝのである。従つて君主、諸侯等の壓制に會ふ時は敢然として之に反抗せんとするのである。百姓一揆等の思想的背景は自らこゝに存すといへるのである。然るに、都會生活を營むものになると、商工業者の生活を見ても明である如く其の土地に對して殆

んど愛着心を有しない、其の土地に於て多くの儲をなすことが困難であると見れば、直ちに其の土地を棄て、他の土地に赴くのである。若し官憲の苛政によりて苦めらるゝ時は、農業家の如く敢然立て争はんよりは寧ろ其の土地を去つて安住の地を求めんとはするのである。されば、古來の歴史を見ても商業地は自由不拘束の空氣が濃厚であるものが多い、之は商業は其の業務の性質上自由に行動することが必要條件であることも其の原因であるに相違ないが、一は官憲にして其の住民に對し少しく拘束的態度を採る時には其の地を棄て、他の土地に奔るもの多く従つて今まで繁鬧の巷も直ちに落寞の府とならざるを保せないからである。又之を栽培植民地に見る、同じ植民地でも農業植民地とは異り其の土地は熱帯に位し、歐洲の植民者には到底栽培することが困難であるから、自ら土地を利用せず黒奴等を備ひて栽培せしめ、自分は之を監督し其の生産物を販賣するに過ぎないのである。かゝる場合には植民者の其の土地に對する愛着心は農業植民地に於けるが如く鞏固でないことは容易に想像することを得るのである。されば、これ等植民者にして相當産をなすことを得るか、又は

農業と他の
生産との
差異

反對に其の土地に止つてゐても成功の望少しと思へば、其の土地を去つて本國に復るものが多い、自ら其の土地に親しむものでないから成るべく廣漠の土地を得て相當多數の黒奴を使用して出来る丈多くの利潤を得んとするのであるから、かゝる植民地には民本主義的思想の起るべき素因は存しない譯である。

以上陳べた如く、農業を以て生活の本源となす農村には農業の本質からして一種の社會思想が生れざるを得ないのである、特に郷土を擧げて土地に親しむものなる以上、醇朴質素の風俗が行はるゝは當然であつて、上にも陳べた如く農村を以て道德の淵源地であるとなすのは當然といはなければならぬ。農村をして永く良風美俗の地たらしめんことを希望せざるを得ない。

三 農業と他の生産との差異

農業を他の生産例へば工業に比較すると次の如き差異を擧ぐることが出来る。

一、工業は其の生産は其の時を選ばず何時にても初め得ると共に、何時にても停止することを得るし、完成まで勞働を繼續することが出来る。これは工業

は生産の性質として自然によりて制約せらるゝことは殆んどなく、労働と資本とによりて營まるものであるからである。されば、手工業に於て見ることが出来るが如く、注文が殺到する時は手工業者は殆んど晝夜を分たずして其の健康の許す限りは、生産を急ぐのであるが、注文少き時は手工業者は悠々として労働せず、労働するにしても極めて少く労働する。これと同じく年末等になれば計算期であるから大に労働するのであるが、正月にでもなれば所謂骨休をするのである。これ等の繁閑は生産の性質から来るのではなく、生産者の意思又は環境から来るのである。機械力を用ふる工業になると、機械は多くの資本を要した爲に成るべく間断なく利用して成るべく多くの生産をなすのが生産者にとりて得策であるから、間断なく之を運轉し従つて生産も亦間断なく行はるゝを常とする。反之、農業になると其の生産は自然によりて制約せられて、生産者が随意に之を變更することを得ない、農産物は其の種類により種蒔の時から刈入の時まで一定して之に背くことを得ない、従つて農業家の繁閑の時は自然によりて一定してゐる、我國でいへば初夏より秋に至るまでは繁忙であるが、冬期

農業と生
産の時

は全く閑散である。而かも、農繁の時と雖も、毎日働かねばならぬものでなく例へば種蒔が済めば、苗が出づるまでは待たねばならぬ如く、農産物の成育に伴うて労働する時と休養する時が一定してゐるもので、労働を休止しなければならぬものである。自然が生産を支配し人類は之に順應して労働するに過ぎない。従つて農業家が如何に勤勉であつても我國でいへば二百十日に暴風雨でもあれば、折角の努力も其の半を失はなければならぬ。

二、工業に於ては其の生産手續を若干部に分割し同時に熟練堪能なる労働者により生産を進ましむることが出来る。従つて比較的短き期間で生産手續を完了し生産物を市場に出すことが出来るが、農業に至つては生産は自然の力を藉らなければならぬから、生産手續を分割して同時に生産を進むる譯には行かない、順を追うて生産手續を行ふより外に途はない、従つて労働者を生産手續の段階に應じて改めることは困難である、従つて生産手續の全段階を通じて同一の者が其の生産に當るを常とする。勿論農業家も熟練の多少技能の巧拙があるから、其の生産の結果に於て優劣あるは已むを得ざる所である。一言に

農業は生
産手續を
分割する
を得ず

して盡せば、人類の労働等の生産の結果に及ぼす力は農業に於ては工業に於けるが如く多くはない。

三、工業が生産として農業に比し優る點は前に陳ぶる如く生産手續を幾段階に分割することが出来るが爲に、其の段階に應じて所を異にして生産をなさしむることが出来る。其の結果其の工場を生産に最も適する土地に行ふことが出来るのみならず、其の生産の爲、機械其の他の設備をなして最も合理的に生産をなすことが出来る。其の生産はこれ等の設備により固定せらるゝから、労働する者も其の場所に定着して其の場所を離るゝことが出来ない、このことは生産技術としては勿論合理的のことであるが労働者の健康等よりいへば決して稱すべきことではない。反之、農業は自然の力によりて生産せらるゝものであるから、其の労働は戸外によりてなさるゝものであり、而かも或場所に固着するものではなく、常に移動しなければならぬものである。大經營組織の下に農業機械等を用ふるにしても、其の機械は一定の場合に固着するものではなく、移動的のものでなければならぬから、其の機械なり設備なりは自ら其れに適するも

のでなければならぬ、而かも之を用ふる期間は農業の生産の性質上極めて局限せられてゐるものであつて、之を用ふる期間は普通五六週間に過ぎない、従つて一年を通じて十月以上は之を用ふることは出来ない。其の機械等にして資本を要すること大なるものであれば、工業に於ける如く資本の效力を十分に發揮せしむることは出来ない。農業に於て農業家が利用組合を設け機械を据付けて其の力によりて労働を省かんとすることはあるが、其の機械の利用は性質上大に局限せられてゐる。何者、農業の生産手續上同一の機械等を用ふのは殆んど同じ時であるからである。

四、上にも陳ぶる如く工業に於て生産の期間を大に短縮することが出来る。生産技術が進歩し生産能率が進歩するに従ひ其の生産期間を短縮することを得るが、農業に於てはこのことは望むことは出来ない。

五、農業にては土地は活動の舞臺であると同時に生産力によりて收穫を生ずる要素である。工業に於ては單に活動の舞臺を提供するに過ぎない、農業では上に陳べた如く收穫遞減の法則が行はれてゐるから資本や労働を増加した

收穫遞減
と收穫増

割合に收穫を増加することが出来ない。換言すれば收穫を増加するに従ひ生産費を増加しなければならぬから、私經濟上收穫を増加することは出来ない、反之、工業では土地の生産力を主とするものではなく資本労働を主眼とするものであつて資本労働を増加して大規模に生産するに従つて收穫は資本労働の増加する割合よりは遙に増加することが出来るものであるから生産費は生産量の増加するに伴ひ減少することが出来る。農業は小經營が有利であり工業は大經營が有利である。従つて、工業では小經營が漸次廢れて大經營のみが行はるゝようになるのであるが、農業では交通が發達しても大經營が昌にはならず、大經營方法は獨り農産物の配給や販賣につきて用ひらるゝに過ぎないのである。

こゝには工業を選んで農業と比較して生産の差異の主なる三四の點を列擧したのであるが、之によりて見るも、農業は生産として自然によりて制限せられ人類は其の力によりて其の束縛より脱出しようとしても、其の程度は極めて局限せられてゐることを知ることが出来る。これ等の束縛の下で之が生産に當

るものが其の經濟上の幸福を庶幾しようとするのであるから、問題の解決は頗る困難ならざるを得ないのは當然といはなければならぬ。農業政策を論ずるものは三たび意をこゝに致さなければならぬ、農業は其の國の主要なる生産であるから之が生産を昌にするが爲に如何なる犠牲も敢て辭す可らずとなすが如きは予輩の採らざる所である。

第三章 農業の發達

四 粗笨的農法より集約的農法へ

農業は土地の生産力、氣候等の自然の生産條件によりて制約せらるゝに拘らず、年と共に次第に發達して今日に及んだものである。其の發達を一言にして之を蔽へば粗笨的農業から集約的農業への進展ともいへるし、經驗にのみ由る農業から科學的農業への進展ともいへる。粗笨的農業とはいふまでもなく、土地を利用するにも資本や労働により其の收益を増加せんとはせずして主として自然にのみよりて收益を得んとする農業であり、集約的農業は之に反して、資本労働によりて土地の收益を多くせんとする農業をいふのである。粗笨的農業と集約的農業の限界は明確ではないが、抽象的にいへば以上の如き區別をなすことが出来る。

太古に於ては労働資本によりて收益を多くする途を知らなかつたから、農業は主として熱帯地方で、天然の恩恵甚だ潤澤であつて、人民はさまざま勞せずして

粗笨的農
法と集約
的農法

生活の資料を得ることが出来る地方を中心として行はれたものであらう、従つて太古の文明はこれ等の地方に起つたものであらう。然し、自然の天恵の濫授は却つて人民をして安逸に流れしめ、心身を勞して自然を利用し其の收穫を多大ならしめようとはしなかつた。現に亞弗利加の内地では今日尙千年以前の農業状態を脱することが出来ないといふ、従つて、農業はこれ等自然の恩恵の潤澤なる土地に起つたには相違ないが、大なる發達をなすことがなかつたのである。寒帯地方に居住してゐた人民も勿論其の生活を營む爲に農業と牧畜とを營むだに相違ないが、土地を利用するにしても餘りに勞多くして功少いから、これ又農業の發達を見ることが出来なかつた。従つて、農業の最も發達し得た所は温帯地方であつて、自然の恩恵は熱帯地方の如く潤澤ではないが、さればとて寒帯地方の如くに貧弱でもない、人類をして之を利用せんとする念願を起さしむるには十分である。こゝに於て其の知能を盡し、身體を勞して土地を利用して多くの收穫を擧げんとするに至つたのである。其れには、第一、或土地に定着しなければならぬ、定住して同じ土地を利用せんとするに非ざれば、到底多く

の收穫を擧ぐることは出来難い、一定の土地に永住して之を利用せんとするところが農業を發達せしめた第一歩であるといはなければならぬ。勞働によりて土地を耕し其の土地をして植物を培養するに最も適當なる状態になすことが第二歩でなければならぬ。深耕が收穫を多くすることを得ることは太古の人民も經驗上知つてゐたので、少くとも或程度まで之を行つたに相違ない、其の栽培した植物はこれ等人民の常食としたものと其の衣服の材料となるもののが主要なるものであつたのであらう。土地にも餘裕があり勞働にも餘裕があつたから、其の他のものも栽培したのではあらうが、特に注意したのではあるまい。これ等農法に注意するに至れば、直ちに肥料によりて其の土地の生産力の銷磨するのを防止せんと注意するに至つたのであらう。所謂燒畑農法等がこの農法の原始的のものである。即ち自然に生育する雜草等を焼いて其れより生ずる灰を以て肥料となす農法であつて今日でも亞細亞、南亞米利加の内地にて盛んに行はるゝ所である。開墾地を作る場合には雜草並に雜木林を焼くことは常に行はれてゐる所である。雜草又は穀物の根株等を土中に埋めて之を腐蝕

せしめ以て其の肥料となすことも之に類似する方法である。かくの如く、人民は其の經驗により肥料によりて土地の生産力の銷磨するのを防ぎ、若くは其の生産力を増加するに苦心するに至つたのである。動物性の肥料を用ふるに至つたことは前に一言したから重ねていふまい。農業の發達と牧畜の發達とは概ね雁行するものである。牧畜は人類に食料を供するのみならず、農耕に用ひて勞働に代らしむることが出来、更に其の排泄物は肥料として土地の生産力を増加することが出来る、而かも之を養ふことは比較的容易で、相當廣い牧場でもあれば放牧することが出来る故に、農業をなすものは傍ら牧畜をなすのが常である。我國では、宗教等の關係から牧畜に力を用ひなかつたから、農業も歐洲等とは自ら異りたる發達をなさざるを得なくなつたものらしい、其れは兎も角、普通は、農業の發達と牧畜とは雁行してゐるものである。

所で、農業の發達に一轉期を劃したのは二圃農法又は其れより廣く行はれた三圃農法に於て見る如く、農耕地を不斷に利用せずして順次其の一部のみを利用し、他のものは休養せしむる農法が採用せられたことである。これは畢竟農

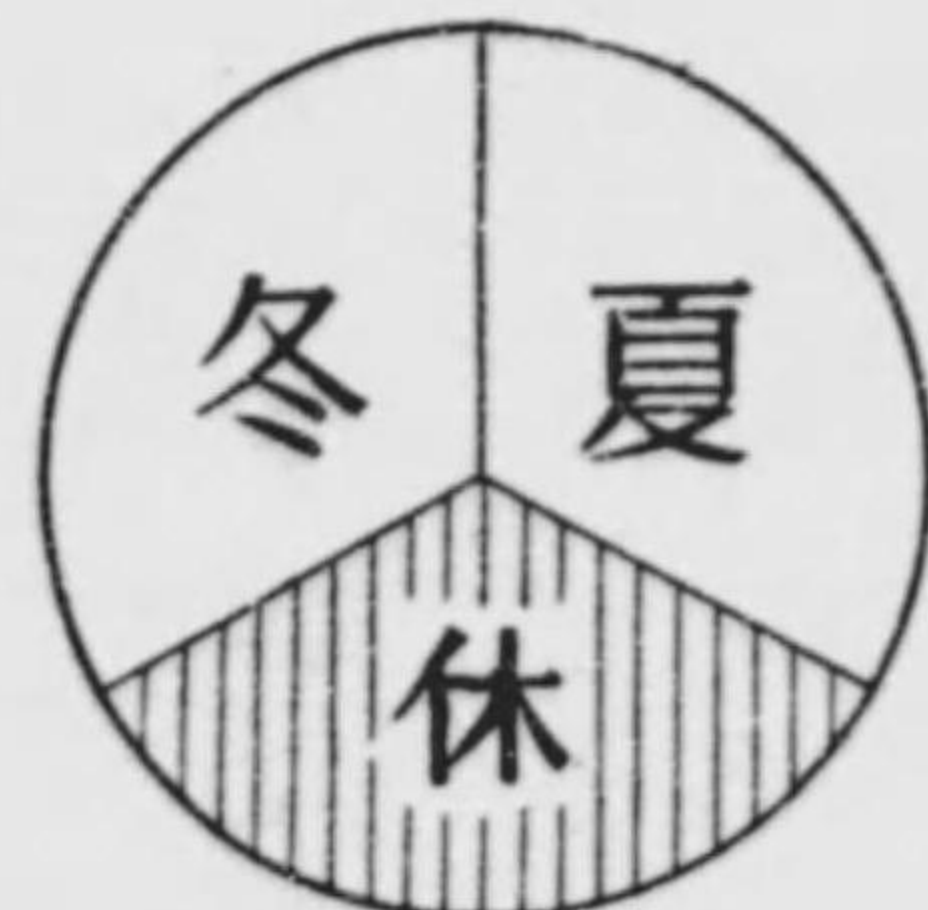
耕地を不斷に利用する時は其の生産力が次第に衰えて其の收穫が減少せざるを得ない、さればとて收穫が減少するを見て一年を通じて休地とする時は農業家は一年を通じて休まなければならぬ、従つて、或年は多くの收穫を得、或年は全く收穫を得ること能はざることとなり、其の經濟生活は甚だ不安定ならざる

第一年(第四年)

第二年(第五年)

第三年(第六年)

三圃農法



を得ない、故に利用すべき農耕地を二分又は三分し、交る交るに之を利用するに至つたのである。三圃農法にては農耕地の三分の一を夏作に充て三分の一を冬作に充て残り三分の一を休地となし翌年になると今年休地としたる所を夏作に用ひ、夏作に用ひたる所を冬作に充て、冬作に用ひたる所を休地とするのであつて、かく順次に農耕地の三分の二丈を利用するのである、二圃農法にては夏作

に用ふる地と冬作に用ふる地を交互に更えるのである。これは勿論土地の生産力を濫りに消耗せしめざる爲と農業家の收穫を成るべく變動なからしめ従つて其の經濟生活を不安定ならしめざる爲に案出せられた農法ではあるが、之を行ひ得るは土地は甚だ廣くして、之を同時に利用しないでも、農産物の需要を満足するに十分であり、一方土地を同時に利用するには勞働力が十分でないから土地を四時を通じて平等に利用するを以て得策と考へたから之を用ふるに至つたものである。この農法は可成永く用ひられたものであつてこの農法より更に集約的なる輪環農法が用ゐらるゝまでは何れの國に於ても用ひられたものであるといふことである。英國などにて輪環農法が初めて用ひらるゝに至つたのは十八世紀の半であるといふことであるから農法の進歩が比較的遅緩であつたとも稱することが出来よう。

三圃農法に至るまでの農法は土地の生産力を浪費せざることを目的とするものであるが、土地の生産力を更に有効に利用するには植物によりて土地の生産力の中如何なる化學的成分を消費し、如何なる化學的成分を殘留するかを知

科學的農
法の發達

り之が補充の途を講じなければならぬ。このことは單に老農の經驗にてはなし得ることは出來難く、科學の力に俟たなければならぬ。農業が經驗に由る農業から科學的農業に進展したのは實に科學の應用に外ならないのである。農業をしてこの進展をなさしめたのは實にリービッヒ(Liebig)氏の力である。リービッヒは化學者である。其の化學の知識を農業に應用し植物と土壤との關係を化學的に明にしたのである。リービッヒがいふには、如何なる植物も生育するには一定の榮養分を攝取しなければならぬ、其の榮養分の中一でも缺いたならば其の植物は生育することが出來ない。假令、他の榮養分を増加しても、植物の生育には何等の效もない、一の榮養素は他の榮養素の代用となるものではない、植物の生育には最少限度の必要なる榮養素があるものであるといふのである、之をリービッヒ最少限度の法則といつてゐる。リービッヒ並に其の門弟は熱心に植物と土壤との關係を研究し之を農業に應用する方法を教えたのであるからこゝに農法に一大變革を來たしたのである。輪環農法、自由農法の採用は實に其の結果であるといつても差支ない。

輪環農法

輪環農法といふのは或種の植物を栽培して相當の收穫を得たる時は、其の土壤の成分には相當の變化を來たしたのであるから、全く異なる種類の植物を栽培する時は、一は前に消費した榮養素の少くとも一部分を補ふことを得、一は新に栽培した植物に必要な榮養素を與ふことを得るのであつて、其の土地の生産力を大に消耗せずして異種の植物を培養することを得るのである、例せば、豆類を培養した後に大根類を栽培するが如しである。而して、土地の生産力の中消耗した榮養素については適當の肥料を以て之を補へば宜しいのである。この輪環農法は必しもリービッヒ以後の科學的農業が起つてから用ひられた農法ではない、前にも陳べる如く十八世紀の半には英國では地方によりては輪環農法を用ひてゐた所もあつたといふことである。蓋し、植物により土壤の成分を吸取消費するに差異のあることは老農等には經驗上十分に知られてゐることであるから、少くとも或程度までは栽培する植物の種類を更改するにより土地の生産力を最も巧に利用することを得べきは考えらるゝ所である。然し適確に輪環農法を用ふるには科學的基礎の上に立たなければならぬ、其の廣く

用ひらるゝに至つたのは科學的農業が起つてからであるといへる。輪環農法は農法として三圃農法に優つてゐるから從來三圃農法を用ひてゐた地方でも直ちに輪環農法を用ふるに至つたかといふに必しも然らず。三圃農法では休地を設けて置かなければならないから不經濟であるやうであるが、休耕地に牧畜することは出来るのであるから農業と牧畜とを併せ営む時にはさまで不經濟とはいへない。輪環農法を用ふる所でも牧畜の爲に或土地を充てなければならぬから、其の地方の狀勢で三圃農法に比較して大に私經濟上優つてゐるとはいへない。加ふるに、輪環農法を行ふ時は土地の生産力を補充するが爲には勢ひ人工的肥料を用ひなければならぬから、農業家にとりては經營費を増加することになるので、これ等のことを併せ計算すると、所によりては輪環農法は必しも三圃農法に比較して經濟上有利であるとはいへない。是れ歐洲大陸でもライン流域、中央獨逸、白耳義、英國南部地方、北伊太利の一部には輪環農法が盛んに用ひられてゐるに拘らず、其の他にてはさ程行はれてゐない理由であらう。輪環農法が更に一步を進める時には、自由農法となるのである。自由農法と

自由農法

は人工的肥料等によりて土地の生産力の足らざる所を補ひ其の欲する植物を栽培せんとする農法をいふのである。科學の力によりて植物と土壤との自然的制限を克服して、所期の收穫を擧げようといふのである。自然的制限を顧みないから自由農法と稱するのである。この農法はいふまでもなく多額の生産費を必要とするのであるから、多額の生産費を用ひても收支償ふことが出来る場合でなければ用ふることは出来ない。故に都會附近の土地で市場までの距離近く運搬費を要すること極めて少い場合か、園藝等にて其の植物の價格が甚だ高く、多くの生産費を用ひても尙收支相償ひ得る場合に於て初めて用ふることを得るのである。

五 農法と交通機關

農法は粗笨的農法から集約的農法に進步するのではあるが、其の集約的農法に進步するのは資本労働を多く用ふるも、尙收支償ふことが出来るからである。若し、經濟上收支償ふこと能はざる場合には集約的農法に移ることは出来るものではない。農産物は其の重量の割合に價格の低廉なるものであるから、農産

農法と交通機關

物の多く消費せらるゝ大都會の附近では運搬費を要することが少いから集約的農法を用ひても收支償ふことが出来るが、大都會を去ること甚だ遠い所では運搬費を要すること甚だ多いから、集約的農法を用ひては收支償ふこと能はざるが故に勢ひ粗策的農法に由るか粗策的農法を用ふる農業に従ふより外はない。これは畢竟運搬費に由つて生ずることである。運搬費の多少は交通機關の配置に關係すること甚だ大ならざるを得ない。この點についてハイニンリッヒ・ホン・チュンネン(Heinrich von Thünen)の實驗に基きて研究した所は大に参考とするに足るのである。チュンネンは一八二六年に『孤立國』(Der isolierte Staat in Beziehung zu Landwirtschaft und National Oekonomie)を著し農産物の價格と農業制度との關係を説明せんとしたのである。氏は先づこゝに平原ありと假定し、其の平原には河川、鐵道其の他人工的道路もないものとし、其の平原の中央に唯一の都會があり其の周圍の農産物を吸收消費するものとし、更に農産物の價格は其の生産地に於ける價格に運搬費を加算したものが其の農産物の價格であるとする、従つて都會を距ることが遠ければ遠くなるに従ひ農産物の價格は

低廉となるものと假定する。かゝる情勢の下に如何なる農法が各地に行はるかを実際の計算に基きて研究した所が次の如き結論を得たのである。即ち其の都會に最も近い所にては野菜、新鮮果實の栽培、牛乳、牛酪、鶏卵の採取、麥、粟、刈草の採取は收支償ふことが出来る、これ等は一は其の重量の關係から一は腐敗し易い關係から普通の方法で遠隔なる土地から運搬することは出来ない、又これ等の地方では都會から肥料を得ることが容易であるから牧畜をなす必要はない、都會の附近で牧畜の行はるゝことの少いのは之が爲である。かゝる地方では所謂自由農法が行はれてゐるのである、これがチュンネンの第一層である。第二層はチュンネンの計算にては森林地方である。木材は重量大にして運搬費も亦従つて甚だ大であるから、遠隔なる地方から之を運搬することは出来ない、故に都會に比較的近い所で、之を生産するのが經濟上有利であるといふのである。

第三層は農耕地であるが比較的多くの生産費を用ひても收支償ふことが出来るから輪環農法の如き集約的利用方法が行はるゝ。

第四層は生産費の關係で三圃農法以下の比較的粗笨的利用方法が行はれてゐる、穀物の供給は多くはこの地層から出づるものである。

第五層になると農耕地として用ふるも經濟上有利ではない、故に牧場として用ひられてゐる、更に其れより遠隔なる土地になると、之を利用しても利益を生ずることはないといふのである。チュンネンは之によりて農業家は隨意に農産物の種類を選ぶことも出来なければ又農法を選ぶことも出来るものでもない、收支計算上自ら一定の農作物と農法に由らなければならぬといふのである。但し、これは平原で、而かも交通路もない場合を假定して計算をしたのであるが、こゝに一條の河川が其の平原を貫通してゐれば、上に陳べた地層は大に變化せざるを得ない、何者、河川による運搬費は陸路を運搬するに比較して大に減少することが出来るから其の河川に近い所では比較的集約的農法を用ひても收支償ふことを得るし、之に適する農作物を栽培することが出来る。既に一條の河川でも農業的に利用すべき地層に大なる變化を生ずることが出来るのである以上、夥多の交通機關が錯綜する場合には、其の地層に多大の變化を生ずる

ことは想像することが出来るのである。特に農産物の價格は獨り運搬費のみによりて變化するものではなく、夥多の原因によりて變化するものであるから、チュンネンの説くが如き簡單のものではないことは明白である。唯これ等の假設の下にチュンネンの説く所は我等に大なる教訓を遺すものであるといひ得る。

第四章 我國の農業

六 農耕地は比較的少し

我國の農業政策を研究するに當り我國農業の現状を知り置く必要がある。我國は豊蘆原瑞穂國といはれた如く、古より農業が最も主要なる生産であつた、國民の大部分は農業家であつた、従つて政府等も農業の振興について最も力を盡してゐたのであつた。我國は南北に長く、従つて氣候の差異は最も甚しく、南では熱帯植物を栽培することを得るに拘らず北では寒帯植物を栽培することを得、我國の栽培する植物の種類が多いことは世界諸國の中でも指を屈する中に加はることが出来るであらう、其の中で最も重要であるは米作であるが其の中でも水田作が主なので、陸稻になると水稻の三分の一にも足らない程である、されば我國で農業といへば米作を連想し米作といへば水稻を聯想するのである。我國の農業階級の福祉を増進するに當つて今日の如く米作にのみを重きを置かなければならないかは十分に研究しなければならぬ問題であるが、兎

我國の農耕地は比較的少し

に角米穀が古昔より主要なる農産物であり、國民の主要なる食物であつたから之に最も重きを置いたのは當然である。然し、水田は傾斜十五度以内の土地でなければならぬのであるが、我國は山岳重疊として平坦の地割合に少く稍見るべき平坦の地は海岸、信濃川、利根川、吉野川等の大河川の流域等に止るのであるから農を以て國本となしてゐるに拘らず耕地面積は内地では國土の一割五分三厘に過ぎない。

	總面積 千ヘクタール	耕地 千ヘクタール	總面積ニ對スル比率 %
内地	三八、一八七	五、八四九	一五・三
朝鮮	二二、〇七四	四、三五五	一九・七
臺灣	三、五九七	八〇七	二二・四
樺太	二、六〇九	二七	〇・七
計	六六、四六九	一一、〇三八	一六・四

世界諸國の中で耕地の比率の多き獨逸(四三・九%)、英領印度(四六・四%)、ハンガリー(六〇・〇%)、丁抹(六〇・一%)、佛蘭西(四一・二%)、伊太利(四四・二%)等に比すると、露壤の感なきを得ない。而して耕地面積は田に於ては増加しつつあるが、其の増加の割合は極めて

遅緩である。畑地にては少しく減少しつつある。

昭和元年より同六年までの耕地面積を擧ぐれば

昭和元年	總數		昭和元年	平均單位額	
	田	畑		昭和元年	昭和五年
同二年	六、〇二九	三、〇九二	同二年	〇・三二	〇・三八
同三年	六、〇二八	三、一〇三	同三年	〇・三六	〇・三一
同四年	六、〇三五	三、一二一	同四年	〇・三四	〇・三四
同五年	五、八四八	三、一六六	同五年	〇・三四	〇・三四
同六年	五、八六七	三、一七七	同六年	〇・三四	〇・三四
同六年	五、九〇四	三、一八五	同七年	〇・三四	〇・三四

農業家が不斷の努力を續けてゐるに拘らず、其の耕地の増加を見ないのは一面からいへば我國農業の集約の程度が甚だ高いことを示すものといへる。現に米穀のアール當收穫高を見ると

勿論收穫は年によりて豊凶はあるが、集約の程度は甚だ高い。集約の程度の高いことでは世界諸國の中でも一二を除いては最上位にあるのであらう。佐藤農學博士の『日本の農業』によると、水田の反當り生産額は次の通りである。

全 國	東 海	東 北	北 海 道	東 北 區	關 東 區	北 陸	東 山
一、八三三	一、八八四	一、二九〇	一、二九〇	一、八七四	一、五八九	一、八七四	二、〇二二
石	石	石	石	石	石	石	石
二、一三七	一、七九三	一、八五〇	〇、八八一	九 州	中 國	近 畿	東 海
沖 繩							

七 我國の農業は過小農なり

我國の農業の集約の程度の甚だ高いことは一方上に陳べたる地理上の關係から耕地の面積は局限せられて之を増加することは困難であるに拘らず人口の増加と、生活の程度の向上とにより農産物特に米穀に對する需要は年と共に増加するから勢ひ土地の利用を出来る丈集約的にしなければならぬからである。而かも我國の農業家の戸數は多く、其の耕地の面積は甚だ少く、勞働力は

我國の農業は過小農なり

寧ろ過剰であるから勢ひ集約的に利用せざるを得ないのである。このことは農業技術の上からいつて稱すべきことであると同時に其の發展力の少くなつてゐることを語るものといはざるを得ない。

農家戸數 (單位=千戸)

昭和二年	自作		自作兼小作	計
	自	小		
昭和二年	一、七三七	一、四九五	二、三二八	五、五六一
同 三年	一、七四八	一、四八二	二、三三四	五、五七五
同 四年	一、七三七	一、四七八	二、三三九	五、五七五
同 五年	一、七四二	一、四八六	二、三三〇	五、五九九
同 六年	一、七五六	一、四九五	二、三八二	五、六三三

耕作耕地廣狹別戸數は (單位=千戸)

耕作耕地廣狹別	昭和六年	昭和五年	昭和四年
	〇・五〇「ヘクタール」未満	一、九四一	一、九三九
〇・五〇「ヘクタール」以上	一、九三三	一、九一六	一、八九九
〇・九八「ヘクタール」以下	一、二二六	一、二二七	一、二二〇
〇・九八「ヘクタール」以上	三一九	三一六	三一八

耕作耕地廣狹別	昭和六年	昭和五年	昭和四年
	二・九八「ヘクタール」以上	一三〇	一二九
四・九六「ヘクタール」以下	七二	七〇	六九
四・九六「ヘクタール」以上	五、六三三	五、五九九	五、五七五
計			

之によつても、我國の農業は所謂過小農であることを知ることが出来る。農業家は極めて狹隘なる耕地を利用するのであるから、其の勞働力は十分であるから一面に於ては高度の集約的農業が行はるゝ原因となると同時に、農業家は其の勞働力を十分に用ひても尙多くの收支を擧ぐることを得ない原因をなすのである。後にも説くが如く農業家にして封建時代に於けるが如く極めて簡素なる生活を忍ぶことを得るものならば、或は其の經濟生活は寧ろ安易であるかも知れないが、文明の風は都會より次第に吹き來りて、勿論其の生活の程度は都會等とは比較すべくもないが、其れにしても昔時に比べては大なる進歩をなしたのであつて、自然其の生活費用は大に高まつたから、其の經濟生活は年と共に苦しからざるを得ないのである。其の生活の程度が高くなることは已むを得ないとする時は、農業家の収入を多くすることを工夫しなければならぬ。

我國の農
業家は副
業に
より
立つ
て
經濟
を
立
て

農業の集約の程度を高くしても尙十分の収入を得ることが出来ないから主業である農業の傍らに副業を営み以て其の生計を立てなければならぬ、我國の農業家の經濟が副業によつて維持せられつゝあることは我國農業の一特長と稱することが出来る。農業家は其の農業の傍ら餘ある勞働によりて主に工業を営むのである。農業が主業であるには相違ないが、主業は必しも農業家に主なる収入の淵源をなすものとは限らない、換言すれば副業の方が却つて農業家の經濟に重大なる役目を演じつゝあるものがある。今日生絲の生産は農業家の副業とせられてゐるが、之が生産者の經濟には農産物よりは寧ろ主なる關係を有するものであり、經濟上からいへば主客顛倒の觀がある。副業にも種々あつて農業を営みつゝ夜間等の暇を利用してなすものもあり、又其の副業の性質上、かゝる斷續的の時間を利用しては之をなすことが困難なものがある。かかる副業をなすには農業は四時之が生産に當るものではないから冬期等農業をなすこと能はざる時を見て之を行ふものがある我國の工業の中でこの種の所謂農間業から發達したものは少くない、酒釀造、醬油の製造の如きは其の著し

き例である。これ等の工業は初めは副業として起されたものには相違ないが、其の土地の生産條件が他の地方に比し、この種の製造をなすに適するが爲に、其の土地にて生産せられたものが廣く他の地方に販賣せらるゝやうになり、農間業として少量に生産する丈にては到底其の需要に應ずることが出来難いから農業を棄て、専らこの種の生産に當るやうになつたものである。この種の工業は其の土地の水質が優良であるとか、其の附近に其の製品の大需要地があるとか、其の工業の發達を促すべき原因の存するを常とする。又所によりては其の土地が農業には適せざるが故に工業を以て生計を立てなければならぬが、其の附近にては其の工業品を消化することは出来ない、勢ひ相當遠隔なる土地に販賣することが出来るものに力を傾注しなければならぬものもある、遠隔なる土地に販路を求め得るものといへば重量が比較的、軽くして運搬費を要すること少く而かも其の價格が割合に不廉なるものが最も好適である譯である、我國の絹織物の産地が交通甚だ不便にして而かも其の土地礪確であつて農業に適せず且つ其の上に人口が割合に稠密なる土地に多いのは實に之が爲であ

る。兎に角農村は農業の傍ら副業を営まざる所少く、其の副業を営むことによりて経済を維持しつつあるものが多い。其の副業にして優秀であれば其の地方は割合に富裕である。之によつて之を観るも、副業の軽視す可らざることを知ると共に、農業家の経済を良くする途も自らこゝに一を見出し得たといはなければならぬ。

農業家が其の家族と共に耕作し得べき土地の面積は自ら限られてゐるから、若し耕地の面積にして甚だ廣大なる時は農業家は其の家族と共に之を耕すことは出来ない、農業労働者を傭ひて之を耕させなければならぬ、然らざれば他に貸して小作せしめなければならぬ。然るに我國では一町以内の耕地が七割を占め平均面積は九反七畝であるから農業家が其の家族と共に之を耕すものが多い。前に挙げた農家の戸数の統計によつても自作農は全農家の戸数五百六十三萬戸の中で百七十五萬戸あり、自作農の傍ら其の労働に餘力を以て他人の土地を借り受けて小作するもの二百三十八萬戸に及び合計四百十三萬戸であるから總戸数の約七割三分強を占めてゐる割である。即ち我國では自作

自作農並
に自作兼
小作農が
甚だ多し

農竝に自作農の傍らに小作する者が甚だ多いことは其の特質と稱することが出来る。農業は後にも説くが如く自作農が最も理想的の形態であるが、我國で自作農竝に自作農兼小作人が多いのはこの理想の形態に近いものといひ得るのである。従つて、小作人をして自作農たらしむることも比較的容易であるといひ得る。唯、我國の自作農は其の耕地が過小であつて其の家族の労働力を十分に用ひ盡すことが出来ないから、労働力が餘りあるに拘らず、収益も少く従つて其の収入も亦甚だ少い缺點があるのである。

土地の所有の大小と農業の経営の大小とは必しも一致してゐるものではない。所有地の面積が廣大であつても、之を小分して小作せしむることが出来る。これ等小作人は小規模の経営をなすに相違ない、又反對に、所有地の面積が甚だ狭小であつても、隣保地境を接してゐるものが共同して大農業経営を行ひ得ない譯でもない、故に、土地所有の大小と農業経営の大小と必しも一致するものではない。然し、諸國の農業の状態を見ても原則として土地の所有が小分してゐる所には小農業経営が行はれ、土地の所有が大である所には大農業経営が行は

るゝものである。土地利用の技術からいふ時は小農業経営は大農業経営に比較して反當りの收穫は多きものである。小農業経営では農業家は土地利用に細心の注意を拂ひ、熱心に耕作に當るから集約的農業を行ふことが出来、従つて反當り收穫は多きことを得るのである。其の代りに小農業経営では各人の利用し得べき土地の面積は自ら限定せられてゐるから廣大なる面積を利用するには多數の農業家を必要とするは勿論である。反之大農業経営にては假令、農業労働者を備ひて耕作せしむるにしても割合に多くの費用を要するのみならず之が監督等に多くの費用を必要とする、其の代りに家畜を用ひて耕作に當らしめ以て労働に代らしむることが出来、資本金が大であるから農業機械を用ひ用水運搬等の施設をなすことが出来、これによりて生産費を大に輕減することが出来る。要するに、大経営と小経営とは各得失があるが、其の國情等によりて採否を決するより外はない。我國では所有地が小分せられてゐて、耕地所有者戸數は(單位=千戸)

昭和六年

昭和五年

昭和四年

〇・五〇「ヘクタール」未満	二、五三五	二、五二四	二、五〇八
〇・五〇「ヘクタール」以上	一、二七三	一、二五六	一、二四六
〇・九九「ヘクタール」以下	八九九	八九五	八九九
〇・九九「ヘクタール」以上	二二四	二二四	二二二
二・九九「ヘクタール」以下	一一二	一一二	一一三
二・九九「ヘクタール」以上			
四・九九「ヘクタール」以下			
四・九九「ヘクタール」以上			

この統計によるも其の大部分は一町以内の小地主であるから、共同耕作でもするに非ざれば大経営をなすことは困難である。故に北海道の一部を除いては小農業経営が行はれつゝある。我が農業の甚だ集約的であつて反當り收穫が前に掲げた統計の示す如く割合に多いのも、小農業経営の行はれつゝあることに歸因するものといはなければならぬ。我國の農業に於て小農業経営の行はれつゝあることには牛馬を農業に使用することが甚だ少いことにも關係するものといはなければならぬ。家畜の使用が比較的に少いのは牧畜が割合に進んでゐないことにも關係がある。何れの國でも牧畜は農業と結んで發達してゐるのであるが、我國では農業は比較的早く進歩したが、牧畜は進歩しな

我國では
農業と牧
畜とが併
行せず

つた。特に佛教の輸入以來肉食の風が廢つたから、益々牧畜を盛んにする必要もなく、衣服の料としても綿服又は絹織物が多く用ひられたから、衣服の料を得る上からも大に牧畜を奨励することもなかつたので、益々農業のみが發達して牧畜は顧みられなかつたのである。兩毛地方等に於て馬の飼養が盛んであつたのは軍馬の必要から來たことであらう。武門武士の勢力を張つてゐた時代には武士は最も軍馬に注意したのであつて、武勳の半は乘馬の良否に關するものとしたものである。兩毛の地の如き馬の飼養に適する所では馬の飼養に力を用ふるものが多かつたことは想像することが出来る。又東北地方に牧畜の相當盛んなのは同地方が比較的に農業に適しないので放牧の地が割合に多いからに起因するのであらう。東北地方に牧畜が比較的進んでゐるとはいへ、之によりて牧畜を中心とする工業等を興すのでもなければ、其の家畜の品種を大に改良する爲に力を用ふるのでもなく、いはゞ農業に力を用ふることが困難であるから牧畜に力を致すといふに過ぎないやうである。要するに、農業と牧畜とは相結んで發達すべきものであるに拘らず我國では農業のみが牧畜と離れ

て發達したので、従つて牛馬耕の如きは極めて限られた範圍に行はれてゐるものといへる、其の他家畜の使用は極めて少いのである。我國の農業が主として我等人類の労働によりて小經營の方式で行はれてゐるのは牧畜の發達しなかつたことも與つて力あることであらうと信ずる。近年我國にても牧畜に注意するものが俄に多くなつた。我國の生活の様式が西洋化された爲に食物としては牛、豚等を用ふること漸く多く、牛乳を用ふるものが多くなつたからこれ等の飼育が盛んになつた。衣服の料としては羅紗等を用ふるもの漸く多くなつたから、山羊等を飼養するものを生ずるやうになつた、今日の所では洋服の材料としては殆んど全部を輸入に仰ぎつゝあるので、我國の牧畜の如きは數ふるに足らないが或程度まで自給策を講ぜんとする氣運が漸く動きつゝあるのであるから、近い將來に於て農業と牧畜とが泰西諸國に於ける如く結合するに至るかも知れないし、従つて我國の農業の經營にも或程度の變化を來すに至るかも知れない。

自給自足の形態が比較的残存する

我國の農業が小經營で行はれてゐるが爲に自給自足の經濟形態が比較的

く残存しつゝある、生絲、繭等は副業として都會等に販賣するを目的として生産せられつゝあるが、主業である農産物は半は自家の消費に充つるが爲であつて、殘餘のものを販賣しつゝあるに過ぎない。従つて、農産物の販賣の技術的方面の研究については比較的閑却せられつゝあつた観がある。米穀の生産にしても反當收穫を多くすることについては農業家は相當注意して他に優越することを念願とするものは少くない、縣知事等官憲も之を獎勵しつゝあり、之と同時に其の品質を改良することに力を盡しつゝあることは米穀取引所に於ける格付表等を見るも其の一斑を知ることが出来るが、米穀の販賣技術方面の研究に至つては比較的閑却せられてゐたものゝやうである。農業も今日では他の産業の如く生産物を他に販賣するを主なる目的とするに至つた以上は、農産物を相當の價格にて販賣することに留意しなければならぬのは當然である。其れには生産物の販賣技術について最も注意しなければならぬ。米穀の價格が低落すると直ちに政府に對して救済策を講ずることを要求するが、政府が其の請願に耳を藉して其の價格を騰貴するの政策を行ふも、其の政策を行ふ時は

目的物たる米穀は既に商人の手にありて生産者の手にはない、其の政策は仲介者である商人を利益するのみにて眞に生産者が之によりて利益することありとしても極めて僅少に過ぎない。米穀が未だ生産者の手にあつても、生産者は米穀を時機を待つて賣らんとして、他から資金の融通を受くる爲に、政府の救済策より生ずる利益の大半はこれ等の仲介者等の手に歸して生産者が利益すること少いことが多い。近年に至りてこの問題に注意するものが漸く多くなつて來たのみならず、産業組合等によりて共同販賣をなすに至つたし、農業倉庫の利用等も追々多くなつて來て昔日とは大に趣を異にするに至つたのであるが、尙この方面について研究すべき問題は決して少くない。近頃農政學者の中には農業の多角面經營を訓えてゐるものがある。農業の多角面經營といふのは農産物の種類を少くすると其の農産物の價格が高ければ問題はないが、若し農産物の價格が低廉であれば農業家は多くの収入を得ることは出來ないで經濟上困難を感じざるを得ない、故に其の生産する農産物の種類を成るべく多くせよといふことである。農産物の價格の變動より生ずる危険を分散せよといふ

ことである。説者のいふ如く、一方の農産物の価格が下落しても、他方の農産物の価格が騰貴すれば差引農産物価格の下落によりて生ずる危険を大に減ずることには相違ないが、農産物の価格の如きは多くは相聯關してゐるものであるから、其の生産する農産物の価格が一樣に下落したならば、農業家は同じく經濟上困難を見なければならぬ。其の危険を避くる點よりいへば農業家は其の生産するものは自家の家族内で消費して他に賣ることなく、又他の生産するものを購めて消費することなく所謂自給自足の經濟生活を營む曉には生産物の価格の變動より生ずる危険を避くることを得るのであらう。然し、これは農業家にとりて利益であるといふことが出来るであらうか疑はしいのである。生産物の種類を一二種に限らないで多種にすることは異論はないが、販賣技術の研究を怠る時には、矢張生産者の利益を進めることは困難であると信ずる。この方面の研究が比較的閑却せられてゐることは我國の農業の爲に遺憾であると思ふのである。

上來説き來る所によりて、我國農業の現状を概觀すると、次の數項に要約する

ことが出来るのである。

- 一、我國の農業は集約的であり、我國の生産條件に比して反當り收穫は多いのである。
- 二、我國の農業家の中に自作農並に自作小作を兼業としてゐるものが多い。
- 三、農業家の所有耕地も、利用耕地も甚だ小にして一町歩以内のものが大部分を占めてゐるから自作農業にしても其の勞働力に過剰を生ずる、其の勞働力に過剰を生ずることは收穫も少く収入も少いことを意味する。されば
- 四、我國の農業家は副業によりて収入の増加を計らなければならぬ、副業あり其の副業の有利なるものは經濟上餘裕を生ずるけれども、然らざるものは餘裕を生じない。
- 五、我國の農業は主として小經營方法が用ひられてゐる。牧畜が發達しない爲に牛馬耕の行はれてゐる範圍は極めて少い。
- 六、農産物の販賣方面は未だ比較的注意せらるゝこと少い、これが農業家

の經濟生活を悪くする大なる原因をなすものである。

第二篇 農業の生産組織

第一章 現今農業生産組織の基礎

八 十八世紀に於ける農業組織

土地所有權竝に農業經營の自由は歐洲諸國の大部分に於て十九世紀までは法律上多くの制限を受けつゝあつた。農業家は極めて僅少の例外を除いては所有竝に經營の自由を享有してゐなかつた、其の束縛は蓋し古昔農業が起つた時までに遡るのであらう。君主なり諸侯なりが武力によりて其の土地を支配するに至るや、其の土地に對して支配權を把握するは勿論、其の土地の所有權をも有するに至つたのであらう。土地に對する高權の中には土地の所有、利用、處分の權利が含まれてゐたのであらう。これ等の支配者竝に其の配下のものは武術に於ては秀でてゐても、土地を耕耘し農業を營むことは出来るものではなから、其の土地に従前より土着してゐたものを奴隸として土地を耕作せしめ

十八世紀
に於ける
農業組織

て其の收穫を擧げて其の手に收めたのである。地方によりては自由農業家がゐた所もあるが、これ等のものも豪族等の保護を受けなければならぬから、其の所有地を豪族に獻納して自ら進んで其の奴隸となり、身體及び財産の安全を計つたのであつた。

支配者と農業家との關係は國により地方により必しも一樣ではない。學者の研究によると、領主制度(Grundherrschaft)と地主制度(Güterherrschaft)との別があつて其の下にある農民の自由が束縛せらるゝ程度を異にしてゐる。即ち領主なり地主なりが其の支配する土地の區域内に居住する農民に對し司法及び警察權を有し農民から種々の名義により賦役及び貢租を徵收する權能を有してゐたことは兩制度とも異なる所はないが、領主制度の行はれてゐる所では、領主は政治上、軍事上其の土地を支配する立場にゐるのであるから、土地の利用は原則として其の土地にゐる農民に任せて顧みない、唯政治上、軍事上必要なる程度に於て賦役及び貢租を徵收したに過ぎない、従つて貢租にした所が領主並に其の配下のものが消費生活其の生活は農民の生活とは甚しい差異があるにもせよ)

領主制度
と地主制度

を營むに必要なものを徵收したものである。いはゞ、領主並に其の配下のものが政治上、軍事上其の地域にある農民を保護する代りに其の地域にある農民は擧げて領主並に其の配下のものを經濟上後顧の憂なからしめたものであつた。反之、地主制度の行はれてゐた所では、地主は其の地域内の土地に對して政治上、軍事上支配する權利があると同時に、其の土地を所有し之を利用處分する權利を有してゐたもので、地主並に其の配下のものが農業の企業の局にあたり、其の計畫意圖に従ひ農民をして經營に當らしめ、其の收穫は地主並に配下のものが其の手に收め自由に分配したのである。領主制度の行はれた地方では、領主又は其の配下が自ら土地を耕作し又は耕作せしめたことは稀であつて、普通は土地の經營等は農民に一任してあつたから、自然農民は比較的多くの自由を享受することを得たのみならず、賦役、貢租も比較的輕微であつた。反之、地主制度の行はれた所では、地主並に其の配下のものが自ら土地の利用に當る立場にあつたから、其下にある農民に對し土地利用の方法等に至るまで容喙干涉し以て成るべく多くの收穫を擧げんとしたのであるから、農民は領主制度の行はる

る地方に於けるが如く自由を享受することが出来なかつた。其の經濟上の位置も従つて劣つてゐた。領主制度は中世封建制度の遺物とも稱すべく、地主制度は封建制度から一轉して資本主義の一表現となつたものといへる。

農民の義務束縛の程度は領主制度、地主制度の相違によりて差異あるのみならず、同じ領主制度の行はる所でも、其の地方の法律慣習により大に差異があつた。或地方では農民は事實上土地の所有権を有し、唯若干の制限を受くるに止るものがあつた。反之、或地方では農民は辛うじて土地を利用する権利を許されてゐるに過ぎないものがある。甚しきは或地方では農民は單に耕作するのみであつて何時にても其の土地を取り上げられ他の者に引渡されるゝものがあつて決して一律ではなかつたのである。然し、歐洲の多くの地方では農民は人格の自由を有すると共に其の土地を子孫に相續せしむることが出来たのであつて、唯其の土地に隸屬し其の領主又は地主に隸屬してゐたものであつた。土地に隸屬してゐたといふのは農民は假令其の利用してゐた土地を子孫に相續せしむることを得たものでも、領主又は地主が改まる時は新領主又は新地主に對

し前領主又は前地主に對すると同様の服従の義務を負はなければならぬといふことである。土地が主であつて、之を耕耘する農民は恰も其の附屬物に過ぎないといふ意味である。領主又は地主に隸屬してゐたといふことは農民は幼少の時は領主の爲に下男又は下婢として事へなければならぬし、長ずれば賦役につき貢租を出さなければならぬといふ意味である。賦役は畢竟領主の土地經營に對して一定の勞務に服して以て其の經營を助け、若くは領主の命に由り道路の修築、河川の浚渫等公共の勞務に服することである。賦役は農民にとりては可成り重い負擔である。この負擔は年に何日といふ如く一定の時日繰返し命ぜらるゝものである。賦役に二種あつて馬賦役と人足賦役とである。馬賦役は農民が一定數の馬を飼ひ置いて命に應じて一定の時日勞役に服せしめなければならぬことをいひ、人足賦役では農民が自ら勞役に服することである。賦役の日數は地方によりては法律慣習によりて一定して動かぬが、地方によりては領主が隨意に之を決定するのであつて農民は之に背くことが出来ない。農繁時に當つて領主の爲に勞務に服しなければならぬことは大なる

負擔であるといはなければならぬ。貢租は所によりては地代に類する私法的契約のものもあるが、多くは領主又は地主の権力の發動に基く租税の如き性質のものであつた。貢租は貨幣なることあり穀物、布帛等なることあり、其の額も必しも一定はしないが、收穫の十分の一を收むるを普通とする。農民のこれ等の義務に對して領主又は地主も亦義務を負擔するのである。即ち其の義務は農民の身體、財産の保護を内容とする政治上並に軍事上の勤務であつた。領主又は地主は概ね城廓を構えてゐたものである。其の城廓といつた所で後世に於ける如く堅牢のものではなく城壁を以て圍まれ其の周圍に溝渠を穿ちたるに過ぎないのであつたが、當時の戰術を以てしては、外敵の侵入を防禦するには足つたものである。従つて其の城廓の周圍に居住する人民の爲には一朝外敵が侵入するに際しては其の財産を携えて城壁内に難を避くることが許されてゐたし、人民の間に主に財産に關し争を生ずることがあれば領主又は地主に訴えて曲直を明にすることになつてゐた。其の他保安の行政を行はなければならなかつた。封建制度が崩壊し政治上、軍事上の勤務は國家官憲の手に移つた後も

尙地方の裁判並に行政は依然として領主又は地主の手に存してゐた所もあつたのみならず、其の支配の下にある農民にして貧窮又は不作等の爲に困難を感じたるものには特に救恤し、其の住宅の建築の材料は之を給與してゐたのであつた。故に農民は其の位置こそ低く、其の自由は少からず束縛せられてゐたといへ、生活にはさしたる困難を見ることなかつたものといへる。

領主又は地主の土地は貴族の間では移轉することはあるが、都市に在る市民は地方の土地を所有することは許されてゐなかつたから、假令、地方の豪族が種種の原因から都會にある富有市民から金錢等の融通を仰いたことがあるといへ、これ等豪族の手から土地を剝奪する等地方の豪族を迫害することも得なかつたし、其の配下にある農民を迫害することも得なかつたのであつた。而のみならず、農民が土地を耕耘するにしても或者は豊沃の土地のみ耕耘し、或者は磽确なる土地のみを耕耘する時には收穫に甚しい差異を生じて農民の間に經濟上の不平等を來す虞があるから領主等は土地を豊沃の程度により若干の筆別に區劃し農民をして成るべく平等に土地を利用することを得せしめたのみ

ならず、其の牧場等は配下の農民に開放して家畜を放牧せしむると共に森林等の下草は自由に刈取ることを得せしめ以て出来る丈經濟生活の平等を保持することを得せしめたものであつた。

農民解放

以上は十八世紀以前歐洲諸國に於ける農民の位置竝に生活の極めて粗雑なる描寫であるが、土地の所有權竝に農民の自由を束縛する制度は十八世紀の末に至つて大なる變革を見るに至つたのである。農民の解放即ち是れである。この變革が起らざるを得なかつたことは其の由來する所決して少くはないが、其の中最も主なるものを擧げると次の如くである。

農民解放の原因

土地の合理的利用の必要

一、土地の使用處分が自由でなければ農業の技術が大に進歩したとはいへ、農民は土地の利用を合理的になし以て其の収益を大に増加することは出来ない。農民が集約的農法を行ふには土地の改良を行はねばならず其の他相當の資金を必要とするのであるが、農民は原則として其の餘財がないから、土地を擔保として他から融通を受けるか、土地の一部分を割讓して以て資金を得なければならぬ、其れには農民に土地を處分する權利を與へなければならぬ、其の

上農民は前に陳ぶる如く領主又は地主の爲に賦役に徴收せらるゝのであるが、其の賦役が稍重ければ其の自ら耕耘する土地に力を注ぐことが出来ない、其の結果は多くの收穫を擧げることが出来ない、其の賦役も農閑の時なら兎も角、多くは農繁の時に行はるゝのである、特に地主制度の行はれる所では地主の土地を耕作するが爲に徴收せらるゝのである。農業は生産として一日一刻を争はねばならないから、其の必要なる時に際し賦役として徴發せらるゝことは甚しい苦痛といはざるを得ない。貢租にした所が初めは左まで重くなかつたから忍ぶことが出来たが、領主又は地主の財政が文明の進むに伴ひ膨脹せざるを得ないから、自然貢租の負擔も亦重からざるを得ない、農民の苦痛は言語に絶するものがある。要するに、土地利用の見地よりして土地の束縛制度を打破せんとするものが益々多くなつて來たのである。

二、從來領主又は地主が農民に對し多大の權能を有してゐたのは軍事竝に行政の大任を負擔し、農民の身體財産を保護してゐたからであつた。然るに、封建制度の崩壊と共に國家が自ら其の任務を負擔するやうになつたから、其の點

農民負擔の軽減の必要

自由思想
の勃興

からいへば領主又は地主は存在の理由を失つたものといへる。然るに領主又は地主は嚴然として農民を虐使しつゝあるのである。而かも國家の權力が増大するに伴ひ此等の農民に對し租税並に兵役の義務を強要するに至つたから、農民からいへば其の上に領主地主に對し賦役貢租の義務を負擔することは假令其の負擔が従前に比較して輕減せられたとしても堪へ得る所ではない、領主地主の束縛より脱出することを希望するは蓋し當然といはなければならぬ。

三、自由民權の思想は十八世紀に入りてから勃然として起り同世紀の末葉に至つては燎原の火の如く社會全般に普及するに至つた。舊物打破の聲は到る所に擧げられた、情弊を一掃して理性に歸れ、の叫は有ゆる階級の間に擧げられた。不合理極まる農民の束縛の解放が叫ばれるに至つたことは想像し得る所である。農民も貴族も對等の位置に立たなければならぬものである。從來は其の微力の爲に貴族より夥多の束縛を受けざるを得なかつたのであるからこれ等の因襲を打破して束縛より自由にならなければならぬと考ふるやうになつたのである。この思潮に乗じて政治家等にして農民解放の運動を起した

農民の解放
と農業
組織の
後

ものが少くはなかつたのである。

九 農民解放と解放後の農業組織

農民解放は經濟上から觀察する時は單に土地の負擔を解除したに過ぎないやうであるが、農民解放はかゝる輕微なる問題ではない、土地所有階級の國法上の位置を根柢より覆したことになる、其の結果従來自由を享有すること能はざりし農民が其の自由を恢復したに止らず國民が國民としての完全なる自由を獲得し、舊階級組織を打破し舊階級的不平等を拋棄したことになる。この國法上の大變革によりて初めて現代の文明が光輝を揚ぐることを得たのであり、社會各般の活動が生じたものである。この意味に於て農民解放は近世に於ける最も注目すべき大事件であるといへる。

土地並に農民の解放はフヒリポヴィチの説く所に由れば、畢竟次の數項を内容とするものであるといへる。

- 1、隸屬關係を初め領主並に地主の權力に基く一切の束縛制度を廢し農民をして完全なる人格の自由を得せしめたこと。

農民解放
の内容

- 2、農民をして従来許されなかつた土地所有権を完全に獲得せしめたこと。従つて古から行はれた領主地主の高權、永借、永小作關係は農民の所有權の獲得と共に一切廢止せらるゝに至つたこと。
 - 3、土地の利用竝に經營に障害をなしつゝあつた賦役、貢租は廢せらるゝに至つたこと。
 - 4、土地の開拓等に妨害をなし易き共有地は之を分割して農民の私有となすに至つたこと。
 - 5、各人の所有地の交錯、散在するものを整理し所有地を成るべく一ヶ所に集中せしめ以て其の利用に便利ならしむること。
- 等である。

農民解放を最も早く斷行した國は佛國であつて、同國では自由民權の思想は夙に起つてゐたから、一七八九年佛國革命政府が成立するや、一舉に封建制度を廢止すると同時に農民をして従來の封建的拘束から解放することを命じたのである。然し其のことは事實上容易に行はれなかつたが、那翁法典に於て公民

權の不平等は一切之を認めず、地役權及び地代の外は土地所有權に關する一切の制限は凡て之を認めざることを明にするに及び初めて事實上の農民解放を實現することが出來たのである。那翁の治下にありし伊太利、瑞西、西班牙、獨逸の一部にては佛國の影響により急速に農民解放を斷行することが出來た。其餘の國にては政治家等の熱心なる運動ありしに拘らず、農民解放の偉業は容易に功を奏すること能はず、一八四八年の革命により初めて其の目的を達することが出來たといふことである。

農民の人格竝に所有權の確認は土地の生産力を増加し收穫を増加せしめたこと著しかつた。蓋し農民は従前と異り、其の家族と共に力を盡して耕耘に努める時は收穫を増加することを得るのみならず、これ等の收穫は擧げて之を其の手に收めることが出來るのであるから、農民も其の家族も力を盡して耕耘に努むるに至つたのである。この點は農民にとりても經濟社會全般にとりても大に慶ぶべきことである。然し、一面には農民が従前よりは多くの危険を負擔するに至つたことは忘れてはならない。農民の經濟が障害なく行はるゝ間

の農民解放の經濟上の効果

農民の地位の却つた不安となつた

は勿論問題はないが、不作等によりて収入が著しく減少するか、若くは病氣其の他の原因によりて不時の支出がある時は經濟上困難を見なければならなくなつたのである。従前の如く束縛制度が行はれてゐた間は農民は經濟上法律上獨立をすることは出来なかつたから其の點については不利益であるが、其の代り不作を初め經濟上困難な場合には領主又は地主が之を憐み相當救恤をしたものである。従つて、經濟生活の安定は其の時代に於ては却つて之を望むことが出来たのである。然るに、農民解放により農民の法律上の位置は勿論比較の出来ない程進み、經濟上に於ては完全に獨立するに至つたのではあるが、上に陳ぶる如く、不作等の原因により經濟上困難を見た場合には、何人からも救恤を得る途はないのであるから、其の苦境から脱出するには他より負債をなさざるを得ないのである。農民は原則として負債の擔保としては其の所有する土地を抵當とするより外に殆んど途がないのである。農民の負債は勢ひ其の位置を破壊する原因をなすものであるといへる。農業の金融機關が發達して比較的、低利で負債を起すことが出来れば之を返済することも比較的容易であり、又農

民の自助の精神によりて生じたる産業組合(信用組合)を利用して負債を起すことが出来れば、少くとも或程度までは其の破綻を免るゝことが出来るのであるが、然らざる場合には農民は已むを得ず相當高率なる利子によりて負債を起さなければならぬ、而して農業は今日の状態からいへば、決して利廻のよき生産でないから、之を償却することは中々容易のことではない、其の結果は土地を失はざるを得なくなる。こゝに於て従來土地を所有して相當の經濟生活を営みつゝあつた者も土地を失ひ他人に雇はれて労働により生活しなければならぬいやうになる、所謂農業労働者である、然らざれば、他人の土地を小作して其の生計を立てなければならぬ小作人階級である。十八世紀に於ける農民は労働者といふか奴僕といふか法律上の位置は憐むべきものであるが、經濟生活の基礎として不完全ながらも土地を利用する権利を有してゐたのである。然るに、農民解放後生じた農業労働者なり小作人なりは或意味に於ては昔時の農民よりは位置は不安固であるといはざるを得ないのである。農業労働者の収入は雇傭主との契約によりて定るのであるが、多くの場合其の収入所得は甚だ僅少

であるから、其の經濟生活は勢ひ甚だ貧弱ならざるを得ない、小作人は之に反して地主から雇傭契約により賃銀を得るのではなく、反對に契約に基き小作料を支拂ひて土地を耕作するのであるが、其の收穫の良否より生ずる損益は自ら負擔しなければならぬものであるから、若し不作等の爲に收穫が少くあつたならば、自ら其の危険を負擔しなければならぬ、其の危険の程度は決して少いとはいへない。而して土地を所有せざる農業労働者の著しく増加した所は領主制度の行はれた所よりも地主制度の行はれた所に多かつたといふことである。

農民解放は一面に於ては土地兼併の結果を生じた。農民の一部が土地を失ひ農業労働者となり小作人となつたことはいふまでもなく土地を所有するものゝ中に其の附近の土地を併有するものを生じたか、若くは、其の地方に土地を所有しなかつたものが抵當として取つた土地を所有するに至つた者を生じたことである。農民解放當時に於ては原則として従來利用してゐた土地を所有し之を十分に利用するに至つたものであるから其の所有地積は甚しく廣狹の差がなく農民が其の家族と共に利用する程度に過ぎなかつたのであるが、こゝ

土地兼併

に其の利用する程度を超えて廣大なる土地を所有するものを生ずるに至つたことを意味する。勿論農民が解放せられたといつても、貴族の領有する土地は廣大であつたから、必しも土地所有の平等が出現せられたのではなかつたが、農民解放以來土地の兼併が激しく行はるゝに至つたといへる。このことは經濟社會にとりて決して慶ぶべきことではない、古來何れの國にて土地兼併を防止するが爲に種々方策を講じたことによつても之を窺ひ知ることが出来る。更に都會にある富有者が抵當として收めた土地を所有するに至つたことも新しき現象として注目すべきことである。前にも陳べる如く従前は土地は地方の貴族(豪族)の間では讓渡輾轉することを許されてゐたのであつたが、都會にある商工業者階級の所有に移ることは許されてゐなかつた。然るに、土地が貴族の手から離れて農民の手に移つたものは動もすれば都會に於ける商人階級の手に歸屬するに至つた。商人階級は勿論都會を去つて農村に移住することは出来なから、其の土地は之を小作せしむるか若くは人を傭ひて管理せしめ農業労働者をして耕耘せしむるより外に途がない所謂不在地主である。不在地主

不在地主
の出顯

は農業や農村についてはさまざま利害を感ぜざるものである。不在地主の發生は經濟社會全體からいつて決して慶ぶべきことではない。但し、土地が漸次經濟力の強きものゝ手に兼併せらるゝことは兼併せらるゝものからいへば悲しむべきことではあるが兼併するものからいへば利益あることに相違ない、少くとも利益ありと思つたからに相違ない。換言すれば、農民全體が不利益を被るのではあるまいが、唯經濟社會全體から觀て樂觀し難いといふのである。

然るに、こゝに農民全體にとりて其の休戚に關係ある問題がある。即ち農産物の價格の問題である。農民解放前は農民にとりて農産物の價格の高低は其の經濟に關係があつたに相違ないが、其の關係は比較的輕微であつた。地主制度の行はるゝ所では收穫は凡て地主並に其の配下の手に收められ其の一部分は其の消費に充てられ殘餘は都會に出して賣却せられたので、其の際農産物の價格が高ければ地主並に其の配下の収入を多からしめ、其の價格が低ければ地主等の収入を少からしむるのであるが、農民の經濟には直接關係はないといつても宜しい。領主制度の行はれてゐる所では、農民は其の收穫の一部を都會に

出して賣らなければならぬから、勿論其の價格の高低は其の經濟に影響するに相違ないが、其の影響の程度は今日に比して寧ろ輕微であつた。當時は交通の便が開けなかつたから、穀物の如き重量大にして價格の比較的低廉なるもの移動し得る範圍は局限せられてゐた。シュモラーの研究によれば、東部獨逸にては十八世紀頃までは穀物は遠隔の地に輸送せらるゝことが殆んどなかつたから、四五十哩を距れば、一方では豊作の爲に農産物の價格が下落してゐるに拘らず、一方では不作の爲に穀物の價格の高値なるに苦まなければならなかつたといふことである。かゝることは寧ろ極端の事例を挙げたことであるのだらうが、兎に角穀物の如きは水路等の交通の便のない所では遠隔の所に運搬せらるゝことはなかつたから、遠隔の地方の穀物の競争を受けて穀物の價格を上下し之によりて其の地方の農民の經濟に影響を及ぼすことは少かつたらしい。換言すれば、農民は實に自然にのみ注意すれば宜かつたので、遠隔の地方の收穫等にさまざま關心するには當らなかつたのであらう。特に前に一言した如く農民が經濟上困難を感ずる時は領主又は地主が之を救恤したといふことで

ある。この點からいへば、農民は穀物の價格について痛痒を感じる程度が比較的輕微であつたといひ得る。然るに、農民解放後は兎に角農民自身が企業家として損益を負擔しなければならなくなつた。収入が多ければ、利益する代りに、収入が少ければ、損失を負擔しなければならなくなつた。穀物等の價格の高低が直接に其の經濟に影響を及ぼすに至つたのである。貨幣經濟が發達するに従ひ其の影響は益々顯著ならざるを得なかつた。加之、交通の便が漸次開け貨物移動の範圍が益々擴大するに伴ひ農民は其の居村のことのみに注意する丈ではなく、可成遠隔の地方の經濟事情についても注意しなければならなくなつた。これ等のことは農民解放と直接の關係はないにもせよ、農民が昔時とは異り企業家として損益を負擔するに至つたから、貨幣經濟の發達、交通機關の發達に伴ふ市場の擴大の影響を受けなければならぬやうになつたのである。農民にとりて利害相半するといはなければならぬ。

農民解放と共に共有地等が廢せられて私有地に編入せられたことは農業の技術の上からは進歩であるには相違ないが、農民の經濟からいへば、餘裕がなく

なりたるに均しく、農民の經濟を窮迫せしめた一原因をなすものといはなければならぬ。現に、露國の如き共有地の存在してゐる所では、農民は之を利用することに由りて少くとも生活には困難を感じないことを得るが、これ等の共有地等のなき國にては所有地を失ふ時は直ちに困難を見なければならぬこと、に由るも、共有地等の消滅は農民の經濟に少なからぬ影響のあることを推察することが出来る。

要之、農民の解放は勿論農民の人格を向上せしめ農業の技術を發達せしめ收穫を大に増加せしめた効果はあつたが、其の裏面には夥多の暗影の生じたことを忘れてはならない。農業政策は畢竟農業家の經濟にとりて利益であることを助長すると同時に其の不利益とする點を究明し之が救済の途を講ずるものでなければならぬ。

一〇 我國の農業組織

我國上古に於ける社會組織は氏族制度を根幹としたものであつたから、農業は既に或程度まで發達し主要なる生産をなしたる故に、其の基礎である土地は

氏族の領有する所であつた。氏族とは共同の祖先を有し又は有すと信ずる戸即ち家を包含する團體をいふのである。氏族を構成する戸には家長の統帥の下に直系の血族並に傍系の血族のものまで家族として集團をなしつゝあり、氏族は氏。上。氏。人。部。民。より成り、其の外に「やつこ」と稱する不自由民までを隷屬せしめて其の領有する土地を利用し生活の資となしつゝあつた。土地の耕作に當つたのは主に不自由民であつたらしい、従つて其の觀點から竹越氏の『日本經濟史』には「奴隸經濟」と稱してゐる。所で天皇皇族は有ゆる國土を初より領有し給ひしにはあらずして大化の改新までは直接には氏族の一として其の御領地並に其の地に居住する人民を領有支配し給ひ之と同時に氏族の中心として有ゆる氏族の上に立ち其の氏族の長を通じて國土人民を統治せられたに過ぎなかつたのである。従つて、國家の必要により氏族に屬する土地人民を徵發使役せんとする時はその氏の上に命令を下し又其の氏族にして罪ある時は贖罪の料として人民並に土地を朝廷に奉らしめたのであつた。氏族の中には大氏小氏の別があつて大氏は數十戸乃至數百戸より成り格式も高く其の司る職も亦

奴隸經濟

尊くあつた。反之、小氏は數戸より成り其の位置も亦低くあつた。

氏族と官職とは離る可らざるものであつて、大小の官は自ら或氏に屬し世々繼承してゐたものであつた。即ち氏族は貴族であり其の下に品部よへべ部曲べきやくの如き半自由民が屬し更に其の下に「やつこ」といふ不自由民が隷屬してゐたのであつた。皇室に屬した部を品部といひ、其の他の豪族に屬した部を部曲といつたのであつて、世襲的に同一の産業又は他の活動に従事したのである。土地は氏族の所有に屬し氏族内の戸は之を利用してゐたのであつたが稍後になると氏上の權力が擴大して土地は氏上の所有となり戸數は單に之を利用する生産機關に過ぎざるものとなつたやうである。

土地は皇室の御料地と他の氏族の私有地即ち田いり莊ぢやうと及び社寺の領地に分けることが出来る。皇室の御料地は皇族が最大最重の氏族として領有せられた土地のことで全國に亘り相當の面積に及んでゐたことであらう、其の面積については據るべき文獻がないから、詳知することは出来ない。但し、御料地には御縣、屯田、御名代、御子代の三種があつた。

御料地、
田莊と社
寺領

御縣

御縣は最も古くより天皇に直屬の御料地である、こゝには役人を置きて管理せしめ、こゝより出づる收穫は皇室の私經濟に用ひられたものである。皇室の勢力が伸長するに伴ひ其の數も増加し恰も皇室の直轄の領地の觀があつた。

屯田

屯田は御田に同じく、田部なる耕作民が屯集して耕作した田であつて、其の收穫は皇室に歸し私經濟等の用に充てられたものである。蓋し初めは、皇室の御費用も多くなかつたから御縣よりの收益で之を支辨することが出来たのであつたが、皇室の御費用が次第に増加するに従ひ屯田を起し以て之を支辨しなければならなかつたのであらう。故に、歴代の天皇は屯田の増加に努められたのである。

御名代

御名代は天皇皇后及び皇子の御名を永遠に傳えんが爲に、一定の土地に御名を附して特別の取扱にしたものである。御子代は皇子なくして其の名の消失することを憂へて設けられたものである。これ等の土地より出づる收穫は皇室の所有に屬したものであるが、其の經濟價値は前二者に比し甚だ少いものである。

御子代

氏族の田莊

氏族の田莊 天皇以外の氏族の氏上の私有地である。氏上は氏人を酷使して開墾を行ひ、かくして得たる土地は之を其の私有地としたのに初るが、後になると、氏族全體の所有にかゝる土地も之を併せて其の私有地となしたのであるから、皇室の御料地以外の土地は大約、大小氏上の私有地となり、自然、氏上は之に對して支配權を有するやうになつたから、皇室の支配權は爲に縮少せざるを得なかつたのである。後世に於ける莊園制度は之に發生したのである。

社寺領

社寺の領地 元來我國の社會組織として神社等は獨立の存在を有するものでなかつたのであるが、崇神天皇の朝から神社は獨立の存在を有するやうになり、其の結果直屬の領地を有するやうになつた。佛教傳來以來寺院が同じく直屬の領地を有するに至つた。而かも盛んに開墾をなして社寺領を擴大すると同時に之に寄進するものも少くなかつたから、其の領地は次第に擴大し後には一大經濟力の把持者となるに至つたのである。

氏族制も人口の増加に伴ひ同一祖宗のものが集團生活を營むことが困難となつたから次第に崩壊するに至りたるに加えて、我國土の大半は氏上の私有地

大化改新
と土地制

となり皇室の支配力は爲に大に阻害せらるゝに至つたから遂に大化の改新を見るに至つた。大化改新は(一)昔より天皇等の立つる所の子代の民、處々の屯倉及び臣、連、伴造、國造、村首の有する所の部曲之民、處々の田莊を罷め(二)京師を脩め畿内の國司、郡司、關塞、斥候、防人、驛馬、傳馬を置き鈴契を造り山河を定め(三)初めて戸籍計帳班田收受の法を造り(四)舊の賦役を罷めて田の調を行ふたことである。一言にしていへば氏族の専恣を抑え中央集權の實を擧げんとせられたことである。大化二年全國の土地人民の私有を禁じ御名代、御子代部竝に品部及び屯倉の制を廢止諸氏の私有せし部曲及び其の土地を廢止し大夫以上のものには食封を賜はつた。食封とは戸數を定めて之より納むる庸調の全部若くは其の一部分を與ふるのである。支配權を與ふるのではないのである。之と同時に部曲に屬する人民を解放して良民となしたのであるが、このことは皇室の御料地では比較的容易に行はれたのであるが、其の他のものについては容易に行ふことは出来なかつた。従つて奴隸經濟は依然として行はれたのである。而して特に注意すべきは班田收授制を實施したことである。

班田收授

班田收授とは前に陳べた如く土地は凡て私有を認めず皇室の有となつたのであるが、人生れて六歳になれば、一定面積の口分田を班給せられるのである。其の制度の精神からいへば六年毎に班給した田地は一旦公收し、更に其の時に於ける人口に應じ前と同じく班給し以て土地の兼併の弊なからしむるを期したのであるが、事實之を實施するに及びて一旦班給した田地を公收することは困難であつたから、既に給したものは死するまで之を利用收益するを許し、只外蕃に没落して歸還せず他郷に逃亡して一定の期間歸還しないものは之を公收し其の他流罪に處せられたもの出家したものは之を公收したに過ぎないし、六歳になり口分田を受くべき條件を備へたるものに對してのみ之を班給したに過ぎなかつた。後には班年を延長するに至つた。而のみならず、凡ての田地を口分田とすることは出来なかつた、夥多の例外を認めざるを得なかつた。例へば、開墾地の如きはこの法律の適用を免れ、宅地、園地は私有地としてこの法律適用の外にあつた。故に、この制度は氏上が土地を私有することを禁ずると共に、其の兼併を防止するのみならず、土地及び農民を解放して熱心に耕耘に従事せ

しめたる効果は没することを得ないが其の法律の理想とした土地私有を根絶せしむることは出来なかつた。それも朝廷の威信行はれ地方の官吏朝廷の御趣旨を奉戴し、之を勵行したならば、相當の効果を收めることが出来たかも知れないが、朝廷の威信が次第に行はれなくなるや、莊園制度への歩武を進めることにならざるを得なかつたのである。

班田收授制時代は其の理想として見るべきものがあつたとはいへ、極めて短期間丈しか繼續することは出来なかつた。平安朝の中期よりは莊園經濟となり以て鎌倉幕府時代にまで繼續したのである。

莊園經濟とは地方の豪族が大土地を領有し、其の土地に對し事實上支配をしたのみならず、其の土地より出づる収益を領有したことをいふのであつて、前時代の理想とは全く反對の結果を生じたものである。抑も、莊園とは讀んで字の如く別莊のことである。初め都會にある貴族は地方に若干の別莊を有し、其の地の收穫を收めて自家の經濟の助としてゐた。班田收授制の趣旨からいへば之を許すべき理はないのであるが、貴族の勢力が強い爲にこれ等の別莊地(莊園)

は除外例として貴族の私有地と認められ、貴族は其の地に對して収益したのみならず、其の土地に對して行政權を有してゐて、政府も之に對しては指を染めることは出来なかつた。これ等都會に於ける貴族の中で最も勢力のあつたものは藤原氏一門であつた。藤原氏天智天皇を幫けて土地私有を阻止せんとしたに拘らず、其の子孫は反對に大土地を私有し、顧みなかつたのである。これ等貴族の莊園以外の土地は政府の有であるから、政府は國司、郡司を派して之を管理せしめたのである。これ等の官吏は概ね京師の貴族の中から任せられ、四年交代を原則としたのである。然るに、中央政權が稍弛緩するや、これ等地方官は任期が満ちても歸らず、其の地方に永住して其の地方を領有し、其の勢力を振ふに至つたのである。地方の豪族であり、其の土地も亦莊園である。其の莊園の土地は概ね莊民によつて利用せられたものである。莊民は良民であつて、其の土地を小作してゐたのである。されば、莊園は莊園の領主、莊園内の事務を司る莊司、莊土を耕作する莊民より成るものであつて、莊民は土地を所有しないが、其の土地を利用することを得るのみならず、其の土地を奪はるゝこともなく、之を子孫に

宛行
宛作
手作

相續せしむることも出来たのである。莊民に土地を利用せしむることを宛行^〇又は宛作^〇といひ其の認許状を充文^〇といった。其の耕作權を^〇作手^〇といふのである。但し、莊民は土地を離去することは許されないので、領主竝に其の下にある莊司の支配權に服従せざるを得なかつたのである。

莊園制度は封建制度の先驅をなしたもので京師の公家の配下であり莊園を支配した武門武士が次第に勢力を得るに従ひ、武力と富力とにより京師に於ても武士階級が事實上、政治上に於ても勢力を揮ふに至つた。特に武士階級の中でも源平兩氏が最も勢力があつたから其の他の武士階級は源平何れかに屬して覇を争ふやうになつた。従つて地方に於ける莊園の領主、莊司等の多くも同じく源平何れかに屬して其の勢力を維持せんとするに至つたのである。源賴朝が覇を鎌倉に開きしより其の家子郎黨を以て莊園の領主又は莊司となし又は之に對抗して地頭等に任じたのであるが、莊園と同じくこれ等の支配階級は武力により其の支配の下にある土地と人民とに對し絶大の支配權を有すると共に經濟上に於ては殆んど獨立主體をなすに至つたのである。されば、平和無

封建制度
と土地制度

徳川氏時

事の日はこれ等の武士は其の家子郎黨と共に其の支配の下にある土地及び人民を統御して耕作等に從事せしむると共に其の身體、財産を保護しつゝあつたし、一朝事ある時は其の屬する上級の武士階級の爲に戰爭に當つたのであつた。封建制度即ち是れである。封建制度が起るに及びて、地方分權の實が熟したのであるから、容易に之を倒して中央集權となすことは出来ない。勢力の基礎であり經濟力の淵源である土地の所有權は事實地頭等の手にあり、而かも其の土地は相當廣大であるから、其の勢力、經濟力は相當強大であつた故に、これ等の豪族を根柢から倒すに非ざる限りは封建制度を打倒することは出来ない。されば後醍醐天皇が大化の古へに復さんと努め給ひしが、地方の豪族の力を藉るに非ざれば北條氏を倒すことも出来なかつたし、従つてこれ等豪族の擁立する足利氏の爲に苦められざるを得なかつたのである。鴻業も遂に成ることが出来なかつたのである。地頭等支配階級が表面土地を所有するが如くであるが、土地を耕耘するものは農民であるから後に至つては事實上農民の所有に屬してゐたものゝ如く土地の賣買質入等も行はれてゐたやうである。徳川氏が幕府

を開くに及び集権的封建制度は鞏固なる基礎が据えられ徳川家を中心とする武士階級の支配が行はれた。徳川家は兵馬の権を掌握して諸侯に臨むと同時に天領の領主である。天領は將軍家の直轄地であつて、全國に普く全國の四分の一にも及んだといふことである。而して要害の地には御三家並に譜代大名をして支配せしめ、其の間に介在せる外様大名の領地と巧に犬牙交錯せしめ以て非違を懐くことなからしめたものである。其の外に皇室御料地、社寺領地があるが、全體としては極めて僅少であつた。故に事實上に於ては武士階級が支配権を掌握してゐたといへる。然し、武士階級が行政権を掌握してゐたとはいへ、昔時の如く土地を所有してゐたのではなく、租税の形式により農民より出す收穫の一部分を所謂石高によりて配分を受け以て經濟を立てゝゐたものである。従つて、土地の所有は事實農民に歸してゐたものゝやうである。但し、農民は土地を所有するとはいひ、條被支配階級であるから土地の處分等については大に制限を受け今日の所有權とは實質上大に差異のあつたことは争ふ可らざることであつた。土地は封建制度の基礎であり農を以て國本としてゐたから、

土地の賣買等を自由にする時は一方には兼併の弊を生じ土地の利用は十分に行はれず従て諸侯等の財政にも重大なる影響を及ぼすことになるから田地の永代賣買を禁ずるは勿論田地質入についても制限を設け流地となすことを許さなかつた。其の外農業家が田地を自由に子孫に分配することを許す時は各農業家の所有地は極端に狭小となり如何に之を利用するも到底一家を支ふることが困難となるから之を防止するが爲に、分地を制限し其の他長子相續を認めて土地の處分を自由ならしめなかつたのである。この點については次の章で稍詳細に論及するであらうからこゝには之を省略する。既に農業家の利用収益する土地は制限を受け、而かも、租税として所謂五公五民の割合により其の収益の半を出さなければならぬ上に諸侯等武士の財政は種々の原因から全屋喬雄氏『封建社會崩壊過程の研究』参照甚だ窮乏してゐたから種々の名義を以て農民に新規苛酷の負擔をなさしめた。故に農業家は力を盡して集約的に土地の利用をした。當時の學者も農業に重きを置き收穫を多からしむるが爲に種々の研究を發表して之を教えた。従つて、當時の農業集約の程度は殆んど今日と異

らない程度に達してゐたやうである。而かも分地は制限せられてゐた上に子女が多い時には生計に困難を見るものであるから、産兒制限により辛うじて其の經濟を維持しつゝあつたのである。諸侯は財政の窮乏を救ふ策として新田開墾等を奨励し又は自ら經營せしめたから、兎に角農業は見るべき發達をなしてゐたものである。

明治時代
に於ける
土地制度

明治維新と共に封建制度は崩壊し従て土地制度も全く改まるに至つた。明治六年永代賣解禁の布告によりこゝに形式に於ても實質に於ても農業家の土地所有權は確認せらるゝことになつた。蓋し土地の永代賣の禁止は徳川幕府の政策實行の方法の一として寛永二十年に行つたのであるが、土地の所有權は既に農民の手にあり而かも其の經濟が豊でないが爲にこの禁を犯さざるを得なかつたから幕府の力を以てしても其の禁を勵行することは出來ない、諸侯の中でも之を默許してゐたものが多くあつたといふことであるから、或意味に於て土地の賣買は幕政時代から行はれてゐたことであつたが、明治政府は形式的に其の禁を解き土地所有權を確認することになつたのである。尙又明治六年

地租改正法が發布せられ第一着に村字の境界を正し次で土地所有の實際を調査したのである。

我國では古來兼併の弊を恐るゝこと甚しく土地の處分等については可成制限を設けてゐたに拘らず、土地の所有は必しも爲政者の希望するが如くに均分せられないで、多くは僅少の田畑を所有するに過ぎないものであるが、所によりては相當廣き土地を所有する所謂大地主も亦存在するのである。

第一章 土地制度

一 土地制度一般

一 土地制度一般
 國によりては農耕地は少數の大地主の所有に屬し多數の農業を營むものは之を小作するに過ぎざるものがある。英國、伊太利の一部の如きは其れである。土地所有者は百十萬人であつて全人口の三分強に過ぎないのである。又其の農場の面積(那須博士『日本の農業』による)を見るに、一九二六年には

土地制度一般	農場數	同割合
大農制	一—五「エーカー」	一九・〇%
	五—五〇	四六・二
	五〇—三〇〇	三一・六
	三〇〇—	三・二
計	四七八、六五五	一〇〇・〇

となつてゐる。三百「エーカー」以上のものは流石に少いが、其れでも一萬五千を超えてゐる。五十「エーカー」以上のものは十五萬以上に上つてゐる。英國にて

土地が少數のものゝ手にあるのは土地が政治上の力を意味し貴族のみが土地を所有したると、土地の所有權の移轉には重税を課して之を妨げたることゝ及び同國にては夙に長子相續の制が行はれて土地の分割が比較的行はれなかつたことが與つて力多きにあるといふことである。

反之、國によりては農耕地が比較的小分せられて多數の者の所有に屬するものがある。獨逸、澳地利、佛蘭西の如きは其の例である。農耕地が小分せらるるといひ條、後にも論ずる如く我國の如くに小分せられてゐるのではなく、又同じ國でも小分せらるゝ程度は地方によりて同じではない。
 小農の多いといはれてゐる佛國でも

農場率	農耕地全體
一「ヘクタール」以下	三九・二%
一—一〇「ヘクタール」	四五・九
一〇—四〇「ヘクタール」	一二・五
四〇「ヘクタール」以上	二・四
	二七・〇
	三二・七
	三七・〇

の數字を示し、獨逸では一九〇七年の統計にては

〇・五「ヘクタール」	一・一%
〇・五——二「ヘクタール」	四・三
二・〇——五「ヘクタール」	一〇・四
五——二〇「ヘクタール」	三二・七
二〇——一〇〇「ヘクタール」	二九・三
百「ヘクタール」以上	二二・二

である。

農耕地は少数の大地主の手に属するが可なりや、多数の地主の手に分割せらるゝのが可なりや。この問題は勿論其の國の社會事情に關係し、歴史的沿革もあること故一概に決定することは出来るものではないが、これ等沿革上の理由等は暫く措き單に理論からいへば、農耕地は其の土地を所有するものが其の家族と共に耕作することを得る程度の地積に小分せられてゐることが理想的なのである。所謂自作農制即ち是れである。土地の分配がこの状態にあるときは(一)農業家は熱心に耕作に従事し其の家族の勞働力を十分に用ふることが出来て集約的農業を營み其の収益を比較的多からしむることを得る。フヒリポ

自作農制度

土地配分の理想

ヴィチ (Philippovich) の如きはこの種の農業家を中農と稱してゐる。(二)この種の小地主兼耕作者の多い社會では其の富力が略ぼ平均してゐるから、民本的政治が行はれ、其の社會は比較的平和にして堅實であるといへる。(三)この種の農業家が多数を占めてゐる農村では其の農村を棄て、都會等に奔らんとするものが比較的少いから農村の疲弊を防止することを得るからである。

この土地の配分従つて自作農制が土地の配分としては最も理想的のものであつて經濟學者等は均しく之を激稱してゐる。ミル (Mill) は其の『經濟原論』の中に On peasant proprietors の一章を設け各方面より觀察して其の理想的であることを説明し almost super human industry (殆んど超人間的産業) とまでいつてゐる。然るに、土地がかく理想的に分割せらるゝことは稀であつて、假令一時この理想に近い土地の分割が行はれても、種々の原因によりこの理想より遠ざかるのである。即ち土地は一方には比較的少数の大地主の手に属することがあり、一方には土地は益々小分せられて其の農業家並に家族の勞働力を十分に用ふること能はざる程度にまで小分せらるゝことがある。所謂過小農制度である。

土地が比較的少數の大地主の手に屬するとき

一、地主は自ら手を下して其の土地を利用することを得ないから、勢ひ多數の労働者を備ひて之を耕作せしむるか、耕作をするものに小作せしめて小作料を收むるより外に途はない。農業労働者を雇ひて耕作せしむる時は労働者は概して收穫の多少等につき利害を感ずるものでないから、成るべく労働を省かんとする結果自然農業は粗笨的となりて比較的に多くの収益を擧ぐることを得ない、然らざれば其の土地の將來の生産力を顧慮せずして濫耕する傾を生じ、假令一時收穫が多くあつても其の土地の利用の點からいつて利益であるとはいひ難いのである。労働者をしてこの弊に陥らしめないやうにするには十分なる監督をしなければならぬ、然らざれば到底十分なる効果を擧ぐることは困難である。さればとて多數の小作人をして小作せしむる時は地主は勞せずして小作料を收めることを得て、甚だ樂であるやうであるが、小作人と地主との關係は小作料は兩者間の契約によりて定るもので、其の間に動もすれば小作爭議を生ずるのである。小作人は農業労働者ではない、小作料を出して地主から

土地を借り受けて之を利用し其の收穫を其の手に收めるものであるから、收穫が甚だ多いか又は小作料が甚だ少ければ其の手に残る所が多いから利益であるけれども、收穫が甚だ少いか又は小作料が多ければ其の手に残る所は少いか、ら不利益を被らざるを得ない。小作人は企業家であつて労働者ではない、損益の歸屬するものである。小作人が地主に對して成るべく小作料を輕減せしめんとするは當然であつて動もすれば爭議を生ずるのである。小作制度については後に研究しようと思ふからこゝには省いて置く。上にも陳べた如く英國等大地主制度の存する所では貴族である地主は直接に小作人に交渉することはなく、中間に仲介機關が介在するを常とする。即ち、これ等の仲介者は貴族より一定の小作料にて其の土地を借り受け、更に夥多の農業家に貸與して小作せしむるのである。これ等の仲介者は成るべく高い小作料を以て農業家に小作せしめんとするから眞に耕作する者の負擔は輕くはないのである。このことは決して稱すべきことではない。土地利用の觀點よりして理想に遠ざかるものといはざるを得ない。

二、大地主が其の土地を小分して小作せしむる場合は兎も角、然らざる時は土地を利用するに當り大經營法を用ふることを得る。進歩せる農業技術と大經營に伴ふ利益を擧ぐることを得る。精巧なる機械を用ひて勞力を省くことを得、其の經費を減少することを得る。この點は大地主制度の利益とする點であるが、機械力の利用は工業等に於けるが如く多きことを得ないものであつて、之より生ずる利益は自ら限定せられてゐるといはなければならぬ。大經營組織を採用すると分業の利益を擧ぐることを得るには相違ないが、其の利益も農業の性質上自ら限定せられてゐるのである。故に其の國にして粗笨的農業を以て満足する間は兎も角、集約的農業に由らなければならぬ場合は決して採用することは出来るものではない、即ちこの點から土地利用上の利益は大に限定せられてゐるものといはざるを得ない。

三、この土地制度にては少數の地主階級は勞せずして多くの収入を得、豪奢なる生活をなすことを得るが、多數のものは土地を所有せず、勞働者として小作人として働かざるを得ないから、土地に對する執着心も少く、其の収入も亦極め

て少いものである。貧富の懸隔甚しからざるを得ないことは決して喜ぶべきことではない。地主階級の中でも地主其のものは社會上の位置は甚だ高いけれども、其の家族のものは之によりて生活するものであるから、其の位置決して安固であるとはいへない、現に英國にては貴族の長子は其の父の後を嗣いで大地主となることを得るけれども、二男以下に至つては其の父の存命中は世人より相當の尊敬を受け、豪奢なる生活をなすことを得たにもせよ、父の死後は兄に由りて生活しなければならぬから、其の位置は自ら異らざるを得ない、これ等のものゝ中、稍氣慨あるものは本國に止ることを欲せず、植民地に出でて、自力によりて運命を開拓せんとするのである。これ英國の植民地には相當の修養ある紳士の活動するもの多く、其の植民地をして比較的優良なる社會たらしむる原因をなすものであるといふことである。土地を中心とする經濟に於て二男以下のものゝ位置の問題は社會問題として相當注意すべきものである。大地主制度の利害は概ね以上陳ぶる所にて盡してはゐるが、尙二三併せ注意すべきことがある。

一、 奴隷經濟の弊 大地主制度の行はれてゐる所では貧富の懸隔が甚しくあることは前に陳べた所であるが、其れが甚しくなると奴隷經濟が行はるに至る恐がある。我國の農業組織を見ても、古昔は氏上を初め稍下つては莊園の領主等は大地主であり其の下にある農民等を酷使して耕耘に従事せしめ其の收穫を擧げて其の手に收めてゐたのであつて、其の弊が甚しかつたのである。歐洲にても、羅馬にては貴族である武士は土地を所有すれども、自ら耕作に従事するのではなく、奴隷を酷使して之を利用せしめてゐたものである。之を奴隷經濟(Latifundien Wirtschaft)といふのである。近古の初め、西班牙の農業、近くは濠洲植民地、南亞米利加の農業の如きは之に類するものであるといふことである。

二、 不在地主の弊 農村では普通は地主は耕作者の間に介在するものであるが、大地主制になると、地主は動もすれば其の土地に居住せず都會に出でて生活するものがある。土地を抵當にして負債を起した場合に、其の土地が抵當流れとなる曉には、債權者は其の土地の所有者となることは稀ではない、これ等の地主は多くは都會に生活して其の土地に生活してゐるものではない、これ等を

不在地主(Absentismus)といふのである。不在地主は其の土地に居住するものではないから多くは監督者を置いて其の土地を耕耘せしめ、若くは小作料を徴集するのであるが、地主は其の地に居住して現状を見ないのであるから農業に對して利害を感ずること少く、單に投資とのみ思ふに過ぎない。かくては其の土地の利用についても小作人労働者に對しても適當なる措置をなし難い、明白でなければならぬ。

三、 土地が寺領となること少からず。土地が地主自身によりて耕作せられざる結果、其の國の法律等で賣買讓渡が許されざる時は、或は國家地方自治體の所有に歸し、或は寺院の所有に歸することがある。國家又は地方自治體の所有に歸することは經濟上は兎も角、社會政策其の他について相當注意すべき問題を含むものであるから、暫く措き、寺院の所領となり其の從來の所有者は單に管理者となりて其の收益の全部又は一部を得る場合には、多くは其の土地の利用は從來に比し閑却視せられて合理的利用は之を望むことは出來難い。之を俗に死者の手にある土地といふ。このことは古昔英國に於て盛んに行はれた所

である。即ち英國では土地を所有する者は其の土地を寺院に寄進して其の冥福を祈る風が盛んであつて、ノルマン征服後一二世紀の頃には土地の大部分は寺院の領有に歸した程であつたといふ。このことは國王の財政に少からぬ影響を及ぼしたのである。其の理由は國王の財源は私有地より出づる地租が主なるものであつたのに、寺領からは地租を收めることを得ないから寺領が徒らに増加することは財政上大なる影響を見るのは當然である。而のみならず當時封建時代の習俗として臣下が死亡する時は其の嗣子にして新に臣下となるものに對して種々の名義の下に獻上物を收めたものであるが、土地が寺領となつてからは寺院には死期がないから、國王はこの種の收入を得ることは出来なかつたから之を禁止するの必要を感ずるに至つたのである。ヘンリー三世、エドワード一世は君主、諸侯の免許なくして土地を法人に譲渡した時は之を沒收すとの法律を出したのである。この法律は寺院にとりて大打撃であつたが、當時の裁判官は概ね僧侶であつたから寺院の利益の爲に羅馬法の *Uses fidei commissarii* を巧に用ひて其の法律の適用を回避したのである。即ち寺院は直接に土地

の寄贈を受けることが出来ないから其の土地を第三者に寄贈し一定の寺院の *Uses* (實益) の爲に之を領有すべきことを命ずるのである、其の命を受けたるものが之を遵奉する時は寺院は表面は其の土地を寄贈されないが事實上は其の寄贈を受けたと同じである。寄贈者を *donor* といひ第三者を *feoffee to Uses* と稱し、更に受益者を *Cestui que Uses* といふのである。これが信託制度の起りであるといふことである。何れにもせよ、所有者が其の利益の爲に土地を利用するのではないのであるから土地の利用が合理的に行はれないことは想像することを得るのである。

由是觀之、大地主制度は土地制度として理想に遠ざかるものであることは疑を容れざることである。

大地主制度が土地制度としての理想を遠ざかるものなると同じく、土地が餘りに多くの小地主の間に分割せられ其の家族の労働を十分に用ふることの出来ないのも亦土地制度としての理想に遠ざかるものといはざるを得ない。何者(一)其の土地利用は最も集約的に行はれるであらうが、其れより出づる收穫は

過少農の
不利益

甚だ少いのであるから其の農業家の經濟を支ふるに足らない。其の結果、副業等によりて其の不足を補はなければならぬ。適當の副業が存すれば問題は無いが、其の副業が求められなければ經濟上困難しなければならぬ。又其の副業にして却つて農家の收入の多くの部分を擧ぐることになれば、主業である耕作に對して重きを置かざるに至らんとも限らない。(二)其の土地の收益にして農家の經濟を支ふるに足らない時には農業家は其の土地を棄て、都會に奔り他の職業に就かんとするもの多く土地に定住するの風衰えざるを得ない。このことは農業の國民經濟上の使命に照して憂へざるを得ない。(三)所有地が甚だ狭小であるから農業經營からいつても農業機械を用ひたり其の他資本的生産の利益を擧ぐることを得ないからである。過小農の典型は之を我國の農業に見る。前章に掲げた耕地所有者戸數について見るも、昭和六年には

〇・五〇「ヘクタール」未満	二、五三五	千戸
〇・五〇—〇・九九「ヘクタール」	一、二七三	
〇・九九「ヘクタール」以上	八九七	
二・九八「ヘクタール」以下		

二・九八「ヘクタール」以上	二二四
四・九六「ヘクタール」以下	
四・九六「ヘクタール」以上	
九・九〇「ヘクタール」以下	一一二

であり、其の大部分は一「ヘクタール」(約一町歩)以下のものである。五町歩以上のものになると極めて少いのである。『農林省第九次統計表』によるも、昭和七年末の調査に於ては

五 段 步 未 滿	二、五四六、〇八九	戸	(四割九分七厘)
五 段 以 上 一 町 未 滿	一、二八六、〇五〇		(二割五分)
一 町 以 上 三 町 未 滿	九〇三、四一五		(一割七分七厘)
三 町 以 上 五 町 未 滿	二二二、三二七		(四分四厘)
五 町 以 上 十 町 未 滿	一一二、四四九		(二分二厘)
十 町 以 上 五 十 町 未 滿	四六、二七〇		(九厘)
五 十 町 以 上	三、七三八		(一厘)

平均面積は九反七畝である。而して農業家が其の勞働力を用ふるに適當なる土地の面積は學者の研究によれば、一町五反(水田八反畑七反)但し水田の四割丈は二毛作、畑は全部二毛作の計算を最小限度とする。若し其の土地の關係上

全部一毛作とすれば二町五反を最小限度とするといふことである。我國の土地の分割は餘りに小に過ぎてゐるといはざるを得ない。前章に例示した小農の多いといはれてゐる佛、獨等の統計に比較しても其の過小なることを知ることが出来る。農業家が勤勉努力しても相當の収益を擧げることが出来ないのは當然であるといはざるを得ない、自家の土地を耕耘するのみにては勞働力に餘剰があるから他の土地を小作して其の經濟を立てなければならぬ、我國で自作兼小作農が多く全農業家戸數の四割二分にも及んでゐるのは主として之に起因するのであるし、前にも陳べた如くに副業によつて其の經濟を立てつゝある者の多きも亦之に原因するものといはざるを得ない。我國の農耕地が斯くの如く餘りに小分せられたのは恐くは泰西諸國と同じく人口の増加に原因するのであるまいか、封建時代に於ては地方では農業が殆んど唯一の生産であつたから農業により生活を立てなければならぬ、農業にて生計を立てられないとすれば、農村を棄て、都會に奔らなければならぬが、都會に出た所で今日に比して適當なる職業を求めることが出来難くあつたに違ひない、故に事情

已むを得ざるものゝ外は農村を去らうともしなかつたのであらう。所で農業家に於て多くの男兒があるとこれ等の男兒をして農業にて生活せしむる爲に土地を分割して之によつて生活せしめようとしたものが多くあつたのであらう。これが知らず識らずの間に土地が小分せられた原因をなすのであつたらう。勿論一方には頻りに開墾が奨励せられたり、又は消極的に長子相續によりて土地の分割を防止せんとせられたのであるが、何時とはなしに土地が小分せられて今日に至つたのではあるまいか。抽象的にいへば人口増加が土地を小分せしめたともいへよう。徳川幕政の初めの我國の人口は約三千萬人であつて、更に幕政の終期に於ても人口は同じく三千萬人であり、人口に於て殆んど増減がなかつた。これは恐くは我國の農耕地が既に小分せられて其の土地を耕作するのみにては生活をなすことが困難であるから更に之を小分割する餘力がない爲に、種々の方法にて産兒を制限し以て人口の増加を防止せざるを得ざるに至り、官憲も亦之を默許せざるを得なくなつたからではあるまいか。この觀察にして大過なしとすれば人口制限によつてまで土地の小分せらるゝこと

を防止しなければならぬことは實に悲惨事といはざるを得ないではないか。農業家の經濟が窮乏しつゝある根本原因の一はこゝに求めなければならぬと信ずる。農業家の經濟を潤澤ならしむる方策については漸次攻究しなければならぬが、我國の土地制度として過小農制度を改めて適當の土地制度にすることが根本策として考えなければならぬ、即ちこれ等の一町歩以下の土地を擴張して一町五反以上となさしむることである。これには政府が相當の政策を行はなければならぬ。

一二 土地國有論

土地所有權を保護し其の分割等を防止する政策を論ずるに先ちて土地所有權其の物について學者の間に議論がある。社會主義を奉ずるものは勞働價值論に基いて土地は勞働によりて生じたものではないから、社會の有とすべきものであつて私有すべきものでないことを主張する。土地は勞働の結果でないことは明白であるが、未開不毛の土地なれば兎も角、我等が利用することを得る土地には相當資本勞働が加はつてゐることも争ふ可らざることである。して見

土地國有論

土地國有論の檢討

土地買上論

れば、土地を利用するものが土地より出づる收益の全部を擧げて其の手にすることは正しくないにしても、其の一部分即ち土地に用ひた資本勞働に對して相當の報酬を得ることも首肯しなければならぬ、従つて土地は勞働の結果でないといふ理由により有ゆる土地を國有にしなければならぬといふ理由は成立しないと信ずる。土地は凡て國有とすべきものとした所で未開不毛の地ならば直ちに國有とすることが出来るとした所で、既に私有地となつたものには相當の價格で買上げるか、國家の權力によりて之を沒收しなければならぬ、其の何れの方法によるかを問はず國有とした後は勞働者を備つて利用せしむるか又はこれを利用するものに貸與して小作せしむるか二者一を選ばなければならぬ、勞働者を備つて利用せしむるのは土地の利用方法として效果的でないことは國家が土地を所有した場合でも大地主が土地を所有した場合と異なる所はない。故に土地利用の觀點からいへば小作せしむるより外はあるまい。ワルラスの如き學者は熱心に之を主張してゐる。其の要旨をいへば、土地は性質上獨占的のものであるから、悉く國有としなければならぬ、今日私有となつてゐ

る土地は相當の價格で買上げ國有としなければならぬ。國家は其の土地を期限を定めて之を利用するものに貸與して地代を收めしめなければならぬ。土地は貸與するにしても五十年乃至九十九年の長期でなければならぬが、其の期限が到來したならば、國家は土地の占有を回復し新に之を貸與しなければならぬといふのである。先年我國の貴族院でも土地國有論を唱えた者があつた。これも國家をして相當の價格を以て土地を買上げしめようといふのである。小作爭議等の頻發する結果、土地を所有することの危険を思ひて國家をして之を買上げしむれば、其の代價を以て他の有利なる投資に用ふることを得るといふのである。ワルラス等の論がかゝる利己的の考の上に出てゐるのでないことは明白であるが、之を實現することの困難であるのは即ち一である。第一に國家が相當の價格で有ゆる私有地を買上るとなれば、國庫の負擔は莫大であつて到底堪ゆることは得まい。第二に若し之を貸與するとせば、其の小作料は蓋し甚だ高からざるを得まい。之を利用するものゝ苦痛は甚だ大であらう。若し之を利用する者の苦痛を察して小作料を比較的軽くする時には國庫の負擔は頗る

土地沒收論

大であらう。故にこの論は實行困難であるといはなければならぬ。若し夫れ露國にて行ひたる如く一片の法令に由りて之が私有を禁じ之を國有として利用する者に對して相當の報償を出すことゝせば、其の實現は容易であるが、果してよく其の土地を合理的に利用せしむることが出来るかは疑問ならざるを得ない。少しく露國にて行ひたる所を回顧しよう。同國に於ける土地國有法は一九一八年二月十九日發布せられたのであるが、第一條には土地、地下の富、水、山林並に家畜等の一切の所有權は永久に之を廢すとありて直ちに國有とすることを明示し、第二條に土地は凡て勞働する人民の利用に委すべし、而して之が爲に賠償等の費用租税を負擔することある可らずとあり、第九條に勞働階級の間に土地を分配することは、村郡等地方政府の事務に屬すとある。一見條理整然たるが如くであるが、其の根本精神は共產主義であつてこれ等の國有土地を利用して生じたる収益は悉く國家の手に歸せしむべく、之を利用したる者に對しては其の生活に必要な丈を給與するといふのである。土地を利用する者にして全力を擧げて耕耘に従事する時は土地の合理的利用を望むことを得べ

さも、勤勉たると怠惰たるとを問はず生活に必要なものは之を得るとせば、恐くは勤勉農事に努力するものはないであらう、露國に於て收穫が俄に減少したのは蓋し當然といはなければならぬ、要するに、土地を擧げて國有として之を利用せしむることは到底土地を合理的に利用せしむる所以でないことを知ることが出来る。

土地の合理的利用を望む以上、土地の私有を認め所有者をして其の利益の爲に土地を利用せしめ成るべく多くの收穫を得せしめなければならぬ。この見地から土地は勞働の結果でないとの理論のみに由りて國有制に賛成することは出来ないと思ふ。

一三 家産制度と一子相續制

土地私有制の下にては土地の利用が合理的に行はるにもせよ、農民解放後諸國に於て經驗した如く、土地を利用する者にして動もすれば其の土地を賣却し若くは擔保として資金の融通を得た爲に、土地を失ひ其の經濟の基礎を危殆に陥らしむるものなしとしない。農業政策としては土地所有者をして其の土地

家産制度
と一子相
續制

家産制度

を喪失せしめない爲には若干の政策を採らなければならぬ。次に擧ぐるものは其の顯著なるものである。

一、家産制度(Homestead Familien=fideikommiss)

家産制度とは一定面積の土地を農家の家族の財産として永久に相續せしむる制度をいふのである。即ち其の土地は家族の財産として子々孫々永久に繼承せらるべきものであるから、農業家は單に之を利用収益することを得るのみであつて之を割讓することも賣却することも許されない、其の財産を擔保として負債を起すことは絶対には禁じてはないが、この場合には豫め官廳の許可を受けなければならぬこと、其の負債は一定の限度内に止るものなることを要すとの條件が附せられてゐる。

土地の賣買等にこの種の制限を附することの可否については學者の間にては賛否相半してゐる。大體からいへば、獨逸の學者は今日ではこの制度に賛成するものが多いやうであるが、佛國の學者は之に反對するものが多いやうである。賛否の論旨の主なるものを擧ぐると、之を賛成するものは

賛成論の
要旨

(一) 若し土地の所有権に何等の制限を設けないと、農業家が一時の必要の爲に之を擔保として負債を起す時は、其の土地は遂には其の家族の手を離れて、其の子孫は經濟の基礎を失はなければならぬことになる。これ農業家の利益とはいへぬ、特に農民の自由を恢復せしめた精神からいへば、農民をして永久に經濟の基礎を失はしめないやうにしなければならぬ、土地の所有権にこの種の制限を設けることは正に其の精神に合致するものといはなければならぬ。

(二) 家産制度は所有土地の全部の處分權を否定せんとするものではない、土地の最小限度をば家族の財産として分割を許さないといふに過ぎない、この制度によりて家族のものは其の土地を最も有効に利用して其の家族の永久の利益を計ることが出来るのであるから、其の農業家の利益は暫く措き、土地利用の見地からいつても利益であるといはなければならぬ。

(三) 土地の處分を全く自由ならしむる時は經濟力あるものが土地を兼併するに至るであらう、このことは社會政策上決して稱すべきことではない、土地

反對論の
要旨

の處分にこの程度の制限を置くことは妥當であるといはなければならぬ。といふのである。之に對して反對する者の要旨は

(一) この制度は農業家が其の經濟を営む能力がないことを前提として設けられたものであるといはなければならぬ。若し其の財産の處分を自由にすれば其の未來の幸福等を顧みることなく之を處分するが故に其の手足を束縛しなければならぬといふに同じである。これ農民を侮辱するものといはなければならぬ。

(二) 土地の所有權にこの種の制限を設くる時は、この種の土地を所有する者は其の土地によりて合理的利用をなさんとしても、其の土地により負債を起すことは出来ないから、合理的利用を望むことを得ない。

(三) この種の土地を所有する者は從來の經驗によると、動もすれば怠惰に流るゝ傾向がある、其の土地は永久に失ふ虞がないことを知るが故に、努力して其の經濟を善くせんとしないからである。この制度は農民の經濟を善くせんとするに拘らず、却つて反對の結果を生ずるから採用すべきものではない。

(四) この種の土地を所有する者が負債を起さんとしても之をなすことが困難である。他に負債を起すに適當なる擔保物件があれば問題はないが、農家の多くは土地を除いては適當なる擔保物件がないから、之を擔保とすることを許さないのは融通の途を塞ぐに等しいもので寧ろ殘酷であるといはなければならぬ、一方に於て適當なる農業金融機關が整頓發達し農家をして之を利用することを得せしむれば土地を擔保として負債を起すことを許すも甚しき弊害を生ずることはあるまい。

(五) この制度を設けると、土地が經濟力のある者の手に移ることを妨ぐと同時に農村に止つて働かんとする者に土地を得ることを得ざらしむるものであるから、これ等のものは農村に止まらんと欲して止ることを得ない、已むなく都會に出でて活路を求めなければならぬことになる。この制度は農村の人口の増加を妨ぐものといはなければならぬ。

(六) 假りに土地の處分が自由なる爲に、土地が經濟力の多いものゝ手に移るとしても其の土地は最も合理的に利用せらるゝに至るので經濟社會より觀

て決して憂ふ可きことではない。

(七) この種の土地が存在する時は之と境を接する土地を求めて之を擴張せんとする傾向がある、従つて却つて土地兼併の風を助長するものといはなければならぬ、故に家産制度は一見社會上稱賛すべきが如くにして決して然らず。之を設く可きものではない。

といふに歸するやうである。抽象的にこれ等の論旨を比較するも其の可否を決することは困難であるが、農業政策としては其の國の實情に即して之を決するより外に途がないと信ずる。抑もこの制度は初め貴族の領土財産に設けられた世襲財産制に範を求めたものである。貴族の土地財産を自由に處分することを許す時には、貴族の中一時の必要により其の財産を處分し爲に其の子孫の不利益を貽し其の位置を保つこと能はず貴族の使命を果すことが出来なくなるもの少くはない、故に一定限度の財産を、世襲財産となすことを許したものである。其のことはいふまでもなく其の土地は甚だ廣大であつて其の一部分について處分權に制限を設くるも貴族として何等の痛痒を感じないものでない。

而かも之が爲に子孫の爲に位置の保障を設けることを得るので社會上稱す可きことであるに相違ない、貴族の土地について稱賛すべきものとしても直ちに移して農業家の財産に適用するを得べきかは疑問ならざるを得ない。貴族の世襲財産制度についても一方には激稱するものがあると同時にオンブレダ(Ornpleda)の如きは社會上の弊害とまで攻撃してゐるものあるに於てをやである。

更にこの制度は植民地に於て採用せられたものである。北米合衆國にては植民を奨励する爲に植民者には一定の土地を給與し其の中其の農業家周囲の土地を家産として譲渡を禁じたのである。これはいふまでもなく植民者の家族の利益を保護し之によりて植民開拓を昌ならしめやうとしたのであつて、上に陳べた家産制度とは立法の趣旨稍異なるのである。フェリピンに於ても之に倣ひて市民は一六ヘクタールを超えざる土地を家産となすことを得せしめたのである、但し其の土地に五年以上居住し耕作することを要するのである。之を Entail & Settlement 云々。

植民地に於てこの制度を採用したのは植民者をして後顧の憂なからしめ、以て其の開拓を促進せしめんとする趣旨に出たもので、こゝで考察しつゝある所とは全く別問題であるから之によりて本問題を解決することは出来ない。今本問題に戻つて攻究するに、土地利用の點からいへば、反對論者の指摘するが如く土地所有權にこの種の制限を設くる時は土地を最も合理的に利用する者の手に移ることを妨げるのみならず、土地所有者をして之を擔保にして土地改良の資金を得せしむる途を妨ぐることになり、却つて不利益なる結果を生ずるものといはなければならぬ。唯問題は其の國の農業の狀勢上、この制度を設くる社會政策上の必要ありや否やといふことになる。所で、家産制度は其の家産とした土地の利用によりて其の家族の經濟生活を大體安全ならしむる程度でなければならぬから、いはゞ其の家族の勞働力によりて耕作し得る面積のものでなければならぬ、然るに、我國の農耕地を見るに前にも説明する如く一町歩以内のもの大部分を占め、其れ以上のもものは割合に少いのである。故に、此等小農に對して、家産制度を強制する時は之をして土地處分權を奪ふのみならず、

其の土地を擔保として資金の融通を受くる途を塞ぐことになるので農業家に對して寧ろ冷酷なる政策といはなければなるまい、若し夫れこの制度を強制せず、これ等の農業家の中特に其の土地を家産になすことを希望する者あれば之を許すとせば可なるが如きも、これ等の農業家は之を希望する者はあるまい。これ等の小農に對しては積極的援助をなす必要がある際、この消極的の保障政策は恐くは有効ではあるまい、して見ればこの制度を適用するものは比較的廣き土地を所有する所謂大地主に限られるのであるが、これ等の者の中其の所有地の一部分を家産となすことを申し出づるものに對し政府が之を許すとせば、若干の社會的效果はあるが其の社會的重要性は極めて僅小のものといはなければならぬ。これ等のものは他から兼併せらるゝ危険があるものではなく寧ろ他を兼併する危険のあるものである、家産制度によりて其の存在を保障する必要のあるものではない。由是觀之、この制度は土地がさまで小分せられてゐない國に於ては問題となり得べきものであるかも知れないが、我國の如く土地が極小分割せられてゐる所では之を設置する必要はないと信ずる。家産の美

一子相續制度

名に眩惑せられて其の實際的效果を過信せざることを希望せざるを得ない。我國でも之が設置を提唱したものがあつたから、こゝに一言し置くのである。

二、一子相續制度(Anerbenrecht)

土地が他の財産の如く所有者の意思によりて其の子女の間に分割相續することを許す時は、所有地の面積は次第に小分せられて之を集約的に利用しても、其の收穫は甚だ少く従つて之が所有者は之によりて經濟生活を安全に營むことが困難とならざるを得ない、故に土地を小分せしめざるが爲に土地の相續權に制限を設くるの必要ありやの問題を生ずるのである。

土地の相續權については古來制限があつて一子が之を相續し、數子に分割することを許さなかつた國が多くあつた。例へば獨逸の古代の農家法に「農家は唯一子あり(Der Bauer hat nur ein Kind)」といふことがあつた。其の意味は農業家の財産は世々相續したもので、其の一子が家督を相續すると共に、其の財産の所有者となつたのであつた。土地が小分せられなかつた爲に相當の收益を擧ぐることが得たので土地所有者は相當の生活をなすことを得、領主も亦相當の租

税収入を擧ぐることを得たのであつた。故に一子相續制に對して之を疑ふものはなかつた。然るに十八世紀の末葉に及びて個人主義的思想が盛行するに至つたから、土地にしる其の所有權並に相續權に制限を設けることは正しくはない、宜しく土地所有者の意思により之を處分し相續せしむべきであるといふ考が牢として抜く可らざる思想となつた。従つて土地も必しも一子にのみ相續せしむべきものでなく、之を分割相續せしめても差支ないと考ふるに至つたのである。このことを實行すると、寧ろ害多かつたから遂にこの問題が起つたのである。

我國でも概して古昔より長子相續制が行はれてゐたから、之が爲に特に土地が小分したことはなかつたが、中世長子相續の制が廢れて財産が分割相續せらるゝに至つた。土地も亦分割相續せられた所が少くなかつたのであらう。其のことに對しては明確に知ることが出來ない、然し其の後になつて、長子相續制が再び行はるゝに至つたといふことである。

土地を一子に相續せしむるときは、之を相續したものは比較的、生活の安定

も得るし、土地の利用も合理的ならしむることを得るので利益であるけれども、之を相續すること能はざりしものは、假令其の相續すべき土地が甚だ狭小なるにもせよ、不利益を招かざるを得ない故に既に被相續者の意思によりて數子の間に分割相續せしむることが行はれた以上再び一子相續制を復活せしむるについては多少の變更をなさなければならぬ。即ち中小農民が死亡した時は、其の土地は之を數子に分割相續せしめないで、其の中の一人に之を相續せしめ、其の他の子女に對しては各自の相續分に相當する賠償をなさしむるのである。このことにして行はるれば土地の相續に與ることを得なかつたものも賠償金を受領するから、不平を唱ふることはあるまい、然し其の賠償金にして多い時は、土地を相續するものは之を出すにつきて困難せざるを得ない、其の土地の相續人が賠償金を出すが爲に土地の一部分を賣却せざるを得ないとすれば、事實相續すべき土地が甚だ狭小となつて、相當の収益を得ること能はざるに至るかも知れない、よし其の程度がさまで甚しくないにもせよ、土地經營の資金が乏しくなり改良工事をなすこと能はず、相當の合理的經營をなすこと能はざる結果を

生じないとも限らない故に其の賠償金額の多少等が實際問題として重大ならざるを得ないのである。一方には土地を相続する者と一方には土地を相続せざる者との利益を成るべく背反することなからしむると同時に土地の合理的利用に差支なからしむる爲に數子均分主義を原則とする獨逸にては種々の制度が行はれてゐる。其の一二を擧げて見ると、

a、普魯西亞等二三の州にては土地は數子に均分相続せしむることを認めない、相続土地の三分の一を相続人の先取分として、之を控除し其の殘餘を相続人並に其の兄弟姉妹に均等に分配すること、し之を分配する代りに其の相続分に對して賠償せしめてゐる。この制度では土地は分割せられないから、合理的經營をなすにさしたる障害をなすことはあるまい。而かも土地を相続しない者の受くべき賠償金は或程度まで減少してゐるから相続人の負擔は其れ丈輕減せらるゝことになる。相続人のみにこの特遇を許すことは實に土地利用に關する經濟上の便宜を以て辯護するより他に辭がないのである。

b、所によりては土地の一子相続を強制的になさず、遺言なき場合に之をな

さしむるものがある。このことを巧に行ひつゝあるのは Hannover 州で行ふ制である。其の法律に由ると農園臺帳 (Höferolle) を設けて置き、土地所有者をして土地を之に登録せしむるのである。土地に登録した所で、之が爲に其の土地の處分權に差異を生じたのではない、従つて隨意に分割して相続せしむることを得るのであるが、唯遺言をなさずして死亡した時は其の登録した土地は相続人に不分割に相続せらるゝものである。故に若し所有地を不分割に相続せしむることを欲せざるときは、土地の一部分を登録すれば宜しいのであるし、登録した土地と雖も、遺言により其の相続者を變更することを得るのである。

この制度は一子相続を實現する上には効果があるには相違ないが、土地は農業家にとりては最も重要な財産である、其の相続は最も明確なる手續に由るべきものである、若し一子相続が其の農家の經濟にとりて利益であり、經濟社會にとりて必要なりとすれば、之に對して異議を挾むものがあつても、之を排して斷行すべきである。然るに、被相続者が生前遺言をなさなかつたといふ吾等の弱點に乗じて、土地の分割を防がんとする如きは法治國の根本精神に悖るもの

といはなければならぬ。この趣旨により此の制度に對して攻撃するものが少くないのである。

歐洲諸國に於ては分割相続が相続の原則になつてゐるから、土地の分割を防ぐが爲に、如上の便法が生じたのであるが、我國では土地の所有は既に原則として更に分割を許されない程小分せられてゐる上更に長子相続制が久しく行はれてゐるから、法律としては之を襲用すれば宜しいのである。特に之を論議する必要はないと信ずる。

上來説明し來つたのは土地の分割を防止せんが爲に諸國で採用する土地政策の一斑であるが、農業家にとりては從來よりはより廣き面積の土地を所有せしめ以て土地の利用をより合理的ならしめ、若くは土地を所有せざるものに必要なる土地を所有せしめ、以て農業經營の理想に近からしめんが爲に國家として政策を行はなければならぬ。地方によりては土地が甚だ小分せられ、其の利用が甚だ集約的なるに反し、地方によりては土地は小分せられず従つて其の利用が粗笨的なる所がある。斯くの如きは土地利用から觀て、決して稱すべきこ

土地分配政策

内國植民

とではないから人口稠密なる土地の住民の一部分をして人口稀薄なる土地に移住せしめ以て一面に於ては土地の分配を公平ならしめ以て土地の利用を合理的ならしむると同時に之より生ずる利益を得んとすることがある。所謂内國植民問題である。

一四 地代農場と自作農創定

所有地を擴大し若くは新に土地を所有せしめ以て自作農を創定するに種々の方法はあるが、古來最も合理的方法として稱揚せられてゐるものに地代農場の制がある。

地代農場とは土地の所有權を獲得せしむるのに代金を以てせず、貨幣又は穀物による一定の地代の支拂により相當年月の間に土地所有權を獲得せしむべき農場の義である。

土地は農民の生活の本據である。之を所有し其の好む所に従つて利用せしめなければならぬ。然るに新に土地を譲受けんとすれば莫大なる資金を必要とし之を實現すること容易ではない。故に地代によりて若干年の間に之を

地代農場と自作農創定

地代農場

譲受けしむる途を設くる時は、さまで困難なく土地の所有権を獲得せしむることを得せしむることを得るのである。この制度は普魯西亞に於て試みられ、絶大の効果を擧げることが出来たので、多くの國に於て之を模範とするに至つたものである。蓋し十九世紀の初め多くの國に於て農民解放が行はれたが、農民にして土地所有権を得ること能はざれば、依然として労働によりて生活しなければならぬから、其の經濟生活は安定することを得ない、特に獨逸の東部地方にては農業を除いては生活する途がないから、其の經濟生活が安定せざる曉には農村を離れて都會に出で、職業を求めなければならなかつた、之を防止するには自作農を奨励しなければならぬ、こゝに於て、獨逸政府は地代農場を奨励し、これ等農業地方に於ける人口減少を防止するに止らず、人口稠密なる地方より人口を招致して以て同地方の農業を盛んにしたのである。土地が公有地であれば政府にして地代農場を作る意思あれば、この計畫を實現することは困難ではないが、其の土地にして大地主の手に屬し容易に之を得ること能はざる時には、其の計畫を實現することは容易ではない、獨逸にて實驗した所から考察すると

第一には土地をして小農等に獲得することを得る状態になすことが必要である。第二には小農等は經濟力が乏しいのであるから政府は之を助けて土地所有権を獲得せしめなければならぬ。第三には土地所有権が故障なく移轉すれば兎も角、然らざる場合には地代權者に對して相當の保護をすべきである。

一、土地は原則として大地主の手から買収しなければならない、之を買収するには相當の資金を必要とする。國家が農業政策實行の爲め地代農場を作るに當つて相當の基金を出したものである、即ち其の基金の中から相當の條件を以て土地を買収し、之を地代農場となし、之が所有を希望する者に譲渡し、一定の地代を收め、若干年の後には、其の土地の所有権を得せしめたのである。政府が直接に其の局に當り土地を買収するには、(一)莫大なる基金を必要とする、其の買収すべき土地にしてさまで廣からざれば、其の基金も之を得るにさまで困難ではあるまいが、其の面積にして廣ければ、之が基金を得ることは容易ではない、(二)土地を所有せんとする者がかゝる方法に由り土地を取得するも、約定の地代を支拂ふこと能はざるが爲に、中途にして其の權利を失ふものがあり、又土地を所

有するにしても改良工事をなすが爲に資金を必要とし、又家屋等を建築するが爲に資金を必要とすることあり、其の他間接に資金を必要とすることあり、これ等の資金を給與するに非ざれば、俗にいふ佛作つて魂入れざるに同じく自作農を創定することは出来難い、これ等一切の問題に對して國家が直接に當ることは不便が少くない、故に便宜の方法として地代銀行を設置し之が媒介機關としたのである、地代銀行については後に詳述するが、こゝには如何にして地代銀行が國家に代りて地代農場の創定の事業を遂行するかを略述すれば、地代銀行は地主と土地を得んとする者の間に立ちて地主よりは其の土地を妥當なる價格を以つて買受ける、而して其の代金は原則として政府の保證する同銀行の債券を以て支拂ふのである、其の債券は信用確實であるから地主は之にて支拂はるるも不利益を感ずることはない、地主にして若し直ちに現金を必要とすれば、該債券を賣却すれば宜しいのである。銀行は其の土地を土地を得んとする者に讓渡し年々一定の地代を銀行に支拂はしめ以て債券の利子及び元金の償還に充てるのであつて、若干年の後には完全に其の土地の所有權を得せしめることを得るのである。

二、地代銀行が國家に代りて地代農場を設くる時は、國家よりは圓滑に其の事業を遂行することを得るが、土地を得んとする者は約定の期限の地代を完済する迄は未だ土地所有權を得ることが出来ないのであるが、其の地代を完済せしむるには十分に土地を利用して相當の収益を得せしめなければならぬ、相當の収益を得せしむるには其の土地に對して相當の改良を加えなければならぬ、し、相當の施肥なり、種子なりを吟味しなければならぬ、其れには相當の資金を必要とするから、小農等經濟力の乏しきものにては之が實行は容易でない、故、地代銀行は之が資金を給與しなければならぬ、其れには少くとも最初一年間は地代を徴收しないのみならず、其の土地を利用するに必要な資金を貸與し以て其の土地を十分に利用することを得せしむるのである。これ等の資金なり、猶豫した地代なりは元金の中に繰入れて其の地代を計算すれば宜しいのである。

土地を合理的に利用せしむるについては農業家の自由に放任するは宜しく

ない。故に地代銀行は普通これ等の事務を行ふが爲に委員會を設け之が監督指導の職に當らしむるのである。即ち

a 地代農場の測定分配等は凡て土地の性質等を基礎としてなさなければならぬから、相當技術等の素養がない者では之をなすことが出来難い、委員會の必要とする所以である。

b 土地の分割譲渡等は委員會の同意を要す。委員會は必要なる調査をなして之に同意するのである。

c 委員會は農業技術等の指導に當り地代農場設置の趣旨に副はしむることを得るのである。

地代銀行を用ひて地代農場を創定せしむる方が國家が自ら基金等により之を創定するに比し便利である點を挙げれば

一、國家が基金により自作農を創定する時は勿論、其の基金の範圍に於て事業をなさなければならぬ、即ち豫算等によりて拘束を受けざるを得ない、然るに、地代銀行が之に當る以上、必要があれば其の債券を發行して其の事

業を擴張することを得るから、其の活動は遙に敏活なることを得るのである。

二、國家が之を行ふ時はいふまでもなく中小農保護といふ社會政策の見地から之をなすのであるから、假令國庫に若干の損失を來しても中小農業者に利益があれば、之を忍ばなければならぬ、地代銀行が之に當る時は銀行としては危険を負担する譯には行かないから、何處までも經濟の法則に従つて、之を處理するのである、従つて其の事業をして成功せしむるのである。地代農場の制は地代銀行の力によりて農業政策上多大の効果を擧げてゐる。尙農業金融を論ずる時之に論及する。

我國で地代農場政策の起つたのは土地を所有せざる者に土地を所有せしめ農業經營の理想に近からしめんとするよりは寧ろ、近年地主と小作人との間に小作爭議が頻發し、社會政策上之を等閑視することを得ないから、之が對策としてある。幸ひ我國では自作農が割合に多く、單に小作のみで生活してゐる者が比較的多くないから、是等の小作人をして土地を所有せしめ以て自作農た

我國に於ける自作農創定

らしめなば、小作農は益々減少するに至るであらう、小作農業が減少するに従ひ自然小作争議が起る機會が少くなるであらうから、小作争議を撲滅する根本策の一たることを得るであらう。我國で自作農創定に著手したのは實に大正十一年に始る。即ち同年簡易保険積立金を貸付け、自作農を創定せしめたのである。當時は自作農創定の事業は國家の事業として行つたものではなく、大正十四年までは府縣の事業として行つたもので、町村産業組合も若干其の事業に與つたに過ぎない。府縣等が自作農創定の重要性に鑑みこれに著手したことは多とすべきも、其の効果は未だ大に見るべきものありとはいへなかつたのである。現に之が爲に支出した金額は一千七百萬圓に過ぎなかつた。而かも、其の内簡易保険積立金の中から支出した金額が一千四百萬圓の多きに及んでゐる。自作農創定がこの程度に止るならば其の資金を簡易保険積立金に仰ぐも、實害は生ぜざるかも知れざれども、簡易保険其の物は独自の使命があるのだから、如何に自作農創定が國民經濟上重要であるとはいへ、其の資金をこゝに仰ぐは決して妥當とはいへない。自作農創定にして更に規模を大にし其の速度を増

する時は、到底之にて十分なる資金を得ることは困難といはなければならぬ、政府は昭和元年に至り自作農創定の事業を府縣の事業より國家の事業に移し、二十五年を期限とし簡易保険積立金による低利資金を長期償還の方法で、自作農地の購入をなす者又は之が維持をなす者に償還金並に小作料を超えざる程度に於て貸付け以て其の事業の進捗を圖つたのである。而して、其の外にこれ等の者に對して補助金を交付したのである。其の金額は四億六千八百五十萬圓補助金一億二百九十萬圓を要し、之によりて創定せらるゝ自作農地は約十一萬七千町歩に上り我國の小作面積の二十三分一に達すといふことである。政府は之を以て満足せず尙大規模に自作農を創定せんとし昭和三年自作農地法案を作成したのである。同法案によれば農地金庫を設置し、地主と小作人との間に、土地賣買の契約が成立すると、金庫は地主に對して農地債券を交付して、代位辨済をなすと同時に、小作人よりは年賦償還金を取立て其の償還を完了するに至つて小作人に土地所有權を賦與するのである。農地金庫が農地債券を發行する額は一年八千萬圓を限度とし、而して其の計畫は三十五ヶ年間繼續し之

によりて自作農を創定する面積は六十三萬町歩、農地債券發行高は二十八億圓、國庫の負擔八億七千萬圓に上る豫定であつた。この法案は規模甚だ大にして國庫の負擔重かりしを以て大藏省の同意を得ること能はず、已むを得ず其の規模を大に縮少したが尙之に反對するもの多く遂に實現を見るに至らなかつた。自作農創定は我國農業政策の根幹をなすものであつて其のことにして行はるゝならば國庫の負擔が相當大であつても百年の計よりすれば單に其の負擔が重きの故を以てのみ之に反對すべきものではないと信ずるのであるけれども、この法案には尙夥多の研究を要すべき疑點なしとしない。予輩の見る所に従つて其の問題とすべき點を擧ぐれば左の如し。

一、この法案に由れば政府は農地金庫を通して地主より土地を買ひ求め小作人をして地代農場として償還せしめ其の完了と共に、自作農たらしむる仕組であるやうである。獨逸等にては地代銀行をしてこの事業を遂行せしめてゐるのに、我國では之を避けて自ら當事者たらんことを期した。其の當事者たらんとするには相當の理由がなければなるまいが、其の理由を知るに苦まざるを

得ない。地代銀行が地主より土地を買収して之を小作人に配分するのは單に便宜の爲のみではなく、大に理由のあることである。其の理由の中で最も主なものは土地の賣買等が凡て經濟の法則によりて行はるゝといふことである。換言せば、土地の買收價格も國家の威力によりて不當に廉價に測定せず、其の地方に普通行はるゝ賣買價格に遵據するのみならず、小作人に地代農場として譲渡すに當つて、其の地代の定め方も俗にいふ算盤に合ふやうに高からず低からず適當ならしむることである。若し夫れ經濟の法則に合せざる計算ならば、地代銀行は其の取引に關係しないのである。自作農創定はこの方法による時は其の速度は或は國家自身が其の間に介在する場合よりは遅いかも知れないが、凡て取引等は自然に進行して其の間に無理や強制が行はれないのである。これが自作農創定として最も適當なる方法である所以である。我國で、この方法を採用せず、國家が地主と小作人の間に介入して小作人の爲に土地の價格を代位辨濟するとしたのは、恐くは自作農創定の事業を速に完成せんとする趣旨に出でたことであらうが、其の間に無理が生ずるのではあるまいか、其の無理があ

ればこそ國家は莫大なる財政上の負擔を豫想しなければならぬのではあるまいか。自作農創定も農業家の自力によりて之を行ふことを根本方針とし國家は側面より之を助くる程度に止めて置かなければならぬと信ずる。この點につきて自作農創定論者は十分に研究の餘地があると信ずる。

二、農地金庫が地主より土地を買収するに當り其の土地の買収を如何に行ふか其の買収価格は如何にして定るか。法案によれば地主と小作人との間に賣買契約が成立すれば初めて農地金庫が介入するやうであるから地主と小作人との間の賣買契約の成立は地主と小作人の意思に放任して國家は何等の強制容喙をなさざるやうである。地主と小作人との間に賣買契約がしかく容易に成立するであらうか。これが甚だ疑問ならざるを得ない、地主と小作人との間に小作爭議の頻發する地方では地主は相當の價格なら、土地を讓渡して小作爭議の如き煩累から免れんとする者もあらうが、然らざる地方で地主が其の土地を讓渡することを希望するものがしかく多くあるとは思はれない。後にも陳ぶる如く獨逸にて自作農を創定するには一定面積以上の土地を所有する地主

に對しては強制的に其の分割の土地を讓渡すべきことを命じてゐる。土地所有權の公平を理想とする以上は、當然の政策であつて、この種の強制を用ふるに非ざれば其の目的を達成すること能はざるのであらう。我國でも自作農創定をこの理想の下に計畫せられたなら、大地主から強制的に若干の土地を讓渡せしむることが必要であつたやうである。強制的に土地を讓渡しなければならぬと其の價格にして適當であれば異議を唱ふることはあるまいが任意的に土地を讓渡すとなれば、大地主は故らに土地を讓渡する必要はないもの故之を肯んぜざるものが少くはあるまい。地主をして土地を讓渡することを自由ならしめたのは果して自作農創定事業を促進する上に便宜であつたか聊か疑なきを得ない。謂ふに立案者は自作農創定を小作爭議鎮靜の手段として重きを置き自作農創定の國民經濟上重大なる意義の存することを輕視したのではあるまいか。若し自作農創定が國民經濟上重大なる多くの意義を有するものとしたならば、之を遂行するには全國を通じて公平に行はなければならぬ、公平に行ふといふことは畢竟土地所有權の公平なる配分に一步を進めることを意

味するのであつて、各府縣を通じて同一面積に近い土地を自作農創定の土地となす意味ではない。府縣によりて土地が相當公平に配分せられてゐる所もあり、然らざる所がある。加之我が農業は水田農業を主とする以上地勢により自作農を創定するが爲に譲渡せしむべき土地が必しも均等ならしむることを得ないのは常識に照しても明なる所である。土地の賣買契約の成立を當事者の自由意思に任せたのは同事業促進に適當なる措置といふことが出来るか、一の攻究すべき問題といはなければならぬ。所で之に關聯して譲渡すべき土地の價格は如何にして決定するか、當事者の合意に任すべきか、國家が之に介入して其の價格を決定するものか、こゝに問題があり得る。地主と小作人との間に其の土地の價格の協定につき平和に合意があれば、誠に結構であるけれども、地主は少しでも高く賣らんことを希望し、小作人は少しでも安く買はんことを希望すれば、其の間に容易に價格の決定を見ることは難いのではあるまいか、其の價格の決定にも強制の分子を加ふることの必要があるのではあるまいか。地代銀行が其の間に介入すれば、其の機關をして其の地方の地價等を十分に調

査せしめ之を決定することを得るのであるが、其の機關がなければ之を決定することは容易であるまいと信ずる。

三、農地金庫が土地所有權を其の手に收めて之を小作人に地代農場として譲渡すに當り、其の小作料は如何に決定するか、従前と同じ小作料を徴し若干年の後には其の土地所有權を獲得せしむるのか、それとも新に小作料を定めて之に基きて同様な地代農場たらしむるのであるか、我國の小作料は前にも陳ぶる如くに收益の半以上に上つてゐるのであるから之より上に小作料を徴することは假令若干年の後には其の土地の所有權を得ることが出来るにもせよ、小作人としては到底堪へ得る所ではあるまい。故に大體從來の小作料を以て地代農場の地代(小作料)とするのであらう。所で、小作人にして地價の償還を完了せざる前に小作料を怠納したる時は、地代農場は如何になるのであらうか、一二回其の義務を怠つた丈で、其の土地に對する權利を失ふことはあるまいが、數回之を怠つた時は如何に處分するか、其の點につき明確なる規定を設けなければならぬと信ずる。小作人は經濟力の弱いものであるから、其の規定が嚴であれ

ば却つて苦まなければなるまいし、さればとて社會政策上の見地から小作人に對して比較的寛大にする時には國庫の負擔重くして財政上の負擔輕くはあ
るまい。

これ等の諸點から見ても、問題が農業政策として極めて重大である。研究す
べき疑點決して少くはない。これ等の疑點を十分に解決し置くか否とはこの
問題を解決する上に大に關係があると思はれる。

同法案は大藏省等から異論が出た爲に實現せられなかつたが、自作農創定
其の物は必要の程度を減じたのではない。農村が更生するに當つては是非共
解決しなければならぬのであるから政府としては農村問題の當面の問題の
解決のみに没頭することなく自作農創定問題を解決しなければならぬ。特
に我國の農業は所謂過小農制であるからこの状態を繼續し乍ら農業家の經濟
生活を改良し其の生活の安定位置の向上を庶幾することは甚だ困難であると
いはなければならぬ。幸ひ我國で自作農にして其の利用する土地が少い爲
に他より土地を借入れて小作しつゝあるものは少くない。これ等の者をして

現に小作しつゝある土地を所有せしむる方策を樹つる時にはこれ等の過小農
をして過小農の位置より脱却せしむることを得るのであるから、手を先づこの
方面から染むれば、比較的効果を擧ぐることを得るのではあるまいか、識者の
研究を促さんとするのである。

一五 内國植民

自作農創定は性質からいへば、自作農其の物を目標とするものであるが、之を
稍大規模に行ふ時は結局人口の稠密なる地方から其の人口の一部分を人口の
稀薄なる地方に移し、其の地方の資源を開拓せしめると同時に、これ等の移民を
して相當の收入を得せしめ其の生活の安定を得せしむる効果があるので、古來
多くの國に於て實行せられてゐた所である。之を内國植民といふのである。

内國植民は海外への植民又は移民に對する辭であるが、其の内容は大に異なる所
がある。文明の進みたる國若くは人口の稠密なる國が海外の人口の稀薄なる
國を求めてこゝに其の人口の一部分を移しこゝに新に國を立つることがある、
之が植民である。若くは、其の國にして相當國家の統治權の下にありて、移住者

内國植民

海外移植
民

がこゝに新に國を立つるを能はざる場合には、其の統治權の下に服従し先住者と共に居住することがある、之が移民である。植民地を作ることは困難ではあるが、之を設立することを得れば、いはゞ我國が新に國を設けたことになるので、其の設立後は海外諸國に對して問題を惹起することは少いが、移民に至つては既に外國の領土内に居住を移して其の自然の資源を開拓し又は種々なる業務に従事して収入を得之によりて生活せんとするものであるから、移入國其れ自身と又は先住民との間に種々なる問題を惹起することは想像し得る所である。移民にして移入國の風俗習慣等に同化すれば問題を惹起することはあるまいが、然らざる時は我國の移民が自ら一集團を形成して先住民等と對峙するに至るのである。従つて、先住民との間に競争が生じ、感情の融和を缺くに至ることも想像し得る所である。移出國が政治上強大國であれば移入國は移民の政治上への進出を恐るゝであらうし、従つて事につけて國際問題を生ずることなしとしない。抑も移民問題は移民を移出する國からいへば、比較的輕微なる問題といへる。其の國の勞働力の一部分を喪失することになるが、其の國にして人

移民問題

口稠密にして之が爲に苦しみつゝある場合には、勞働力の一部分を喪失することとは毫も損害とはならずして、却つて利益となるのであるから、大體からいつて輕微の問題であるといへるが、移民を移入する國からいへば、單に勞働力の増加であると樂觀する譯には行かない。其の國の自然資源が豊富であつて勞働力が缺如する爲に之を開拓することが出来ない場合に、移民によりて之が開拓を見るは喜ばしいことには相違ないが、移民にして先住民に比較して開拓等につき遙に優秀のものであつた時は、先住民は競争に敗れざるを得ない、競争に敗れざるまでも移民にして生活の程度低く、従つて低廉なる賃銀に對してよく勞働するものなれば、先住民の賃銀も之に準じて低下し従つて生活上多少の困難を嘗めざるを得ない、移入國としてはこの形勢を放任して顧みない譯には行かないから、必ずや移民に對して多少の壓迫を加ふることにならざるを得ない、而のみならず、凡て社會は渾然として純一なるべきものであるのに、移民の如き異分子が介入する時は、其の純一を破る虞があるので、移入國としては、之を防止しなければならぬ故、こゝに種々なる問題を惹起するのである。かくの如く海外

に人口の一部分を移すことは種々なる問題を惹き起すことになるのであるが、同じ国内で人口の稠密なる地方より人口の稠密ならざる地方に人口の一部分を移しこれによりて其の地方の自然の富源を開拓することを得るは利益こそあれ弊害は伴はないのであるから諸國は之を奨励しつゝあるのである。

内國植民
の必要

自作農創定の爲に地代農場制により土地を所有せしむるは客觀的には土地所有を公平ならしむるものであり、人口の稠密なる地方より人口稀薄なる土地に人口を移植するものであるといへる。されば地代農場は内國植民の一方策といへる。諸國では農業政策其の他の見地よりして内國植民を奨励しつゝあつたのである。国内で一地方より人口の一部を他の地方に移住せしむるを普通の國外植民に對して内國植民と稱するのである。このことは離村する地方にとりても利益であると同時に移住著任する地方にとりても亦利益である。離村する地方にとりて利益である所以は、若し其の地方に必要以上の人口が群居する時は今日の農業にては十分なる労働と之が報酬を給することが出来ず、これが平和なるべき農村をして平和を破り紛擾を來す原因となるからである。

幸ひに、これ等の人口に對し農業以外の適當なる職業労働を授けることが出来れば其の禍源を除くことが出来るが、然らざれば、政府が如何なる方策を以てこれ等の窮民を救済しようとしても其の目的を達することは困難である。現に十九世紀の初め愛蘭土にては人民窮乏を訴えて之を治むることが困難であつた。其の窮乏の原因は一にして足りないが、人口が過剰であつて、之に職業労働を授けることが出来なことが最も重大なる原因であつて、政府が種々なる救済策を講じたに拘らず、其の功を奏することが出来なかつた。政府はこゝに鑑みる所があり、其の地方の人口の一部分を他の地方又は他國に移して、其の地方の人口を減少せしめたのである。其の地方の人口が減少するに及びて初めて前に施した救済策が其の功を顯はすに至つたといふ。これは一例に過ぎないが、この種の事例は何れの國の歴史にも散見する所である。これ等移住者の著住する地方は人口稀薄であり、自然の富源は未だ十分に開拓利用せられざるが故に今こゝにこれ等の來住者を得て其の地方が開拓せらるゝに至らんか、其の地方にとりて大なる利益であることは多くいはずして明なる所である。内國

内國植民
の奨励

植民は或程度までは自然に行はれてゐる。何れの國にても國內にて居住移轉の自由を認めてゐるから、或地方が農業等を營むのに有利であるとする、其の不利なる地方より移住するものがあり、従つて或程度までは内國植民が行はれてゐるのであるが、農業家は商工業者等に比較すると、離村移轉し難いものであるから、政府は相當之を奨励しなければならぬ。前に陳べた地代農場制の奨励の如きは之を促進するに與つて力があるといへる。然るに、近年に至り特に歐洲戦争以降内國植民が大に視聽を引くに至つたのである。歐洲諸國に於ては前世紀の末葉に至り海外よりの農産物の輸入が盛んとなり従つて農産物の價格を激落したものであるから、農村の窮乏年と共に甚しく、輸入税により外國の穀物の輸入を阻止するに拘らず、之を救済することが出来なかつた。所謂社會問題は都市の工業労働者の問題より轉じて農村問題となつた観がある。其の問題は相當複雑である、之が解決は容易ではないのである、自作農創定、内國植民等は之が解決策として相當用ひられてゐたのである。所で、世界戦争が突發すると特に獨逸の如きは食料品の自給自足を計るが爲に沼澤未開の土地を

世界戦争
後の内國
植民奨励

開拓利用するの必要を痛感し、人口の稠密なる地方より人口の一部分を沼澤未開の地に移住せしめ之が開拓に従事せしめた。内國植民は戦前とは稍異りたる意義を有するに至つた。更に大戦終了後は内國植民は盛んに提唱せられ、實行せられた。其の理由は種々あるが、(一)は戦争に参加しても、歸休餘生を送るべき相當の土地がなければ進んで國事に盡すことが難いから、政府も頻りに戦争に参加した者に對して土地を給與すべきことを約したのである、故に政府としてはこの約束を履行しなければならぬ、(二)土地の分配甚だ不公平であつて廣漠なる土地を所有し乍ら自ら之を利用せざるものあるかと思へば、狹隘なる土地に多數の人口が群集し、其の一部のものは生活を託すべき土地を所有せざるものが少くないことを見ては、土地制度を根本的に改革しなければならぬことを叫ぶものが起るに至つた。こゝに於て内國植民は戦前とは全く異りたる意味を以て提唱せらるゝに至つた。更に獨逸等に於ては露國の革命を目撃しては、晏如たることを得なかつた。我國ではこれ等歐洲諸國に於けると同様の意味に於て内國植民を提唱する必要はないから、こゝに之を詳述することを避け